

目次

5頁	一家	
	悪魔憑き体験サービス	
	赤の他人	
13頁	行先	
		A S A
33頁	サイケデリック	
	座布団少女	
		高峰理
43頁	夏空を見上げて	
		壱之字 大
71頁	夢の中の雪	
		野宿 良太
156頁	奥付	
		ジョーズ

一家

悪魔憑き体験

サービス

赤の他人

A
S
A

一家

光の当たらない暗い家に、彼ら家族は住んでいた。外は明るかったが、彼らを脅かす敵が徘徊していたため、迂闊に外出することも出来なかつた。

「もう、今年の冬は越せないかもしれないな」

と、父親が溜息をついた。このあたりに住んでいる一家は、もう彼らを残して死ぬか、この土地を離れていた。

「もう、縁起でもないことをいわないでよ。坊やが怖がついてるじゃない」

と、母親が咎める声をだす。もはや彼らにとつて唯一の子供となつてしまつたその坊やは、おびえた顔で彼らの話を聞いていた。坊やより上の兄や姉たちはみな、家族の食糧を確保するために外へと出ていき、そしてある日帰つてこなくなつたのだ。最初の方はうまく食料を調達できていたのが、今となつてはほぼ不可能になつた。

「たしかにここは冬でも暖かいが、しかしもう何日も食べ物を口にしていない。坊やには優先的に食べ物を与えていたが、それもう尽きそうだ」

父親の表情は硬い。彼は、家族でこの厳しい土地に生きることを決めた張本人だったが、それでも現状は彼が予想していたよりはるかに残酷だった。ここに来る前は大家族だった一家は、ここに來てから次々と減つていき、とうとう父と、母と、そして息子一人になつてしまつたのだ。だから彼は引き際というも

のをここで悟つた。それは本来ならもっと早く悟るべきものだったのだが。

「みんなでここを出よう」

と父親は言つた。もはや道はそれしか残されていなかった。ここは暖かく、豊富な食料がある。だがそれを手に入れるためのリスクを、彼らにはもう払う余裕がなかつたのだ。

「それしかないわね」

と母親が同意した。ここを出れば極寒の世界が待っていると分かつていても、今の彼らには坊やの方が大事だつた。そして、坊やを生き残らせるためには、少なくとも自分たちのどちらかが生き残つていなければならぬのだ。そう、せめて坊やが一人前になるまでは。

「よし、そうと決まれば早く出た方がいい。僕たちの体力が残つているうちに」

「ええ、そうね」

「パパ、ママ、怖いよ」

「坊や、何の心配もいらぬのよ」

「外は寒いけど、ちよつとの間だけ我慢するんだ」

そう言い合つて彼ら家族はそつと外に出た。眩い光が彼らを包んで、彼らは恍惚とその光を見ていた。この光のために、彼らはここに移り住んできたのだ。だが彼らを殺したのもまた、まぎれもなくこの光だつた。感傷に浸っている暇はないのだ。

「はやく行こう。奴らに見つかる前に」

「ええ、早くしましよ」

「ねえママ、あれ何？」

「イヤッ、ゴキブリ！」

突然大きな叫び声が響いて彼ら家族は飛び上がった。ところが彼らが悲鳴を上げる暇もなく、巨大な何かが彼らの頭の上に迫っていた。

家の主人が振り下ろした花柄のスリッパは一瞬で、彼ら三匹のゴキブリたちを叩き潰してしまった。

悪魔憑き体験サービス

暇な日曜日を持って余したエヌ氏が街を散歩していると、こんな張り紙を見つけた。

「悪魔憑き体験サービス 二階で実施中」

と、無機質な黒のゴシック体で書いてある。ちよつとした好奇心と、休日の手持ち無沙汰さから、エヌ氏は試しに寄ってこういう気になった。

「ようこそお越しくございました。今日は体験にいらしたの
で？」

黒いスーツを着た中年の男が、彼を丁寧に迎えた。その態度は卑屈な印象を与えない、洗練されたもので、エヌ氏は気分がよくなった。

「ああ。さつそく聞きたいのだが、このサービスは一体どういったものなんだ？」

「そうおっしゃられるのも当たり前でございます。我々が提供しておりますのは、ほかでは類を見ないなかなか特殊なものですので」

そう前置きをして男は説明を始めた。

「具体的に言いますと、本音を語れるようにさせていただきます
ービスでございます」

「本音？悪魔と関係あるのか？」

「西洋で有名な悪魔憑きをご存知でしょう。温厚な人物がある日突然汚い言葉を吐いたり、暴れだしたりする現象でございますま

す。その原因については様々な考察がございしますが、なかでも最も興味深いのが、それが彼らの本音であるという説でしてね」
その男曰く、悪魔憑きとは本音を抑圧された人間たちがかかる病だという。そういった人間たちは悪魔を騙って、自分の本音を語ろうとするのだという。

「この国にもやはりそういった方たちは存在します。いえ、この国だからこそというべきでしょうか。彼らを救うのが我々のサービスなのですよ」

「具体的にはどうやるんだ、まさか本当に悪魔を憑かせるなんて言わないだろうな」

エヌ氏は興味を惹かれていた。確かにエヌ氏も言いたい本音を持つていたからだ。エヌ氏の会社にはひどい上司がいて、彼は常々腹を立てていたのだ。その上司は平気で人に仕事を押し付ける、手柄を横取りする、自分の失敗の責任をとらないなど、とにかくひどい上司で、いいたいことはたくさんあったのだが、向こうは上司、こちらは部下、全て飲み込んでいたのだった。
「まさか、そんな非科学的なことは申しません。ちよつとした演劇と思っただけだよ」

「どういうことだ？」
「お客様自身が悪魔憑きを演じるのでございます」

エヌ氏は拍子抜けした。それでは自分がおかしくなつたとカタをつけられておしまいではないか。そんなエヌ氏の考えを察したのか、男は続けた。

「もちろんそれでおしまいなどとは申しません。それではサービスにならないではありませんか。我々がする仕事はむしろここらなのです」

「具体的には？」

「お客様が満足いくまで本音をいいた瞬間を狙って、エクソシスト、つまりは悪魔祓い師を派遣します」

「エクソシスト？」

「ええ、そしてその場で物々しい儀式を執り行うわけです」

エヌ氏はようやく合点がいった気がした。

「なるほど、それで今のは悪魔の仕業だったと信じ込ませるわけだな？」

「おっしゃる通り。初回ですので料金は発生いたしません。ぜひ体験なさってみては？」

ううむ、どうしよう。エヌ氏は悩んだ。確かに料金は発生しないが、もし失敗したらと考えると……。仮に彼らが失敗したら恐らく自分に待っているのはクビである。エヌ氏はクビにされるのは嫌だった。ところがそこで、でも、と考える。でもあんな上司がいる職場に、はたしている意味があるのか。せめて本音をいつてから辞めるのも一興ではないのか。それが帳消しになる可能性をも秘めているというのなら、なおさら魅力的である。

「よし、試しにやってみよう」

「ありがとうございます。では早速明日、月曜日に……」

そして迎えた月曜日。登社したエヌ氏は上司に会うやいなや罵詈雑言をまくし立てた。

「この能無し！ 給料泥棒！ ハキダメ野郎！ お前なんか便所に詰まっていやがれ！ ……」

思いつく限りの悪口を言った。ある程度、言い終えて息を切らしていると、黒服に十字架を下げた男たちが入ってきて、金のボトルに入った聖水らしきものを振りまき始めた。儀式が始まったのだ。あつけにとられる上司の前で、エヌ氏はひとしきり暴れると、ようやく収まったというようなふりをした。彼は、うまくいったかなと不安な気持ちでいっぱいだったが、上司は完全に信じ切っているようで、彼の悪口に対するお咎めは一切なかった。

後日、エヌ氏は例のビルに寄った。先日と同じ男が出てきて、彼にこう聞いた。

「いかがでしたか、我々のサービスは」

エヌ氏は答えた。

「素晴らしい。あれだけ言って何のお咎めもないだなんて」

「継続していただけますか？」

「ああ、是非とも！」

エヌ氏はほくほく顔で帰って行った。

そんなエヌ氏を見送ったあと、男は電話をかけ始めた。数回の呼び出し音の後、相手がでる。男はその相手に明るく問いかけた。

「いかがでしたか、我々のサービスは」

電話の相手である、例の上司は答えた。

「ああ、最高だね。辞めちゃう部下も減ったよ。君たちが部下のストレスを和らげてくれるおかげで、僕も安心してこき使うことができる……」

赤の他人

会社からの帰路、人ごみのなかに懐かしい顔を見つけて、アール氏は思わず声を掛けた。

「やあ、こんにちは！」

すぐにしまった、と思う。とっさに声を掛けてしまったが、よく見てみたら全くの赤の他人じゃないか。アール氏は間の悪い気分になって、すこし赤面した。ところが相手の男は、

「お久しぶりですね、アールさん」

と、返してくるではないか。アール氏は思い直す。赤の他人というのは思い違いで、やはりおれはこの男を知っていたのだろうか。実際男は彼の名前を知っていたから、その可能性は高い。

「しかし、よく僕だと分かりましたね。外見は随分変わっていると思うのですが」

「まあ、はい、なんとなくですかね」

男は親しげに話してくる。この男はやはりおれのことを知っているのだ。そう思いかけたところで、アール氏は自分が会社の名札を首から下げていたことを思いだして、はたと気づく。この男はやはり赤の他人なのではないか。おれだって見知らぬ誰かに突然親しげに話しかけられたりしたら、相手が誰なのか必死に思いだそうとするだろう。相手が名札か何かを下げていたら、ここぞとばかりに利用するかもしれない。だとすると、とアール氏は考える。おれは厄介なことに巻き込まれたわけだ

な。いまさら、実はあなたのことは知らなかったのです、間違えて声を掛けてしまったのです、などと言えるわけがない。こちらにも彼を知っているふりをし、向こうも自分のことを知っている体を演じるとしたら、それはとんだ茶番である。と、すると、適当に話を切り上げるのが彼にとつて最善の策だった。ところがそこで、アール氏が苦い顔をしているのを気にしたのか、男が再び話し始めた。

「そんな難しい顔をなさらなくても、約束でしたらきちんとさせていただけますよ」

アール氏は、おや、と思った。今の発言から考えると、やはり男はおれの知っている人間なのか。ただおれのことを知っている体で話を進めようとするならば、そんなことを言い出す必要はないはずだ。だとすると、おれには何の覚えもないのが、この男はおれとなにかの約束をしたのだ。とそこまで考えて、アール氏は、

「ええ、よろしくお願いします」

と話を合わせた。結局、約束がどんなもので、いつしたのか、はたまた、目の前のこの男がいったい誰なのか、アール氏は全く思いだせなかつたが、男が自分の知り合いだということがあらかた確定した今、アール氏がすべきことは自分が男のことを覚えていないという失礼な事実を彼から隠蔽することだった。「くわしい話は今度食事でもしながらしましょう」

「ええ、また後日」

しばらく談笑した後、そう言い合って2人は和やかに別れた。男は、目取りは自分に電話して連絡してほしいと言いつ残した。アール氏は久しぶりにいい気分になる。家に帰ったらじっくり彼のことをおもいだそう、などとアール氏は考えた。気持ちの良い男であったし、今まで忘れていたのが不思議なくらいである。

あとがき

たのしかったです。

そんなアール氏の背中を、男は恨みがましい目で睨みつけて、こんなことを心で呟いていた。畜生、あいつめ。おれはあいつの強請(ゆすり)から逃れるため顔まで変えたというのに、だのにあいつは平気で見破ってきやがった。こうなったらもう、殺し屋を雇うしか……。

行先

高峰理

無知であることは罪であり、無知であったことは罰である

1

「これから、みなさんに大変残念なお知らせがあります」

下校前のホームルーム。いつものように気怠い6時間目を終え開放感で賑わう6年3組の教室内は、先生の一言により瞬間に凍り付いた。普段お調子者の田中も、饒舌な上田さんも先生の突き刺すような瞳から何かを察したように口を閉じ前を向く。

「それじゃあ早川さん、事情を話して」

「はい」

教室の最奥部とも言える窓際の最後尾に位置する私からは斜め前に位置する早川さんが起立する。クラス全体を見渡すように後ろを向いた。

「えっと……私の……私のリコーダーが……」

嗚咽混じりの声に皆が異常を察知した。顔を見れば頬に涙が垂れているのが一目瞭然であった。

早川さんはあるものを引き出しから取り出した。頭の欠けたリコーダー。筒のようにぼつかりと穴の空いたリコーダーであ

った。

「これなんですけど……なくなっちゃって……」

時計の針のみが徒に音をたて、クラスは黙って彼女を見つめていた。早川さんのリコーダーが紛失したことの意味、何故頭だけが紛失したかを理解した者、そうでない者、一同が黙って彼女を見つめていた。

「無くなったことに気が付いたのは昼休みその後、5時間目の始めだったそうです」

嗚咽を漏らし涙を流す早川さんの現状を見据えてか、先生が事情の補足を始めた。

「引き出しにしまっていたから、教科書を取り出すときリコーダーケースが開いていたことに気が付いたそうです。中を確認したらそこにあつたのは先の無いリコーダーだったそうです」

私たちが使うリコーダーは3つの部位に分断できる仕様となつているため、「先」とはその上部を指している。吹くために必要であり、唇をあてる上部のことを。

「これが何を意味するか、それはみなさんで考えてください。どんな事情であれ、私は誰かが盗みを働いたという考えは持ちたくありません。私はみんなを信頼しています。でも、教室にはどこにも落ちていませんでした。もちろんこの中にはそのような人はいないとは思いますが、人の物を盗むという行為は絶対に許されない行為です。10年20年と経ち、いつかその人が社会に出たとき——」

先生は窃盗が如何に重罪であり社会的に許されざる行為で

あるかについて語り始めた。結局建前では信じていると言って
も私たちは今疑われているのだ。そして特にこの場合疑われて
いるのは男子の方だろう。私は右隣の本田さんに目を向ける。
彼女もまたその信号を受けこちらに首を向け「早川さん、可哀
想だね」と小声で呟いた。私は「そうだね」と生返事をする。

「盗んだ人は早川さんのことが好きだから、なのかなあ」

本田さんはクラスメイトの諸々の事情に耳ざとい。恋に関心
高き乙女なのだ。きつと今も男子の中で早川さんに気がありそ
うな人は誰だったかなどと思い返しているのだろう。

「好きなら直接言えばいいのにね」

「直接……」

言いたいことがすべて直接伝えられたら、どんなに楽なこと
だろう。誰もが直接伝える勇氣を持っていたら、それはどんな
に救われることか。言えないのだ。言いたいけれどもいえない
ことが、あまりにも多い。

「それができないから、そうしただと思う」

「うーん、そういうものなのかなあ」

今まで気になった男子には迷わず言葉をかけて続けてきた本
田さんにとっては理解し難い話かもしれない。

本田さんに限ったことではない。クラス中の皆が今、犯人の
心当たりを辿っているだろう。いや、もしかしたら全員ではな
いかもれない。クラスの中に犯人がいるとすれば、一人だけ
おびえているかもしれないし、或いは悦んでいるかもしれない。
罪を犯した人の気持ちというものはよくわからないが、きつと

皆とは違う異質な何かを感じているのだろう。

先生の訴えとクラスのざわつきの中、私はある一つの期待を
胸に抱いていた。

もし、山本が犯人だったら？

檻は目に見えぬ悪意を生み、籠は見かけの善意を

生む

2

山本颯太は私の一つ前の席に位置する。6年生も始まって2
ヶ月が経とうとしているものの、未だ席替えは行われず出席番
号順となっているが故の一つ前の席である。

基本的に席は男女で隣同士、加えて男女配置を交互にするこ
とで前後にも異性が座っている。私はこのシステムに毎年うん
ざりしていた。私の周囲に「男」という生き物は不要だし、私
が必死で保とうとしている平静の崩壊を招くからに他ならな
い。

そんな中、出席番号が最後の私に与えられたのは、一人席と
いう特権であった。隣に男子がいないことに少しだけ救われる。
一人でいられることに少しだけ安心する。

静かに生きたい。

いつからかそんな願望を抱えていた。何故か周りが自分より年下に見え、何故か周りが雑音に聞こえ、私はそれから逃れたと思うようになった。自分だけが違う場所に居るような、居るべき場所ではないような、そんな感覚を持つようになった。結果から言うと今の今までそれから逃れることはできていない。

一年前の話である。席は丁度今と同じような構成。前には出席順により山本が座っていた。5年生の頃も、彼と同じ教室だったのだ。ある朝私は席について気づいた。引き出しにしまった自分の本が無いことに。

「あれ、渡瀬、いつもの本はどうしたんだよ？」

山本が私に言った。前の席からはこちらの引き出しが見える筈もないのに、だ。

「渡瀬が本を忘れるなんて、今日は何か変なことでも起こりそうだな」

周りに笑いが巻き起こる。私は無言を通した。既に私の身に起きていることはなんとなくではあるが理解していた。理解した上で、無言を通した。これに反応したら負けだ。ムキになったら迷惑通りだ。騒ぎになれば私の平静は乱れる。私はクラスで注目を浴びてしまう。どんな目でみられるのだろうか。その際私という存在はみんなからどのように映っているのだろうか。

気持ち悪い。

みんなからいろいろな見方をされるのが、ただただ気持ち悪い。そうして湧き上がる無意味な反抗心や、根拠のない不安が私に黙ることを強制させた。

本は教室の後ろに置いてあった。学級文庫と紛れていたが図書室のシールが張られていないものが一冊だけあったことから容易に発見できた。

ただのいたずらとして終わればよかった。しかし私が意地になつてとつた「無言」という反応が、ただのいたずらをエスカレートさせるには十分な材料であったことに、その時の私は気づかなかつた。

「おいおい、物は大切にしようぜ？」

ある朝私が本を開いたら、とあるページが破れていた。ゴミ箱を確認したら案の定破けたページがそこにあつた。

「渡瀬さん、教科書は？」

算数の教科書が無くなった。仕方がないから忘れましと先生に嘘をついた。

「渡瀬さん危ない！」

掃除中、気がつけば私は水の張ったバケツに足を突っ込んでいた。いつの間にか現れたそのバケツに。

「山本君、絶対わざとやったよね」

班のリーダーである坂本さんは私が置かれている現状を理解しつつあつた。面倒見の良さからか、私を気にかけてくれた。しかし私はその都度、

「大丈夫だから、心配しないで」

と救いの手すらつかむことを拒んだ。

全て主犯が山本であることは分かっていた。それに協力するものがあることも分かっていた。そして動機も確証はないがわかっていた。私がクラスに消極的であることが大体の理由であることは分かっていた。

彼は無反応を通す私が挫けるのを純粹に期待していたのだ。そつちがその気ならこつちも、といった風に対抗心を燃やしたに違いない。どちらもムキになっていたのだ。双方得しない、全く以て無意味な争いが繰り広げられていたのだ。

私が先生に、誰かに被害を打ち明けていれば、ことは何かしらの流れを以て解決したに違いない。先生からの単なる注意で終わるかもしれないし、学級問題にまで発展し、授業時間を割いて話し合いをしたかもしれない。なににせよ、私と山本がクラスの話題になってなんらかの事をして解決したはずだ。しかし私はそうなることを望まなかったのだ。

静かに生きたいから。

そんなくだらない理念に拘泥し、私は被害を受け続けていた。要するに自業自得なのであった。されて当然なのであった。すべて全て分かっていた。

学年が変われば、人も、環境も、変わるから。

そんな曖昧な期待を胸に、私は小学5年生を全うした。

そして迎えた6年3組。一人席は特権になるはずだった。

後悔は過去の自分の殺害であり、変化とは転生である

3

帰りの会が終わり、下校時刻となった。先生は一通り話し終えた後、心当たりがある人は報告するように促した。さような挨拶がクラスの淀んだ空気を物語っていた。

そうして30分も経たない内に、クラスは私を除いて人ひとりいない状態となった。木曜日は職員が会議をしているため、廊下もまた静かだ。私はこの木曜放課後の静けさがたまらなく好きであった。誰からも干渉を受けず、誰からも何も言われない。時計の針とページを捲る音が絶妙なセクションを奏で私の居場所を創る。揺れるカーテンが静止した教室を少しだけ賑わす。そんな唯一の空間が私は大好きなのだ。ここで本を読んでいるときだけ、私は私として満たされているのかもしれない。

「やつぱりここにいたんだ」

不意に透き通るようなその声が私の空間に入り込んできた。さつきまで、つい30分ほど前まで嗚咽を漏らして泣いていた

はずの、あの声が――。

「早川……さん」

本田さんの机に乗り右ひざを抱えるその姿は確かにクラスメイト早川咲のそれであった。

しかしなんだろうか。この奇妙で異質な感覚は。何かが普通でない。

「もうとづくにみんな帰っているのに、どうしたの？こんなところ」

「あ……いや……」

彼女は笑みを浮かべた。苦渋や苦悩や困惑や当惑の表情ではなくある種の余裕すら感じ取れる笑みを浮かべていたのだ。この状況で？ あの後で？

「本……静かに読めるから……」

「ふうん」

早川さんは机に座って浮いた左脚を退屈そうにぶらぶらと動かす。いつもの彼女ではない。いつもの、「クラスの憧れ」である彼女ではない。

「何読んでるの？」

「えっ」

まずい。私がされて嫌な質問の断トツ1位が来てしまった。そもそもタイトルや筆者を教えて理解してくれた相手などいっただけ聞いて「知らない」だとか「難しそう」だとか興味なげに退いていくのが大抵の場合であり、私はその味気ない対応が心底嫌いだ。

早川さんは「んー？ どれどれ？」と興味津々に私が開いている本の中身を窺うように首を動かす。私は咄嗟に本を閉じ胸元に手を引く。

「いいじゃん、見せてくれたって」

ちえ、と早川さんは冗談めかしくふてくされる。

「いや……あの」

「うそうそ冗談冗談。嫌だったら別にいいよ」

「……」

分からない。何もかも。彼女の意図。彼女の言動。彼女の本心。そのすべてが私の理解の範疇を凌駕している。

「本、静かに読みたいんでしょ？ 私のことは気にしないでいいから」

「え……」

無理な話である。思考回路が混線しきっているこの状況で読書がはかどるはずもない。無理に字を追ったところで内容など入ってくるものか。そこに早川さんがいるからということも理由の内だが、仮にこの状況で彼女が去ったとしても私の中では問題が何一つ解決しないまま、もやもやを残すことになる。結局、自分から聞き出す勇氣もない私は、彼女が口を開くのを待つしかなかった。

「……」

「……」

沈黙が続いた。たった数分の筈なのに、時計の針の進みが遅く感じる。無音が苦痛を与える日が来るとは思わなかった。辛

抱が持たない。

「渡瀬さんはさ」

「え？」

不意に私の名前が呼ばれ沈黙が破れたため、体がびくりと反応してしまった。

「どうして、その……なんていうかさ、みんなでやるーってときに、あんまり乗り気じゃないの？」

「それは……」

「去年、私違うクラスだったけどちよつと聞いちやってさ。運動会のダンス練習、2組の人数だけそろわないことが多いのかなとか」

5年生は運動会にて、クラス毎に創作ダンスを披露する。体育会系の雰囲気になじめないと踏んだ私は「振り付けはもう覚えたから練習に行く意味がない」などと体育委員に言ったのだ。当然私は体育委員からは邪険に扱われ、クラスから浮いた。実害は無かったため周りから攻撃を受けることは一人を除いて無かったが、皆に悪印象を与えるには十分過ぎる行為であった。

「あんまりそういうことばっかやってると、友達減っちゃうと思うんだけど」

「友達と呼べる友達は、もともといないから」

「あ」

しまった、と言わんばかりに頭に手を当てる。彼女の今の動

作や言葉遣いは、何というか、過剰だ。オーバーリアクションというか、ある種のわざとらしさを感じる。

「ごめんなさい」

「大丈夫、もう慣れたし」

「……」

私の余りにそっけない態度がついに彼女を押し黙らせてしまった。

こういう、ことなんだろうな。

こういう態度が、私に友達ができない理由なんだろうな。常に冷めたような目であらゆるものを見下して、一人で勝手に優越感に浸って、自分だけの世界を作ってしまう、こういうところが孤独を生むんだろうな、と私は独りでに悟る。

「だって渡瀬さん、周りがバカに見えるんでしょ？」

「え？」

不気味な笑みを浮かべたまま、早川咲はそう言った。

「そんなんじゃない」

「知ってるから。渡瀬さん、いつつも冷静なのは熱くさせるものがないからでしょ。周囲の誰もが幼稚に見えて、バカに見えて、自分はそれより上に立っていて、わざわざ相手するのが面倒だからって自分から避けてるんでしょ」

「やめて」

彼女はやめない。

「見下して優越感に浸るのつて誰でもできるものね。勝った気になるのは勝つことより容易なものね。自分が周りより優れていると思ひ込むのは自由だし、そうすれば気が楽だし」

「やめてつて」

彼女はやめない。

「現に渡瀬さん、頭いいもんね。学力的な面でも見下せちゃうし、資格は十分にあると思うよ」

「ねえ」

彼女はやめない。

「周囲のなすことすべてが下らなく思えてさ。友達はごっこ遊びに見えてさ。集団は馴れ合いに見えてさ。どこもかしこも自分の居場所ではないかと思つたりしちやつて——」

「やめてよ！」

怒号。私の声だ。抑えきれなくなった私の声が、二人しかない教室中に響き渡つた。早川さんがやめないからだ。彼女が、私を、挟むのを、やめない、からだ。

「もう……やめてよ」

真つ白になつた頭に降り注ぐのは、焦りか、苛立ちか。

見透かされていたのだ。私の全てを。

大人ぶる私を子供だと嘲笑していたのだ、彼女は。

大人でありたいと背伸びしていた私は実は子供で、彼女はそ

んな子供をあやすような目で見ていたのだ。

彼女は、早川咲は全てを知っていた。

「クラスに反抗的だったのとか……そういうのは……謝るか……だから——」

「私は謝罪を要求してる訳じゃないんだけどさ」

「じゃあ、どうして……」

どうして私を揺さぶつた。どうして私を狂わせた。

「あはは、想像以上に応えてる」

依然として冷たい目つきの彼女は静かに微笑した。

「いやいや、苛めたかったわけじゃないから」

「そんなわけ……！」

「ほんとだつて。ただ同じ匂いがしちやつて、もしかしたらと思つたんだけど」

「同じ匂い？」

「同族嫌悪つてやつ」

同族……？ 誰と誰が？

「私と渡瀬さん、似た者同士かなつて」

「え？」

彼女から放たれたのは予想だにしない一言であつた。

「私？」

「そ、渡瀬さん」

「だつて、そんなわけ」

さつきまで私を見透かしたように、嘲るように話していた早川さんがそんなわけ——。

「だから同族嫌悪って言ったじゃん。私、自分が嫌いな」

「そんな……」

戸惑いつつも私はそれを聞いて一つの確信に至りつつあった。

どっちが本物であるか。

みんなの憧れでみんなの範例でみんなの理想でみんなの代表であるいつもの彼女と今の彼女。

どっちが本物であるか。私は確信に至りつつあった。

「早川さんは……猫被ってんだ」

「それは人聞きの悪い言い方だわ。まるで普段の私が作り物みたいな言い方。私は私よ。普段のも、今のも、どっちも私」

「でも！」

「二つあるのよ。本心を覆うようにいつもの私があるんじゃないやなくて、二つ並んでいるの」

「そんなの……」

どう違うというのだ。皆を騙すこととどう違うというのだ。

「いいじゃない。みんなは普段の私に満足して、私もそれに満足している。何もおかしくないじゃない」

「それは……」

言い返すことすらできない。完全に彼女のペースに飲まれている。完全に私という意思が掻き乱されている。

「感じるころまでは一緒なんだよ。周りが馬鹿馬鹿しく思えたり、幼稚に見えたり。違うのはその先。そう感じてどうする

か、だと思うの」

「どうするか……」

彼女がとった生き方とは、つまり――。

「実際に上に立っちゃえばいい、って」

「……」

クラスの誰もが自分を見上げるような存在になってしまえばよい。みんなの憧れでみんなの範例でみんなの理想でみんなの代表であればよいのだ。

「実際、初めの頃は苦労した。必死に聖人になろうとする自分と、それを間近で見つめる私。どっちが本当の自分なんだか分からなくなっちゃって、ただ気持ちが悪かった」

演技をするということは、演じている自分を観測する自分が同時に存在するということに他ならない。

「でもね、慣れちゃえば案外心地良くて。みんなが馬鹿みたいに私を頼ってくれることに、不思議と充実感を得られてきて」

「そんなこと……」

私にはできない。私は自分を偽ることができない。かといって他人に正直になることもできない。中途半端で有耶無耶な存在だから。どっちつかずで、曖昧な存在だから。

「だから昔めに来たんじゃないかって、お話ししてみたかったの。教室の中でいつも渡瀬さんだけ何か違う感じして、去年の話とかいろいろ聞いていく内に、ああ私と似てるなって勝手に思い込んで」

「私と……話？」

「その本、読んだんだよ」

「え？」

手に持っているのは、太宰治の『人間失格』。ただ、読んでいると大人びて見えるから。実はそんな下心により購入した一冊であり、何が言いたいのかはよくわかっていない。

「渡瀬さんと、話したくて、読んだ」

「そんな……」

「山本君のこと、いろいろ大変だよ」

「なっ」

何故、今、その名前を出す？

散々私を扶って、果てに何故山本の名が出る？

「ごめんね、助けてあげられなくて」

「な……んで」

何故——何故それが私の自業自得だと知っているくせに、謝る？

「ずつと気になってた。渡瀬さんのこと。渡瀬さんを困らせていること。でも味方にはなれなかった。私はみんなの味方だから。教室では、渡瀬さんに近づけなかった」

「あ……」

私は、どう受け取ればよい。突然に打ち明けられたそんな言葉、信じるものか。また私を陥れようとしているのだ。また私を揺さぶって意のままの玩具にしているのだ。

「あああ……」

そう思っている。そう思っている筈なのに。

「あああああ……」

彼女は、早川咲は、さつきまでとは打って変わり、今まで見たこともない暖かい目で私を迎え入れているのだ。

「あああああああああああああ」

堰が切れた。今まで溜め込んでいた全てを、今まで背負い込んでいた重荷を、今までまとわりついてきた枷を、全て葬るかのごとく、私は早川咲に、ぶつけた。

涙が止まらなかった。悲しみの涙でも、安堵の涙でもない。訳の分からない涙。混乱の果ての涙。

早川さんはそんな私の頭に手をあて、ひたすらに謝っていた。ごめんね、ごめんねと。

自分がみともないことは分かっていたが涙のやり場がない以上どうしようもなかった。

どうしようもなく、どうしようもなかった。

■

何分くらい、そうしていただろうか。

ようやく涙が収まった私は、時計の針が職員会議の終了間際を告げていることに気付いた。あわてて教室を出て、帰路に立っていた。

隣には、早川さんがいる。

私は彼女に心を許したのだろうか。自分でもよく分からない。よく分からないけど、何故か一緒に帰っていた。

「早川さん、今日はごめん」

「ん？ 何に對して？」

「その……見苦しいところ、見せちゃって」

「ああ、それはこつちもごめんなさいだよ。キツイこと、言っちゃったし」

「でも、早川さん、あんな事件もあつた後に——」

彼女は彼女で悩みを抱えている筈なのだ。盗まれたリコーダーの一部。その犯人は誰か。

「ああ……ふふっ」

「？」

何故微笑む？とても笑っていられるような状況ではないはずなのに。再び余裕げな表情でこちらを見ている。

「あれ、誰も盗んでないよ」

「え？」

今彼女は何といったか。まだ落ち着いていない私の精神に追いつきかけをかける一言であつたような気がする。盗んでいない？誰も？

そう言つて彼女は鞆からあるものを取り出した。

「それ……」

リコーダーの先の部分。無くなつたはずの、先の部分。

「どうして……」

「山本の鞆に入れようよ」

「え？」

「私たちで、山本を犯人に仕立て上げちゃおうよ」

既に受容しきれなくなっている私の精神にとどめをかける一言が放たれた。

私の心はあっさりと言に染まつた。

背負う罪こそが大人の証である

4

一晚、考えていた。

家に帰るなりベッドに飛び込んだ私の右手には、先しかないリコーダーがあつた。

早川さんに、渡されたものだ。

『最後は自分の意思で決めて』

そういつて彼女は私にこれを託した。

明日の朝、抜き打ちの持ち物検査を行う。早川さんが先生にお願いしたそう。山本は朝の会が始まるまでいつも外で遊んでいる。彼が教室にいないその時間を見計らつて私が彼の手提げ鞆に入れる、という寸法だ。もしその意思、つまり山本を犯人に仕立て上げる気が無ければ、早川さんに返して彼女が自分の勘違いだったという旨を告げれば何事もなく終わる。すべてが計算されていた。

早川咲にしかこなせない芸当である。もし私が同様に、リコーダーを無くしたとして、そのことを先生に告げたら、信頼してもらえらるだろうか。もし私が持ち物検査を抜き打ちでしてほしいと頼んだら、先生は受理してくれるだろうか。うまくいく確証はない。まず疑われるだろう。「本当にないの?」「よく確認した?」などと問い詰められるだろう。

しかし彼女は違う。教員からも絶大な支持を誇る彼女である。疑うものなどまじないだろう。事実帰りの会での彼女の涙を疑ったものなど誰一人としていなかった。私含め、誰一人。

「……」

思い返した。山本にされたことを。思い返せば思い返すほど、一つの答えに近づいて行つた。

少しくらい、いいじゃないか。

少しくらい、痛い目を見ても、私は悪くない。それ以上に私は苦しんでいるのだから。他人の痛みを知ってもらう絶好の機会じゃあないか。

だから、一度くらい、いいじゃないか。

現状を脱却できる希望への興奮、それを阻む罪の意識。せめぎあつてぶつかり合っているうちに、この世で最も長い夜は明けた。

朝、いつもより15分早く学校に着いた。登校は班でしているが、今日は急であつたため、母から登校班長に先に行くことを伝えるように頼んでおいた。教室には早川さん含めた数名の女子。早川さんの机を囲うように、女子たちは会話をしていた。

私の着席を確認して、早川さんは立ち上がり「ちよつとトイレ」といい教室を出た。当然囲いの女子は彼女に同行する。あつという間に教室には私一人になった。

本当に、彼女にしかこなせない芸当だ。教室の空気を支配しているといつても過言ではない気がする。

トイレといつても持つ時間は長くても10分程度だろう。それに今から来る人だっているし、校庭から戻ってくる人もいるかもしれない。

今しかない。今、私がやるしか――。

ぐるぐると頭の中で何が回り出す。もし私がやったらどうなる? 私は、早川さんは、山本は、どう変わる? 何が得する? 誰の得になる? 山本はクラスからどういう目で見られる? いやそもそも山本が自分がやつたと罪を認めるはずがない。やつてないのだから。犯人は誰でもないのだから。もし反論が通つたら、どうなる? 次に疑われるのは誰だ? しかし、早川さんのことだし何か考えがあるのかもしれない。山本を貶める決定打を持っているのかもしれない。決定打などなくても彼女が犯人だといえはクラスは納得してくれるかもしれない。しかしそんなに都合よくことが進むだろうか? 持ち物検査で山本の手提げ鞆からリコーダーの先の部分が見つかった瞬間、先生はどんな反応をするのか? 怒り狂って別室に連れ込む? 冷静に事実を確認する? 分からない、わからない。ワカラナイ――

表面しか見えないとは、時に幸であり、時に不幸

でもある

5

「昨日の一件を踏まえ、今から持ち物検査を行います」

朝の会は昨日の帰りの会と同じように先生の一言により凍りついた。文句を言う者、焦りが顔に浮かんでいる者、各々良い気分でないことは確かだ。

疑われているのだから、誰よりも児童を信じるべきである担任教師から、懐疑の念で迫られているのだから。

「みなさんを疑つての検査ではありません。みなさんを信じているからこそ——」

もはや先生の言葉など耳に入らない。すべては早川咲の思うままに動いているとしか感じない。

凍り付いた後ざわつき始める教室。焦りや不安や苛立ちが混在したざわつきである。

「では席の順番から——」

「その必要はありません」

不意に私の視界から先生が消えた。前の席に着いていた人が

立ち上がったため背中では遮られたのである。

山本の、背中だ。必要はない、と言ったその声は確かに前にいる山本から発せられた。

何か……おかしい。何か予期しない展開が待っている気がする。何か起きるべきではない展開が起きようとしている。見られていた？ 今朝の私の一瞬を。或いは誰かが見えていてそれを山本に伝えた？ どっちにせよ矛先は私に向かう。「犯人は渡瀬です」と数秒後に山本が言う。きつとそうだ。終わったんだ。失敗だったんだ。早川さんはどう庇ってくれるだろうか。或いは見捨てるだろうか。どっちでもいい。本当の意味で私は自分の居場所を失った。そうして私は誰からも受け入れられず社会から除かれる。次の一言で私は私でいられなくなる。そうだ山本、いつそ私を終わらせてくれ。一思いに私を殺してくれ——

「犯人は——俺です」

勝ち逃げなど存在しない。逃げることは最大の敗

北だ

6

朝8時ジャスト。登校班の下級生が寝坊しがちなので遅めの登校である。クラスに入るとほとんどの椅子にランドセルが引つかかっている。教室にいるのは一部の女子だけで、ほとんどが校庭でサッカーや鬼ごっこをして遊んでいる。

いつも通りの風景だ。いつも通りになつてしまつたのだ。前の椅子にだけランドセルが掛かつていない、この風景が。

「もう2週間になるね」

珍しく教室で席にしている本田さんがそう言う。そういう日は算数の宿題の答え合わせがあつた。本田さんはそれを忘れていて慌てて今やつているといつたところだろう。

「山本君、たしかにちよつと危なかつたけど、そういうことする人だとは思つてなかつただけだなあ」

本田さんは溜息交じりに呟く。

山本は、あの日以降学校に来ていない。先生に欠席の連絡は届いておらず、電話にも応じなかつたため、欠席2日目に山本の住むマンションを先生が訪ねたそうだ。呼び鈴にはもちろん応答せず、鍵もかかつていたらしい。問い詰めても問題は深刻化するという教員たちの意見から、しばらく様子を見ることになつた。

そうして2週間。それは様子見というには余りにも長すぎる経過であつた。

どうして、あのかき山本はあんなことを言つたのだろう。

どうして、自分で罪を被つたんだろう。

どうして、涙を流していたのだろう。

何も分らないまま空虚な時間だけが過ぎていく。登校する度、前の椅子にランドセルがかかつていないことに不安になる自分と安堵する自分がある。罪悪感とは少し違う、気持ちの悪いわだかまりが残っている。

山本が嘘の自白をした直後、クラスの誰もが驚きを隠せずにいた。「そんなまさか」「山本つてそういうやつだったつけ」「ありえない」「信じられない」そんな意見が飛び交い、クラスは喧騒に包まれた。その後山本は個室(職員室の隣)にある相談室に連れていかれ、その後のことは分からない。戻つてきたのは先生だけで、山本は家に帰つたと言つていた。

そうして、全てが謎のまま、今日も朝のホームルームが始まる。いつものように定刻少し前に先生が来る——はずなのだが、姿を現さない。先生がこの時間にもこないとは、珍しい。

クラスが雑音で支配されてから10分程が経過して、ようやく先生が来た。駆け足で息を切らして来たことから、何か様子がおかしいことが分かつた。

「みなさん……落ち着いて聞いてください……」

みんなが先生に目を向け黙る。

「山本君が……山本君が……」

「アメリカに……転校しました……」

時に目は口以上にものをいう

7

先生が異常に気付いたのは昨日の夕方であった。あの日から2週間、山本のことを案じて毎日電話をかけることは欠かさなかったそうだ。ところが昨日かけた電話は応答が違った。予想していた留守番電話ではなく、その番号が現在使われていないという答えが返ってきたのであった。すぐに異常を察知した先生がまず向かったのは山本のマンション。大家さんに尋ねたところ、丁度数時間前に挨拶を終えて空港に向かったとのことであつた。

空港——つまり海外であつた。

何も伝えられていなかった先生は、すぐさま学校に連絡し、事態を述べた。

校長はこの事態を知っていた。山本の母は校長に相談しに来て、学校ではない別の場所で内密に話を進めていたのだ。

児童に知られないために、担任の先生にすら伝えないことを徹底した。

教室に来た校長が、私たちにすべてを打ち明けた。そしてただ一言「申し訳ない」と頭を下げながら言った。

「そんなの……逃げだよ」

気が付けば私はそんな言葉を口に出していた。

「まだ私……謝ってないじゃん！」

何一つ終わっていない。

「まだ謝ってもらってないじゃん！」

互いが罪を認めることもなく。

「そんなの……卑怯だよ……」

互いが許すこともなく。

「ダメだよ……そんなの」

全てを、投げ捨てただけだ。

引越しの知らせを聞いた私は、今頃になって自分のしてきたことを振り返る。自分の愚かさを悟る。復讐なんて聞こえはいいかもしれないけど、そんなの、誰も得しない。負う罪が増えるだけの、無益な行為。少し考えれば分かっていたことが、分からなかった。自分を見失っていた。失う自分なんてとも無いようなものなのに、見失っていた。みんなと同じ、ただの餓鬼だ。幼稚で、馬鹿で、どうしようもなく小学生で。

「終わりじゃ、ないから」

絶対、このまま終わらせるものか。私はまだ何も聞いていない。私はまだ何も話していない。このままで終わってはいけない。一生背負っていくことになる。一生、許されないまま、大人になれないまま過ごしていくことになる。

終わっては、いけなかったのだ。

私って誰？

いつまで私は、こんなことをしているんだろう。

「ごめんね委員長。遅れちゃった」

「気にしないで」

これで進路調査の紙を提出していない者はいなくなつた。担任から催促され、クラス委員である私が未提出者に催促する。面倒事が全て私に回ってきていたのであった。

委員長というのは私に付いたあだ名だ。委員「長」という役

柄は存在しない。敷麗しきれい高校ではクラスに一人、クラス委員とい

う存在を設けている。勉強が主体の進学校であるため、部活動及び委員会活動は学内で好成绩を叩きだしている者のみが許される活動となつている。クラス委員はその中では異質な存在であり、クラス内で最も成績の高い者が自動的に割り当てられる役職となつている。成績で選出するというのはよくできたシステムである。選出を避けようとして試験に無気力になれば、それは自らを滅ぼすことになるのである。数字は小さくなり、推薦からは一步遠ざかる。つまりは強制でやらされているのだが、私はそれに何の苦も感じていなかった。

私、早川咲は依然として頂点に立ち続けていた。

環境や括りが変化したところで私の立場は変化しなかった。偏差値72の名門私立高といつてもそこにいるのは「偏差値72の高校に受かる」人間である。ピンからキリなのだ。登つて

みれば、たいしたことはない山であつた。みんなの憧れでみんなの範例でみんなの理想でみんなの代表である私に自然とつけられたあだ名が委員長なのであつた。

「私今、楽しいのかな」

窓越しに見る景色が帰宅を勧めていた。期末テスト前日である現在、茜色の夕焼けは学校で見るとき景色ではない。一刻も早くテスト勉強をしなくてはならないのだ。

「まあ、あんまり関係ないけど」

授業ごとに予習復習を欠かさない私にはテスト直前にあせる要素は無かつた。少し見直す時間さえくれれば問題はない。

私立らしい無駄な大きさを誇る門を出て、駅へと歩いた。周囲にはひたすらに田畑が連なつている。閉塞的な環境である。あくまでも勉強のみに意識を集中させるための立地であり、これもまた私立にはよくあることであつた。

「……」

何もないと、決まつて何かを考えてしまう。

4年ほど前だったか、私は揺らいでいた。自分を疑うきつかけとなる人が現れたのだ。彼女は私と似ていた。否、似ていたなんて私の思い込みでしかない。「外側」は私と対照的であつたのだ。口数は少なく、目立たず、周りとの協調性に欠けるような、どちらかといえば苦手なタイプであつた。しかし彼女をそうさせる理由に、私は勝手に共感を覚えてしまった。どうしようか迷つた。迷い続けていた。私の脳内を彼女に曝け出して、そして何になるのか。私はどうなるのか。分からなかつた。だ

が、何かが変わる気がしたのだ。頂点に立つ自分への違和感に、変化が訪れると感じたのだ。

だから近づく口実を探した。彼女の置かれている現状、彼女の持つ悩み、彼女の過去、彼女の好きな本。ありとあらゆる話題と口実を探した。探し続けて私がたどり着いた先、そこには「悪」があった。彼女を救い、且つ彼女と近づくたった1つの方法であった。

その方法は、何も生まなかった。崩壊と破滅、その後の虚無、ただそれだけであった。彼女に安心してもらいたいと思いつた行動は、結果彼女の不安を増大させ、曇りをのこしたままにってしまった。完全に、逆効果だったのだ。

「だから私も、逃げた」

後悔と自責から逃れるために、私は頂点に居続けることを決意した。頂点で、偽りの快樂を得て、酔い続けていれば、それでよかったのだ。誰も傷つけないし、誰も不幸にならない。

「これでよかったんだよね」

時折思うのだ。いつまで私はこんなことをしているのだろうか。いつまで逃げ続けているのだろうか。でも思うだけである。安心感に勝るものは無かった。今の自分に安心していれば、それに勝るものなどきつとない。私は永遠に今の私でいいのだ、そんな結論を何度も言い聞かせていた。

何もない空間から少しだけ賑やかに変わった。駅に到着したのだ。

「あ」

入口には人。そこには人がいた。短髪で、小柄で、地味で、黒く濁った目をしていて、そんな人がいたのだ。それはまるで――。

「えっ？ あ、えと」

「久しぶり、早川さん」

彼女が、そこにいた。

やり直しは利かないが、取り返しはつく

9

「さて、そろそろ始めないと」

物置のような自室に直面する日が来た。暫く就職のためのあれこれで放置していたこの自室に。

「それにしても、よくもまあこんなに長いこと放置できたな」積み重なった本を見て誰にもなく呟く。そんな積み重なった本を、一冊一冊、必要か否かと思極めていくという作業を始める。

「……」

この作業が終われば、ここともお別れになる。4月からは新たな生活が始まるのだ。

「……」

思い返せば、ここでの生活は長いようで短かった。始めはどうなるものかと心配ばかりであったが、慣れというものは恐ろしい。数か月もする内にすっかりこつちの人間として溶け込んでいた。食文化とか、一部例外を除いて。

「……」

10年間。気が付けばそんな歳月が経っていた。よく10年も異郷の地で生きてこられたものだと思ながら少し感心する。いや、慣れてしまえばどうということはないが、何分こつちに來たのが突然だったものだから、たまに思い出すことがあった。

「あ……」

作業を進めるうちにあるものを掘り出した。

小学校の卒業アルバムであった。

俺はこのアルバムにほとんど写っていない。小学6年生の1学期という極めて中途半端な時期にこつちに転校してきたからだ。アルバム代は予め納めてあったため、紆余曲折を経てこつちの家に届いたのだった。

「懐かしい……な」

俺はあの頃、逃げることしかできなかった。

父親の仕事の都合上、小学校の卒業とともにアメリカのトールンスに引越すことは決定事項であった。父親は既にこつちで仕事をしていたため、キリのいい時期を見計らって母親と俺も住み込もうという話になっていた。

忘れもしないあの日、俺が向こうの学校に最後に行った日。

俺は家に帰るなり引越しの前倒しを母に頼み込んだ。母とて様々な事情を抱えている。こどものわがままにしては無茶が過ぎたし、自分でも無理なお願いだと分かっていた。しかし母は了承した。俺の表情を見て、俺の涙を見て、母はきつと俺がいじめられていると察したのだ。

しかし現実はその正反対。いじめていたのは、俺の方だった。俺は何も知らなかったのだ。自分が犯した罪の重さ、他人の痛みを知らない自分の幼稚さ、他人を理解しようとせず自分が全て正しいと思ひ込む傲慢さ。何もかもが無知であった。知らない間に、罪を負っていた。

今でも鮮明に覚えているものがある。それは彼女、渡瀬奈々美の泣きじやくる表情であった。

あの日の前日の放課後、俺は忘れ物に気付く教室に踵を返した。そこにいたのは二人の女子、早川咲と、渡瀬奈々美であった。

聞いてしまったのだ。全て。彼女の悲痛な叫びも。彼女の咽び泣く声も。

決定的だったのは彼女の目に浮かべる表情であった。口数の少ない彼女の目を、しっかりと捉えるのは、あれが最初で最後であったかもしれない。ただ苦しみを訴え、痛みを嘆いていた。目が、語っていたのだ。その目が、何も知らなかった俺に何かを悟らせたのだ。

その後、窓から二人が帰ろうとしている姿を見た。早川が持

つていたものは俺におおよそこれから起こる全てを容易に想像させた。

俺が罰を受けるんだな、と。

当然の報いだと思った。許してもらえない唯一の方法だと思った。取り返しのつかないことをした自分のせめてもの罪滅ぼしだと思った。

しかし結果はただの逃避であった。

向き合うこともできず、尻尾を巻いて逃げただけだった。怖かったからだ。渡瀬と話すことが。渡瀬に直接謝ることが。臆病者に相応しい結末だったのか。

どうして俺は、無知だったのか。

人の成長というものは、常に連続的なものである。急に背が伸びることも、一気に老いることもない。だから大人と子どもの境界線なんてものは、厳密には存在しない。気付いたらなっている者だっているし、いつまで経ってもなれない者もいる。しかし俺はあの時、渡瀬の目を見たとき、子どもであることをやめようと思った。

確かな境界線が生まれたのだ。今までの自分を振り返る機会が生まれたのだ。後悔して、反省して、それまでの自分に殺意が湧く瞬間が生まれたのだ。

それももう、遅すぎた話である。事実が事実として残るし、俺が渡瀬につけた傷痕は永遠に無くならない。

「……………」

俺は静かにアルバムを閉じ、作業を再開した。

日本での一人暮らしが始まったら、彼女たちと再会することはありませんだろうか。

もちろん会おうと思えば会えるだろう。だが今の俺にはそれができない。まだ臆病なままだから。自分に会う資格がないから。会って謝れる自信がないから。謝るのだろうか。何か、別のことを言うべきなのかもしれないが当然そんなことわかるはずもない。

時間が生んだ障壁というものは想像以上に厚い。時が経てば人は物事を忘れるし、逆により鮮明に思い返されることもある。二人はどっちだろうか。既に忘れ去っているかもしれない、今でもはつきりと刻まれているかもしれない。

結局、何も分からないのだ。分からないから逃げ続けている。今も、これからも。

「ふう……こんなもんか」

一通りの作業が終わった。後は段ボールに詰めれば部屋にあるものの荷造りは終わりだ。

「母さん、終わったよ」

リビングに母の姿は無かった。どこへ行ったのだろうか。ふと、母が玄関の方で何やら会話をしていることに気付く。

「あ、——から——ねえ」

ドア越しでよく聞こえないが、来客のようだ。

「——颯太のねえ。——わあ」

俺の名前が呼ばれた気がした。そもそも母が日本語で応対し

ているのだから、相手も日本人である可能性が高い。

「——ってね」

会話が途切れ、ドアが開いた。母がこっちを見ている。

「颯太、お客さんよ。わざわざ日本から遊びに来てくれたみたいで。それも女の子！ いつの間にそういう子ができてたのよお。しかも二人も！ 来るって分かっていたらもつといろいろ準備とかしたのにい」

止まり続けていた何かが、動き出す気がした。

あとがき

おそらくこれを読んだ多くの人が「小学生らしくなくて気持ち悪い」という感想を抱くと思います。書いていてほくも気持ち悪かったです。読んでくれて本当にありがとうございます。

サイケデリック
座布団少女

壺之字
大

サイケデリック

後ろから見れば？

この目には色が映る

夏の黄色，冬の白

いったい何色なんだろうか
何色と、言えるのだろうか

地面は茶色で空は青時々白

あの桜の木は緑時々ピンク

道をゆくサラリーマンの紺色とOLの紅色は灰色の街で花の

よう

公園の子供たちは赤，青，緑の三原色で混ざったりしてカラフルだ

自分の手を見れば肌色

自分の足を見れば肌色

自分の腹を見れば肌色

自分の胸を見れば肌色

自分の股間を見れば肌色

鏡を見ると色が無い

空気がそこで混ざっていく

ピンク，赤，水色，緑

混ざってはいない，はじくように，ただ交ざる

正面から見れば何色？

右から見れば？ 左から見れば？

座布団少女

大学2年生になった俺の時間割は1年の頃のものに比べ、あまりにも真つ白だった。

大学内の中庭のベンチで、葉桜からのぞく太陽に暖められながらぼんやりと、確定した時間割を眺めながら軽く息を吐く。入学する前からこの学科は比較的楽だとは聞いていたけれどここまでだとは思わなかった。これなら俗に言う中だるみも起きるわけだ。

1年の頃に来た何となく気が合う友人達とも、週に1、2度、学科での必修の授業ぐらいでしか会わないことも判明し、何ともいえないむなしさも感じている。

こうなると、サークルに入らなかつたことは失敗だつたかな——目線を騒がしい声が聞こえる運動場の方に向けて一人ごちる。

運動場の方ではどうやらラグビー部が練習をしているようだ。新歓の時期でもあり、日頃の練習に比べ力が入っているようで、先輩と思わしき人物が1年生であろう集団に対して大声で話しているようだった。そんな彼らの生き生きとした様子からは何か宝石の輝きに似た波動が感じられる。

それに比べたら俺は道端に落ちているただの石ころだな。

大学に入る直前、入った当初は俺も彼らのような輝きを放つことができずに違いないと心のどこかで思っていた。だがしかし、決定的な間違いとして俺は「思っていただけ」だった。受け身

になってしまっていたのだ。

大学は受け身な人間にはなかなか厳しい。あれよあれよという間に1年生と言うブランドが印刷されたシールは俺の体から剥がれてしまっていた。残つたものはどこにも何にも所属せず、日々をのうのうと過ごしているだけの自分。

図体・体格は人並み以上である自覚があったが、サークルにも入らない今となってはただただ邪魔になるだけである。ウドの太木とはよく言ったものだ。

「給水でーす」

自虐に駆られ焦点を失っていた目が再び運動場に吸い寄せられる。

そうだ、大学に入れば何かしらの青春も味わえる、そんなことも思っていたつけ。甘すぎず、それでいて香り立つような声をあげたラグビー部のマネージャーと、そこに集まるラグビー部の面々を見て、羨ましいと恨めしいが入り混じつたような感情を抱く。高校からして男子校だった俺には女、というものが何とも謎めかしく、玉虫色のベールを身に纏っているような存在だったし、大学に入ってからできた友人というのを受け身でいたせいもあってか、全て男だけだった。結果的に大学生活において男女のランデヴーといわれるような青春は待っていなかった。

だからと言ってそれを苦痛に感じることもなく、ともすれば気楽にも感じているのだが、ないものねだりをする子供よろしく自分の持っていないものに対する卑屈な感情は湧くだけ湧

いて更に自分自身を陰鬱な気持ちにさせるのだった。

ふと気が付くと、周りの学生たちのざわめきは消え、校内に響くのはラグビー部の掛け声や更に遠方の野球場の方からの声ともつかない音くらいになっている。

もう授業も始まる時間か。運動場へやっていた目を腕時計に向けて時間を確認し、座る前よりも重くなったような体を持ち上げ帰途についた。

大学から家まではそう離れてはいない。直線距離にして、αキロといったところだろうか。自転車でも使えばそれこそ、β分もかからずついでしてしまうのだから、サークルにも所属しておらず、体育もなく、何か趣味で走ったり運動をやっているわけでもないので気休め程度で健康の為歩いて帰ることにしていた。

大学、更に言えば自分の家はいわゆる郊外に位置していたので、帰る道には寄るような場所―店や喫茶店などは極少ないためどこに寄るといってもなく、時たま視界に広がる田んぼや畑に心を癒されながらのんびりと歩いて帰るのが楽しみの一つだった。

今日もイヤホンで音楽を聴きながら(最近のお気に入り)は1曲1時間位のクラシックで、聴き終わりでちょうど家に着けるという点を気に入っている(日が落ちてきた中でのんびりと歩いて帰っていた)。

帰路も3分の2を過ぎ、田んぼ・畑の他には街灯だけが距離を置いてぼつぼつとあるような道に出る。この道はとても静かで、それでいて何だか美しく一番のお気に入りの場所だ。(クラシックの方ももちろん)この道辺りで盛り上がり来るようなものを選んでいる)

特に今日は帰り始める時間も良かったのか、地平線に落ち始めた太陽の光が田んぼに反射してなかなか見られない美しさを表していた。

その景色、空間をゆっくりゆっくりと味わうように歩みを進めていると、3つほど先の街灯の下で何か黒い影がもぞもぞと動いたのが目の端に入った。ここらではタヌキとかが出るんだっけと一瞬考えたが、今はこの景色を味わう方が重要だ。それにタヌキ自体はおじいちゃん家で飼われていたから珍しくも思わない。

しかし、その予想はその街灯の下に近づいて行くにつれ、的外れであったことが判明する。

まず、1つめの街灯に到達した時点でおおまかな外形を判断することができて、黒い影はタヌキなどではなく、子どもがうずくまっている状態であるということがわかり(その時点でチラチラと見るぐらいだったのが目を凝らして見るレベルになった)、2つめの街灯に到達した時には長い髪と着物らしきものを着ていることからそれが女の子らしく、また何かの上に正座してうずくまっているということがわかり、3つめの街灯、とうとう目の前まで来たときにはその子が何故か座布団の上

座り、そのうえなかなかの美少女で、なおかつ困っているらしいということまでわかった。

その子は俺に背を向ける格好で、なおかつうずくまって街灯の下を見つめながら困った様子でぼそぼそと喋っている。俺の存在には気づいていないようだ。

あまりの非日常性に、景色を堪能することも忘れ足を止めてまじまじとその子を見つめてしまう。なんにせよ怪しい、怪しすぎる。夕暮れ時に田んぼ・畑しか見られない道の街灯の下に向けてぼそぼそと喋っている位ならまだ、そこらの子供が何か虫でも見つけて、それに対して話しかけ自分の世界に入り込んでいるという解釈で百歩譲って良いとして、敷いている座布団と身に着けた着物、そしてなによりもその美しさが怪しさを際立たせている。

困っているようだが、声を掛けるべきか否か。いつもの俺、受け身の俺であれば当然のごとくNO——何事もなかったかのごとく通り過ぎる——という選択肢をとるのだが、今、俺はこの非日常性にとても魅せられてしまっている。ここで受け身ではなく積極的に、声を掛ければ、何か新しい何かがあるのかもしれない、もしくはしたらあの「青春」というもの、いやそれ以上のものを体験できるんじゃないか。そうなるよ。Yesの選択肢を選ぶべきだが、その選択肢を選ぶとする俺の鼓動は耳から入り続けるクラシック音楽の盛り上がりに合わせて聞いたことがないほど拍動している。なんでだ、この子が美少女だからか？ 拍動に合わせて頭がカーッと熱くなるよう

な気がしてくらくらする。

「な、何か、困っている、のかな」

逡巡の結果、結局俺の選択肢はイエスだった。イヤホンを無造作に外し、後ろから声をかける。しかし、発せられた言葉はどれもいいところで、自分自身気持ち悪いと思ってしまうほどだった。

その気持ち悪い声に女の子は驚いたのか、びくんと体を震わせたかと思うと、器用に座布団の上でぱつと後ろに振り向いた。「な、な、な、何にも困ってないんじゃないよ」

美しい。正面を向いた女の子の顔を見た時の感動は横からちらりと覗いた時の感動より数段上の物だった。

白と小麦色が混ざったようなカフェオレ色の肌色に、アクセントとして控えめに主張する頬の赤身、透き通っているようできつとりと濡れているような深い黒をたたえた髪の毛、人形のようにいて様々な感情を容易に表せるであろう目鼻だち、そして血色の好さ、健康の良さが一目でわかる紅い唇。すべてにおいて美しかった。

「の、のう。どうしたんじゃない……」

はつと気が付く。どうやらあまりの美しさに茫然としていたらしい。無駄に大きい体格も相まってか微妙に怯えられている気がする、ヤバイ。

「いや、何か困っているのかと思って、声を掛けました」

なぜか敬語になつてしまつた。それを聞いた女の子は座布団の上で正座をしたまま返答する。

「何にも困つてない、とさつきは言つたんじゃが……」

そこで一度じつと俺を見た後、

「まあ、實際困つてはおろのじや」

と言う。

なんだか古風な話し方だなと思ひながら、女の子の次の句を待つ。「おぬしに何とかできるとは思わんが……」と呟いた後、女の子が「ほれ」と言つて指をさした街灯の下を見てみる。そこには、珍しくもなさそうな花が一輪咲いていた。

「この花はのう、この地で最後の一種類なんじゃが……」

女の子の話の聞いていくと、どうやらこの花はとても珍しいものらしく、このままここにいと動物に食べられたり踏まれたりしてしまうかもしれない。それを保護したいのだが、なかなかここから動こうとしないらしい。

「動こうとしない、つていうのは当然じゃありませんか。花なんだし。」

花なんだから自分で動けるわけがない。だつたら枯れないように根っこから掘つて移動させてあげればいいのではないか。そんな思ひで花に手を伸ばしたとき、後頭部を衝撃が襲つた。

「馬鹿者！ いきなり何をしとるんじや！」

案外大きい衝撃から回復して女の子を見ると、いつの間にか座つていた座布団から立ち上がつていて、その座布団を握りしめていた。どうやらそれで殴られたらしい。そして先ほどの語

気からして何か怒つてゐるらしく、かなり上気してゐる。美しい。

「ちよつと見てみい！」

いきなり手をつかまれる。その手の柔らかさにドキドキする間もなく、もつと驚きの物が目の前に広がつた。

花があつた位置に女の子が座つていたのである。しかもその子は俺の方を見ておびえているようで半泣きの状態だつた。

え？ え？ と何が何だかわからず、女の子と花だつた女の子を見比べてしまう。

「こやつは見ての通り、意思を持っている花じや。お前のおかげで泣いてしまつてゐるがのう」

いや、見ての通りといわれてもなかなか納得のいくものではない。とうとうお話の中の住人になつてしまつたのか、いやでも俺が女の子に声をかける前に望んでいたのはこういう展開だつたんじやないか。と、色々な考えが頭を回り始めようとしていたがそちらの思考は置いておいて、何でこの子がここから動こうとしないのか女の子に聞いてみる。

「それがわかれば苦労しないんじやがのう」

やれやれという顔でこつちを見る、美しい顔でそんな顔をされるのなかなか悪い気持ちではない。

「ごめん！」

とりあえず花の子に頭を垂れて心から謝罪する。

そりゃあこんなガタイをした男が手を伸ばして来たら恐ろしいに決まつている。俺にだつてそんな経験がないわけじやな

い。

下げていた頭を上げて花の子を見ると、どうやらこちらの誠意が伝わったのか、おびえた様子はとりあえずなくなつたようだ。そこで、理由を聞こうと話をしよとしたところで、なぜ「苦勞」しているのが判明した。

どうやら花の子は「言葉」がわからないらしい。「ここから動いた方がいい」だったり「一緒に行く」といつても頭の上にな？マークが出ていよう顔をする。頑張つて伝えようとする真剣な顔を見て無邪気に笑つたりするくらいだ。「だから言つたじやろ、簡単に聞けたら苦勞しないと」

女の子は紐で背中に座布団を括り付けながら言う。確かにこれは難しい問題だ、が花の子と話をしようと思つた中で、なんとなく理解できたことがあつた。

「この子をここから動かして安全な場所に連れていければいいんだよね？」

まるでそれが簡単にできるように女の子に聞く。その問いかけに驚いたのか「う、うむ」と目を瞬かせながらうなずいたのを確認して、俺はリュックの中から筆箱として使つていたお気に入りのケースを出して、ケースから筆記用具を取り出し、リュックの中に筆記用具をしまいケースを女の子の前に置く。ケースには俺の好きな画家の絵——一面の花畑がカラフルに描かれているもの——が描かれていて、ある意味かわいと呼べるものだった。

花の子はそのケースを興味深々と云つた様子で眺めている。

——先ほどまでの花の子との会話の為の試行錯誤でわかつたことは、花の子はちょうど小学生くらいの頭をしているんじゃないかということだ。それだつたら会話ができなくても身振り手振りで、そして「物で釣つてしまえばいい」。

次に、ズボンのポケットから取り出したスマホである画像を見せる。その画像はうちの温室の物で、しっかりと管理された中で植物たちが花開いているものだ。

俺は、ケースを指さし、花の子を指さし、もう一度ケースを指さし、スマホのその画像を指さし、そして最後に俺を指さしうんうんと頷いた。要するに、君をこのケースに入れてここに行くこう、ということである。

最初は何を言っているのかわからないような顔をしていた花の子だったが、同じ動作を何回か繰り返すうちに得心したような顔をした後、満面の笑みを俺と女の子に向けた。

その様子を茫然と眺めていた女の子は、はつと気が付いたように俺の手を握つていない方の手を花の子に向けてかざす、すると何か温かい光が輝くと同時にどんな力なのか知らないが、ケースに花と土が収まつていて、花の子はなぜか俺がおんぶしているような形になつていた。ただ、本当に花が乗っているかどうかくらいは重さしか感じず、辛くはない。

「よかつたのう」

ふう、と一息つき、女の子はそういつてケースを俺のリュックの中に入れた。

気が付くと、あたりはすっかり暗くなつてい

「君はこれからどうするの？」

とりあえず聞いてみる。

「特にどこに行く、ということはないのう。気ままに歩いてたまたま見つけるこういう奴らを助けるのが趣味というか仕事みたいなもんじゃから。まあ、とりあえずその子がおぬしがさつき見せた温室につくまでは一緒に行くつもりじゃ」

先ほどから俺の髪を引つ張ったり、頭をたたいたりして遊んでいる花の子を見て女の子は言う。

「そっか、じゃあ、行こうか」

やっぱりこの子は特別な何かなんだな、と「家に帰る」などの返答がなかったことから確信する。(さつき手をかざした時の謎の光でほぼわかつてはいたが)リュックをお腹で抱えるように逆向きに背負い直すと、女の子が手を差し出してきたので、その手をとり、手をつないだまま俺と女の子は歩き出した。

女の子の歩幅に合わせて、歩幅を小さめに取りながら暗がりの中、街灯と星と月が照らす道を歩いていく。

また、受け身に俺はなっているんじゃないか。何か女の子に言いたい事があるんじゃないか。その言いたいことももうわかっているんじゃないか。

花の子にいたずらされている頭の中を考えがぐるぐる回る中少しづつ、ゴールが近づいてくる。

もう、一回勇気は出せているんだ、同じことをするだけじゃないか。

「あ、あのさ」

一回しかどもってない、敬語じゃない、大丈夫だ。

「なんじゃ？」

こつちを見る女の子に違う意味でドキドキする。

「その仕事……趣味って一人じゃないとできない？」

「そういうわけじゃないのう、そもそも今さつきもおぬしに手伝ってもらったわけだし」

微笑みながら女の子は続ける。

「きちんと言うのをわすれていたのう、ありがとう」

勇気が、湧いてくる。

「手伝っちゃ、ダメかな」

その問いに女の子は驚いた様子になる。

「その申し出はうれしいが……おぬし、働いてはおらんのか？」

うれしい、という言葉に心が躍る。

「それは大丈夫！ 今俺は学生だから、時間はいっぱいある！」

「ふむ、まあ本人がいいというなら別にいいんじゃない。逆に大助かりともいえるし。よろしく頼む。」

「こちらこそ！ よろしくお願います！」

心が弾むのと同時に声も弾む。やった！ 何か、新しい何かが開けた気がする！

と、そこまで話した時、ちょうど俺の家の前についた。

「ここが俺の家なんだ」

「おお！ なかなかいい家ではないか！」

古めかしいだけの家だと思っていたが、そういつてもらえる

となんだかうれしいものがある。

「で、温室はこっち」

女の子を先導するように家の裏手に連れて行く。そこにはおばあちゃんの趣味を手伝っていた俺の趣味になりつつある園芸をするための温室、スマホの画像と同じ場所がある。

扉を開けて温室の中に入り、リュックからケースを取り出し、台の上に置く。花の子も背中から降りて笑顔で俺に手を振った後、ケース(本体?)に吸われるようにして消えていった。

「おねむじやな」

なるほどと納得したのと同時に、何か新しい鉢植え、それもうんとかわいいのを用意してやらなきゃと思うのであった。

「しかし、連絡はどうしようかのう」

連絡方法で困っているようだ。ここだ、ここしかない。

「あのさ、良ければなんだけど、一緒に住まない？」

言った、言ってしまった。

「おお、それは楽でいいのう。だが大丈夫なのか？ 学生ならご両親がいるのではないか？」

「大丈夫！ 俺一人暮らしだから！」

3年ほど前に母方の祖母が亡くなって空き家になった家に、受かった大学から近いという名目上、家の維持と家賃の節約の為、この家に今一人暮らしをしている。ただ、おばあちゃんならきつと、きちんとお願いをすれば聞いてくれたとは思うけれど。

「……何ともできた話じゃ」

まあよいか、と女の子は言って玄関の方へ歩きだし、俺の手を引っ張る。俺ははつとしながら女の子と一緒に玄関へ向かっていった。

この後、女の子の本体が座布団だったり、大の男と美少女が一緒に、ともすれば手をつないで歩いていて怪しまれないために兄と妹という設定にしたり、花の子が言葉を覚え始めたりするが、それはまた別の話。

とにかく、俺の新しい何かは今、始まったのである。

夏空を見上げて

野宿

良太

夏空を見上げて

試薬を吸って、吐いて、吸って、吐いて――。

ピペットを操作する指先の動きにあわせて、二種類の液体が混ざりあつていく。

このピペティング操作が、自分は好きだった。色あいや粘度の違いで、初めはもやもやとした揺らぎを見せる異種の液体同士が、吸吐のたびに少しずつ混ざりあい、一つになる。その様を眺めるのは、なんとなく心地よかつた。

一人で黙々とピペティングをしていると、ぱたぱたとスリッパを踏み鳴らす足音が近づき、実験室のドアが開けられた。

「おはようっす！ あれ、西郷だけ？」

大きな挨拶を引き連れて、清水が顔を覗かせた。顎に生えそろうった無精髭は、それなりに立派なものになっていて、もはやお洒落なのではないかと錯覚しかける。まあ無精さで言えば、こちらもいい勝負だが。

「おはよう。つてほど早くもないな」

机上の時計に目を遣つて、軽口を返す。既に正午を回っている。

「まあまあ。あー、涼しいなこの部屋。冷房最高だね」

その言葉に、今朝の天気予報を思い出す。「今日も真夏日になります、熱中症には気を付けて！」と、明るい笑顔でお天気おねえさんが注意を促してくれていた。しばらくはこの部屋を出たくないな、と思いながら、実験を再開する。試薬を吸って、

吐いて――。

「西郷はなにしてんの」

試薬瓶のラベルを覗きこみながら清水が尋ねてきたので、「実験してんの」と適当に答える。

「そりや見れば分かるけどさー」

困つたように、清水が笑う。

「清水こそ、どうしたんだ」

わざわざ日曜に、という言葉までは口に出さずとも通じたように、「菌体回収」と、拗ねたような口調で返される。

他の学科については知らないが、こと我々のような生物系の研究室に関して言えば、休日登校というのも決して珍しくはない。生物は、書いて字のごとくナマモノだからだ。実験者の都合ではどうにもならないことも多い。清水のように、一定の培養時間で菌を回収せねばならないような事例が、ままある。

「そう言えば西郷、外、見た？」

「外？」

唐突に話題を振られ、意味を掴みかねる。とりあえず手元の試薬瓶から視線を外し、窓の外に目を向ける。

「快晴だな」

お天気おねえさんの言葉が見事に的中していることを思わせる、まぶしい青空が広がっていた。

「いやいや、そうじゃねえよ！ や、快晴だけでも、そうじゃなくて！」

どうやら、見たままを口にした回答は正解を引き当てなかつ

たようだ。

「じゃあなんだよ」

「オープンキャンパス！」

ああ、そのことか。初めからそう言ってくれば、合点がいく。
「みただな。朝来るときに、制服姿の高校生を見かけた」

「そう、制服姿の高校生がたくさんいるんだ！ そいつらを見て、なにか思うところはなかったか？」

なにか？ 今度は少し時間をかけて考える。

日頃から、うちの大学は地域に対してオープンな印象が強い。構内を散歩する老夫婦や子連れの奥様方、そして学校帰りと思わしき高校生達を目にすることは多い。なので高校生がキャンパスを歩いていることに、これといった感想は抱かなかつた。
少し特別なことと言えば、先月までは構内のあちこちで散見された学部生たちが夏休みに入り、大学全体が閑散としてしまっていることだろうか。この時期、我々のような酔狂な大学院生をちらほら見かけるのがせいぜいだ。そんな八月半ばにあって、高校生が構内人口の優位を占めているというのは、なるほど面白いことかもしれない。

「面白いな」

「えっ、なにが……？」

またも清水の意にそぐわぬ回答だったようだ。しかしこちらとしても、本当に思い当たることがない。高校生がどうしたと
いうのだ。

すると清水は、わざとらしい溜息を一つつくと、大袈裟に語り始めた。

「さつき、ここに向かう道すがら俺は、せっかくの休日にも関わらず研究室に来なければならぬ己の不遇を嘆いていたわけですよ」

「はあ」

「反応薄いな！」

「ちゃんと聞いているから、続き話せ」

試験から目を離さずに、先を促す。

「……で、だ。嘆きながら歩いていると、すぐに大学に着いたんだ」

「お前の家、近いからな」

「うん。で、閑散としたキャンパスを想像していたら」

「高校生がたくさんいた、と」

「制服の、高校生がね」

そこ大事なのか。

「今日がオープンキャンパスだと思い出すのに、さして時間はいかからなかったよ」

清水はまた、溜息をついた。

「俺はね、目にしたその光景にひるんだよ。まぶしくてね。若さの象徴たる制服を着たティーンズたち。男の子も女の子も、近い将来に訪れるであろうキャンパスライフに希望を抱いて微笑んでいるんだ。まぶしい。まぶしすぎる。そして、そんな夢見たキャンパスライフの成れの果てが、休日まで潰して研究

に身を投じる俺なのかと思うとね、思わず口にしたタバコの、不味いこと不味いこと……」

顎鬚を撫でながら、三度目の溜息。どうやら話は終わったらしい。

なので今度はこちらから気になったことを聞いてみる。

「清水、タバコやめたんじゃないか」

「え？ あー、就活中だけね。いまはまた」

「そうか。いや、禁煙成功者として言わせてもらうが、タバコはやめた方がいいぞ。なんせお金がかかりすぎる。いま一箱いくらだっけ？」

「四三〇円」

「ほら見たことか。だから四百円台に跳ね上がったときにやめておくべきだったんだ」

「そう言えば、お前は値上げですっぱりやめたよな」

「ああ。元がそこまでヘビースモーカーだったわけでもないからな。でも、それは清水も同じだろう？ せっかく一時期やめられていたのに、もったいない」

「うーん、そうかなあ……。や、ちょっと待って、いまはオーブンキャンパスの話をね」

「あ、そうか。うん。『ティーンズ』という言い回しは今時どうかと思う」

「やめて！ 変なところ掘り下げないで！」

眉を八の字にする清水を見て、ふと、おかしさがこみ上げてくる。清水をからかい、下らない話をするこんな時間を、楽し

いと、素直に感じる。

夢見た日々の行き着いた先が悲惨な研究漬けの毎日である、という清水の嘆きを、手放しで受け入れられるかといえばそうではないが、かといって全面的に否定もできなかった。

自分だって特段研究が好きなのではない。院に進学した理由も、単に学部時代に就職活動をしなかったから、というのがそれなりのウエイトを占めている。しかし、動機はどうあれ進学の道を選んだのは自分自身だ。いまの生活も、言い方は悪いが、自業自得なのだ。と、客観的に意見を述べることはできるし、その意見を間違っているとは決して思わないが、主観的な感情だけでモノを言えば、清水の言葉に賛同したい。

「まあ冗談はさておいて」

未だに眉尻を下げる清水に言う。

「お前の現状への不満は、なんとなく伝わった。そして、それと対比する高校生たちに羨望の目を向けたのも、なんとなく理解できる」

「おつ、分かってくれるか！」

「うん。ただ、高校生を見て『あの頃は良かった』なんていう考えには囚われない方がいいな」

そう、結局はそれなのだ。

清水の意見には同意する。研究室での日々は、かつて夢見たものからは遠い。しかし、まだ高校生だったあの頃が、果たしていまよりも輝かしかったと言えるだろうか。きっと違う。当時は、同時にしかない悩みが、あつたはずだ。もう五年以上も

前のことだ。その細部までは覚えていない。ただ、いまよりはるかに狭い世界の中で生きていたことは、間違いない。だからこそ、大学生活に夢を抱いていたのだろう。

その旨を告げると、「分かっちゃいるんだけどね」と清水が髭を搔く。

「元々、本気で高校生を羨んだわけじゃないんだ。ただ少しだけ、現状への不満を漏らしたくなっただけ」
少し乾いた笑みを浮かべている。

ああ、やってしまった……。にわか反省の念が湧きあがってくる。ただの軽口に、何気ない会話に、正論をかざってしまった。こういう、いわゆる「空気の読めなさ」は、恥ずかしながら自分の短所で、自覚もあるのだが、なかなか治せないでいる。理詰めの言い方をしてしまったことに、申し訳なさを抱く。

「あー、その、ごめん」
「なんだよ急に？」

清水は、本当になんのことか分からない表情で問いかけてくる。そうなのだ、清水はそういう人間なのだ。正論をまっすぐ受け止めてくれる。そして、少なくとも表面上は、不快感を示さずに会話を続けてくれる。自分の短所を棚に上げるつもりはないが、こんな性格の自分にとって、まさに清水は聞き上手な人間であり、そのせいでつい清水には正論で対応してしまうことが多い。大学一年からのそれなりに長い付き合いの中で、実はひそかに、幾度も反省と感謝を繰り返していた。

「あー、あれだ、うん。高校生を、羨むことはない」

ずっと握っていたペットを、そっと机の上に置く。

いまの清水に掛けるべき言葉を、精一杯口にする。ただそれは、嘘や偽りではなく、下手なフォローでもなく、いまの気持ちを素直に伝えるのが一番いいのではないかという思いで、口にする。

「昔も良かったかもしれないが、現状だって悪くない。いまこうして、何気ない会話に花を咲かせている時間、結構好きだよ」
結局、空気の読めた発言からは程遠かったかもしれない。素直に感謝の意を込めて、まっすぐに伝えることしかできなかった。少しでも、清水の気が晴ればと願いつつ。

正面から見据えた清水は、呆けたような顔をしてこちらを見返してきた。

「……………」
「……………」

「……………なにか言ってくれよ」

沈黙に耐えられず、口を開く。

「あ、ああ、うん」

なにかに憑かれたような様子で、おざなりに返答される。

「どうした」

「どうしたって……や、西郷がそんな、冗談言うの珍しいな、って」

「冗談？ や、思ったことをただ言っただけだよ」

下手にウケを狙うより、真面目に取り組む方が滑稽なこともある、ということだろうか。真面目さというのは、時に笑いの

種となる。それが良いか悪いかは別として。まあ今回は、真面目というより、頭の中身をなんのフィルターも通さず口に出しただけなのだが。

「そうか……」

なぜか思案気に黙り込む。清水の方が余程おかしいと思うのだが。そんな清水から目を離すこともなんとなく憚られ、机上のピペットを手持無沙汰にいじっていると、突然、清水が大きな声を出して、言った。

「遊びに行こう！」

「……は？」

今度はこちらが呆ける番だった。

「どういうことだ」

「夏だぜ！」

「夏だな」

「いましてできないことを、しなきゃ！」

気色ばんだ様子で、そう告げた。

「いまも悪くないって、西郷、そう言ったじゃん。だったら、遊ばなきゃ！ いましてできないこと、しなきゃ！」

なるほど、そういうことか。

「西郷は今年、なんか夏らしいことしたか？」

していなかつた。就職活動を終えたのが五月の半ば。そしてツケの溜まっていた研究を進めているうちに、気付けばもう夏だった。確かに、このまま今年は、大して遊びに行くようなこともなく、緩やかな日常に楽しみを見出して終えるつもりだっ

た。

昨年までは、なんだかんだと遊んでいた記憶がある。別に毎日遊び呆けていたわけではないが、それでも出不精の自分にしては遊んでいた方だ。あれは、間違いなく、夏だったからだ。

「そうだなあ、遊びに、なあ」

「ああ、悔いを残しちゃダメだ！ だって、今年で、最後なんだから！」

学生生活、最後の夏――。

六歳からかれこれ二十年近く続いてきた学生という立場も、今年で終わり――。

「……よし、遊びに行こうっ！」

思い切つて声を上げると、清水は驚いたように見返してきた。

「えっ、マジで？」

「なんだよ、言い出したのはそっちだろ」

「や、うん、そうだけど、意外というか」

「不服？」

「ま、まさか！ よし、行こう！ 遊びに行こう！ どこ行こう、今からだとあんまり遠出もできないし」

「今から行くのか」

「夏は待つてくれない！」

思わず吹き出してしまふ。

ああ、楽しいな。

「とりあえずさ」

「ん、なに？」

笑う清水に、こちらも笑顔で提案する。
「とりあえず、昼飯、食へに行こうか」

互いの実験を軽く終わらせ、二人で外に出た。

暑い。見事に真夏日である。実験棟から足を踏み出した途端に、鋭く刺すような日差しが、じりじりと皮膚を焦がし始める。

昼食は、テンチョーの店に行こうと清水が言い出した。大学から徒歩五分のラーメン屋。清水が特に気に入っており、思えば一緒に飯を食う時は、外食ならほとんどがテンチョーの店で、さもなければ生協だった。とは言え互いに金欠気味なので、日頃は外食せずに食パンで済ませてしまうことも多いのだが。

「好きだよな、テンチョーの店」

「うん、嫌だったか？」

「や、構わない」

かく言う自分も、テンチョーの店は気に入っていた。ラーメンの味もさることながら、研究室のOBが店長を務めており、色々良くしてもらっていることも大きい。

この店長、「テンチョー」の愛称で親しまれており、だから通称「テンチョーの店」。そういうえば、余り気に入ったことはなかったけど、正式な店名はなんだった。清水に聞けば知っているだろうか。

「ああ、『笑み』だよ」

流石に常連だけあって、尋ねるとすぐに清水は正解を教えしてくれた。確かに、あの店長の明るい人柄もあって、笑顔の絶

えないお店である。ぴったりなネーミングだと思った。

「それにしても、暑いなあ」

まだ校門すら出ていない。日の下に出てわずか一分程度のうちに、首筋を汗が流れ落ちていく。

汗を拭いながらキャンパスに目を向けると、なるほど制服姿の高校生が散見される。中には、仲良さそうに男女で歩く高校生も見受けられる。彼ら彼女らの目には、汗だくになってぬらぬらと歩く二人組の大学院生が、どのように映るのだろうか。あの年代からすれば、二十四歳の大学院生というのは、ずっと年上に、年寄りに、見えるのだろうか。過ぎてしまえば、あつという間なんだけだな。

清水も高校生を目にして、再び郷愁を感じたのか、小さな溜息を漏らしていた。

「なあ清水」

「なんだ？」

「お前、ただ女子高生が好きだけじゃないの？」
からかうと、

「は、はあつ？　ち、ちげえよ、そういうんじゃないよ、だなあ！」

「おい否定が必死すぎるぞ」

「う、うるせえ！　俺は同年代にしか興味ねえの！」

「そんなもんか」

清水は拗ねたように口を尖らせ、暑そうにパタパタと団扇をあおいでいる。そんなもんか。

「……セミ、うるさいなあ。それが風情でもあるけど」

校門を出ると、なおも団扇をあおぎながら、清水が独り言を漏らした。その言葉で、初めてセミの声が耳に届く。何ゼミだろう、声だけで種類が分かるほど詳しくない。

「これ、何ゼミ？」

「アブラゼミ」

よく知ってるな、素直に感心する。清水自身は、セミにはきして興味がないのか、濃い緑色の葉を見上げながら歩を進めている。做つて視線を上げれば、抜けるような青空の真ん中に、大きな入道雲が浮かんでいた。

「夏、なんだな」

「なにをいまさら」

清水は小さく笑つてから、団扇の風をこちらにも送つてくれる。

「ありがと」

「いえいえ」

「なんか、あの入道雲」

「うん？」

「綿菓子みたいだな」

「意外とガキっぽいな」

二人で笑みをこぼす。

アブラゼミの声をBGMに、テンチョーの店を目指す。その道すがら、今年の夏の予定を立てていく。

「やっぱり、旅行かな」

提案すると、清水も頷いた後で、顔を曇らす。

「ただ、時間がなあ」

「確かに」

良くて一泊旅行、近場で日帰り旅行が精一杯だろう。だが、それで充分じゃないだろうか。

「学部頃、何人かで島に行つたよな」

「あー、二年のときに」

「あれつて、何泊だつたかな」

「確か、二泊三日……や、船中泊で三泊だな」

そうか、そういうのならできなくもないな。船なり、夜行バスなり、金曜の夜に出発し、翌朝には目的地。土曜に遊んで日曜に帰る。これなら多少の遠出もできる。

「島、楽しかつたな」

思い出したのか、清水が笑みを浮かべる。昼間は疲れるまで海で遊び、旅館に戻つてごろごろし、夜は浜辺で手持ち花火に興じた。あれは、確か学生実験の班で行つたのだ。あの頃は、世間並みの夏休みがもらえていた。

「あれも良かった、去年のBBQ！」

「あ、そうだな。日帰りには堪能できたな」

研究室の同期と先輩を誘い、山間の河原へと繰り出したのだ。川の水は冷たく、冷やして食べたスイカの美味しさを思い出す。レンタカーを借りれば、荷物も積めて、皆で行きやすい。ただ、そうするとドライバーは酒を飲めないのか。夏空の下でBBQに興じてビールを飲めないというのは、ある種拷問ではないか。夏に遊びに行きたい。そう提案したのは清水だったが、気付

けば清水以上に夏を満喫したがっている自分がいた。現金も
のだな。

「そういえば、今さらではあるが、遊んだメンバーの括りはそ
の時々で変わることはあつても、たいてい清水は一緒にいたこ
とに思い至る。出席順が近く、研究室まで同じ所属になったの
で、当然と言えば当然だが。そして今年も、清水を含むメンバ
ーで旅行。全く、腐れ縁と言うのかな。」

「やっぱ、夏だし、海とか、プールとか、行きたいな」

「こちらを伺うように清水が言ったので、頷く。
「そうだな。最終的には皆の予定を聞いて、どうするか決めよ
うか」

今日は来ていない研究室の同期の顔を思い浮かべる。いや、
最後の夏休みだ、他研に行つて話す機会が減つた友人らも大勢
誘つたら楽しいだろう。問題は、人数が多くなればなるほど、
恐らく幹事を務めることになるであろう言い出しっぺの我々
の仕事量が増えてしまうことだ。

「あー、そうな。皆もな」

清水はふにやふにやと曖昧に頷く。やはり幹事の大変さに思
い至つたのだろう。

そんな話をしているうちに、テンチョーの店が見えてきた。
が、

「うわ……」

遠目にも分かる。シャッターが下りている。

「マジかよ……」

気落ちした様子で清水の両腕がだらりと下がる。とりあえず、
ダメ元で店の前まで行つてみる。

結果は変わることなく、閉じられたシャッターが眼前に突き
付けられる。

「今日休みだっけ……」

テンチョーの店は、木曜と毎月六日が定休だった。今日はそ
のどちらでもなく、シャッターには「臨時休業」と書かれた紙が
セロテープで貼り付けられていた。

「あー、なにか書いてあるぞ」

臨時休業の文字の下、角ばつた字が並んでいる。

「えーつと……。ああ、なるほど、そうか今日か」

「えつ、なに？」

清水にも貼り紙を顎で示す。

『本日、商店街納涼まつりに出店するため、臨時休業と』…
…夏祭りか！

もうそんな時期なんだな、と小さく息を吐く。毎年、八月半
ばのこの時期に、大学近くの公園で夏祭りが開かれるのだ。商
店街主催の地域の祭りとは言え、それなりの数の屋台は並ぶし、
公園の真ん中には櫓が生まれ、太鼓を打ち鳴らしながら盆踊り
も行われる。そしてなにより、祭りの締めには、小さいながら
も三十発近い花火が打ち上がるのだ。

「……西郷、これだよ！ これ行こう！」

「夏祭りか？」

「他に何がある！」

臨時休業で沈んでいた清水のテンションが、夏祭りの一文でにわかにも上昇した。

「そうだな、せっかくだし行こうか。他のメンバーは……」

「や、今から誘っても集まるかな？ 実家暮らしの奴らはこの暑いなか呼び出すのは悪いし、下宿組もたいていは帰省してるんじゃないか？」

確かに、考えてみれば世間では盆休み、こうして実家にも帰らない親不孝者がそうそう掴まるとも思えなかった。

「うん、じゃあ二人で行くか」

「おう！ それとき、せっかくの夏祭りだし、浴衣着て行こうぜ！」

気色ばんだ様子で早口にまくしたてる。しかし、浴衣とは。

「面倒だな」

「いや、でも夏祭りだぜ、満喫しなきゃ！ それに捨てちゃいないだろ？」

「それは多分、平気だが……」

何年か前に、皆で安い浴衣を買って花火大会に赴いたことがあった。商店街の夏祭りではなく、もっと大規模な大会に。確かに、捨ててはいないはずだった。

「ほら、じゃあ浴衣で！ 集合は、そうだな、六時に公園の入り口辺りで！ じゃあ、またな！」

言いたいことだけ言い終えると、清水はそのまま早足で家の方に向かって行ってしまった。

一人その場に残されて、ただただ遠ざかっていく清水の背中

を、見えなくなるまで目で追った。

「勝手な奴だなあ」

小さく呟くと、同時におかしさがこみあげてきて、笑みがこぼれる。

首筋の汗を拭いながら、のんびりと足を家に向ける。

とりあえず、押入れの奥に眠る、カビ臭い浴衣を探すとしよう。

高校生活最後の夏休みに、私は大好きな高津君と過ごせるのだから、きつとんでもなく幸せ者なんだろう。

私は高津君が好きだった。たぶん、かなり始めの頃から。お互いに入学したてで、まだ緊張気味で、そんなときに初めて話して、そのときにはもう、きつと高津君のことを好きになって、なんとなく、そんな風に思ってしまうほどに。

だから、二年生になってクラスが変わってしまったときは、本当に悲しかったし、三年生になってまた同じクラスになったときは、恥ずかしいけど、運命なのかなって思ってしまった。

高津君に私のことを気付けてほしくて、一生懸命話しかけたら、こっそり部活が終わるのを待って、一緒に帰ったり。そんな、意味があるのかも分からない小さな努力を重ねて、先月、

一学期がもうすぐ終わるって頃に、高津君が「好きだ」って言うてくれた。本当に偶然なんだけど、私もその日、高津君に告白しようと思っっていた。嬉しくて、泣いてしまつて、高津君を困らせてしまった。

ちようどその日、私は、大学に合格した。指定校推薦だ。自分で言うなって感じだけど、結構頑張った成績だったから、それなりの私立大学に。「推薦だから絶対受かるよ」って、先生も友達も言うてくれていたけど、実際に結果が出るまでは凄く怖かった。だから、ちゃんと結果が出て、合格できてたら、そのときは勇気を振り絞つて高津君に告白しようって、そう思つた。

私は、本当に幸せ者だ。

「暑いね〜」

入り口でもらつたパンフレットを団扇代わりにあおぐ。今日は真夏日で、日陰を歩いていてもその暑さには勝てなかつた。

「どこか、教室入ろつか？」

横を歩く高津君は、やつぱり優しく、その言葉だけで嬉しくなつてしまふ。

「ううん、大丈夫！ 高津君、見たいところあつたら行つてみようよ」

「そう？ それじゃあ……」

まだ心配そうにしながら、高津君は構内を進んでいく。ちよつとだけ先を歩きだした高津君のあとを慌てて追つて、また彼

の隣に収まる。

今日はオーブンキャンパスに来ていた。高津君が気になつている大学で、私も付いていきたいと言つたのだ。

もしここに高津君が受かつたら、私とは違う大学になつてしまふ。でも、距離的にはそんなに離れてないから、会おうと思えばいつでも会えるはずだ。

構内を見まわすと、私たちみたいな制服姿の子たちがたくさんいた。逆に大学は夏休みだからか、大学生っぽい人はほとんど見かけない。着いてすぐのときに何人かちらほら目にしたら、みんな疲れた顔をしていて、大学生も大変なんだなあと思つた。

「西野、こつち」

高津君が、建物の入り口で立ち止まつて私のことを呼んだ。

コンクリート製の外観の、なんだかいかめしい建物だった。

「ここ、何があるの？」

「ちよつと、興味ある研究している研究室があるみたいで」

「へえ〜。高津君、凄いやね」

私が何に感心しているのか分からないよう、高津君は首を傾げる。

「凄いや、もう自分が興味あることが分かつてるんだもん！」
本当に、凄いなあつて思う。六月まで高津君は部活を続けていて、そこでもレギュラーとして最後まで活躍して、それなのにもうちゃんと、自分の将来のことを考えられている。

「西野だつて、そうだろ？」

思いもよらないことを言われて、私は慌てて首を振る。

「全然だよ、私なんて！ なんとなく理系か文系か考えて、なんとなく勉強して、なんとなく面白そうなところに受かっただけだもん」

そんな私に比べるのもおこがましい。高津君は、本当に凄い。高津君は、なんだか困ったように笑ってから、建物に入ってしまった。もしかして、照れたのかな。そんなところも、いいなあって思う。

また高津君の隣を歩いて廊下を進む。歩幅の広い高津君に置いていかれないように、一生懸命歩く。

「ここみたいだな」

開放されたドアの前で高津君が立ち止まったので、私も歩みを止める。ドアの横に貼り付けられた研究室の名前とパンフレットを見比べて、躊躇なく高津君はその部屋に飛び込んだ。慌てて後を追う。

部屋の中には、研究内容っぽい写真や文章が印刷された大きな紙が何枚も貼りだされていて、そばの椅子に腰かけた大学生の人が、笑顔で挨拶してくれた。

「こんにちは。あの、お話聞いてもいいですか」

大きな声で高津君が挨拶を返すと、大学生さんにもこやかに対応してくれた。研究内容の貼り紙の前に立って、大学生さんが写真やグラフを指さしながら説明してくれる。高津君はしきりに相槌を打ったり、質問を投げかけたり、ときに大学生さんと笑い合ったりしている。私も一生懸命説明を聞いていたん

だけど、途中から付いていけなくなってしまう。

私は研究内容を理解するのを諦めて、ちらちらと高津君の顔を眺めた。大学生さんの話を輝かす高津君は、なんだかずっと大人に見えて、カッコいいあつて思う反面で、少し、自分が情けなかった。

説明が終わった後も、しばらく高津君と大学生さんは談笑していた。それから部屋を出ようとして、「君だったらあそこも面白いかも」と、大学生さんが別の研究室のことを教えてくれた。高津君がお辞儀をしたので、私もちよつと遅れて頭を下げると、大学生さんは笑顔で手を振って送り出してくれた。

「やっぱり凄いな大学は！」

廊下に出た第一声が、それだった。

「具体的な工業化、製品化を視野に入れながら、しっかりと基礎研究も進めてる。基礎と応用、どちらも扱える考え方、実験レベル、キャバがあるんだな」

良く分からなかったけど、高津君が嬉しそうだったので、私も笑顔で頷いておく。

それから、四つの研究室を訪ねた。どこも親切に対応してくれて、高津君も熱心にお話を聞いていて、私も頑張ってはみたけれど、やっぱり途中で諦めて。結局最後まで、高津君がどんな事に興味を持っているのか、はつきりとは分からなかった。なにか、微生物を扱ったことがしたいのかなっていうのは、なんとなく伝わったけど、それも間違っているかもしれない。ただただ、情けなかった。

時計をちらつと見ると、もうすぐ午後の三時だった。まだ昼食も摂っていないくて、少しお腹が空いていたんだけど、高津君はそんなことも気にならないくらいにオープンキャンパスを楽しんでた。だから、私は何も言わず、ただ高津君の後を追って歩いた。

個別の研究室訪問だけじゃなくて、学科ごとの全体的な説明会もあるらしく、高津君は三時からの部に参加したいみたいだった。その会場に向かう道すがら、なんとなく会話は少なく、ただ私はキャンパスをきよきよ見回していた。ちょうど二人組の男の人が、暑そうに団扇をあおぎながらすれ違っただけ。向こうも私達のことに関心したみたいで、なにか話していた。二人とも大学の学生さんばいんだけど、髭は伸びっぱなしで、さっきまで説明してくれていた研究室の学生さんとは風貌が違うような気がした。大学に着いたときには疲れ気味な学生さんを見かけたし、大学っていろんな人がいるんだなあ、なんて、そんな当り前のことを考えていた。

学科全体の説明は、広い教室で行われていた。階段状になったその教室は、私が想像する大学の講堂像に近くて、少しわくわくした。空いている席に並んで腰かけると、教授だというオジさんが教壇に立って、学科の説明を始めた。その内容は、私でも理解できた。当然だ。入試要項とか、本当に大まかな研究の説明とか、就職率とか、その程度の内容だったからだ。高津君は説明に熱心に耳を傾けて、ときどきパンフレットにメモを取っていた。手持無沙汰な私は、オジさんの話を聞くともなく

聞きながら、ペンを走らせる高津君の指先を眺めていた。

説明が一通り終わって、会場から人がはけていく。私も椅子に置いた鞆を手に取りようとすると、高津君が「ちょっと待って」と言い残して、オジさんのところに向かっていた。そしでなにかしきりに質問をぶつけているようだった。私は鞆の持ち手に指をかけたまま、席から立ち上がることもできず、ただ高津君の様子を見詰めていた。真剣なその横顔は、私なんかよりずっと年上の人みたいに見えた。

「ごめん、お待たせ……！」

しばらくして戻ってきた高津君は、本当に申し訳なさそうに頭を下げた。だから私は、必死に首を振った。

「全然大丈夫だよ！ 聞きたいこと聞けた？」

どうやら私は、上手く笑えてたみたいで、高津君はほっとしたように、軽く微笑んだ。

「西野、ありがとな、わざわざ付き合ってもらっちゃって」

鞆を肩にかけると、会場の出口に向かいながら高津君が言った。

「なんでも、お礼なんて言うのおかしいよ、付いていきたくって言ったの私じゃん」

あはは、って、笑ってみる。会場の外は、少しずつ夕方の風が吹き始めていて、それに負けじとセミが鳴いていた。その鳴き声に、私の笑い声はかき消されてしまった。

「あつ、そう言えば、飯……！」

高津君が、まだ昼食を食べていなかったことによく気付

く。ちらつとその横顔に、私への気遣いが浮かんだような気がしたから、なにか言われる前に「そう言えば食べてなかったね」と口にする。

「どうしよう、大学の食堂か、近場の飯屋探すか……」

独り言のように呟く高津君のワイシャツの裾を、そつと引つ張る。

「ん、どうした西野、なにか食べたいものとか」

「池で食べたいな」

高津君が言い終わらないうちに提案する。キャンパス内に、小さな池があるのを、さつき歩きながら見かけたのだ。周りにはベンチや東屋もあった。

「あー、外でか。じゃあ、何か食う物買って」

「うん、あの、実はね……」

流石に恥ずかしくって、少し言い淀む。

「実は、お弁当、作ってきたんだ」

驚いた高津君の顔は、最高に素敵だった。

高津君は「ありがとう」と「嬉しい」を繰り返しながら、照れたように笑ってくれた。その笑顔を見ているだけで、私も早起きしてお弁当を作った甲斐があったなあって思っただけで、くすぐったくなった。高津君と並んで歩きながら、池を目指す。周りを歩く人たちに、いまの喜びを伝えて回りたいような、そんな気分になる。高津君が笑ってくれるだけで、こんなにも幸せな気持ちになれる。

「ちようどベンチ空いてるな」

池が見えてくると、高津君は安心したように言った。池の周りには背丈のそんなに高くない木々が植えられていて、ベンチも日陰になっている。もう夕方とはいえ、まだまだ暑いこの時間帯に、木陰が用意されているのはありがたい。

高津君がベンチに座ったので、私もその隣に腰を下ろす。さつき、隣り合って学科の説明を聞いたときより、私たちの距離は近い。膝が触れ合える位置に高津君がいて、すごく嬉しいんだけど、もしかして汗のにおいとかしなかなあとか、考え出したら緊張してきて、恥ずかしくって、顔を上げることができなくなつた。

「あつ、恋だ……」

その言葉にどきりとして、ちよつと視線を上げると、高津君は池の鯉を眺めていた。恋と鯉を聞き間違えるなんて、どうかしている。余計恥ずかしくなつて、それをごまかすように鞆を開ける。

私が鞆をあさっていると、横から視線を感じた。高津君に見られていると思うと、ドキドキして、お弁当箱を探すのにすら手間取つた。

「じゃ、じゃじゃ〜ん」

ようやく、お弁当箱を鞆から取り出す。下手な効果音を付けながら、桜色のお弁当包みを膝の上に置く。

「こ、このお弁当ね、全部一人で作つたの。お母さんとかに手伝ってもらってないんだ。だから、あの、そんなに期待しないでほしいんだけどね……」

聞かれてもないのに、勝手に口が回りだす。手伝わってもらっていないのは本当だけど、ちゃんと味見はしたし、きつと高津君も喜んでくれるだろうって、喜んでほしいなって、そんな思いで包みをほどこいていく。

「はい、これ高津君の」

二つに重ねたお弁当箱の一つを手渡す。「ありがとう！」なんて子どもみたいな笑顔で言われて、私は自分のお弁当箱を取り落としそうになる。

量、少なくないかな。高津君、もつとたくさん食べたかったかな。

「じゃ、いただきます」

微笑みながら、高津君が蓋に手をかけたので、私も自分のお弁当箱を、そつと開ける。

「あつ……」

目に映つたのは、お弁当箱の中で、ぐちゃぐちゃになったおかずだった。

「えつ、やだ、どうして……」

慌てて高津君の手元を覗くと、同じようにお弁当箱の中身が散乱して、混ざり合っていた。

「ち、違うの、これ、えつ、なんで……」

どうしよう、なんで、こんなの……。

おかずの量が少なかったの？ だから歩いてるうちに、ぐちゃぐちゃになっちゃったの？

「西野……」

気まずそうな高津君の声が耳に届いて、私はどうしたらいいか分からなくなってしまう。

ちゃんとお母さんに聞けば良かったの？ 私一人で、なんて、そんなことしなきゃよかったの？ 家では、あんなに美味しくできて、だから、だからきつと高津君にも喜んでもらえるって、笑ってもらえるって、そう思ってたのに……。

「ごめんっ……」

高津君の手からお弁当箱を奪い取る。震えながら蓋をして、私と一緒に鞆に押し込む。

「ごめんね、ほんと、ごめんね……」

両方の目に、涙があふれてくる。ダメだつて分かっているのに、泣いたら高津君を困らせちゃうつて分かっているのに、涙は後からあふれてきて、頬を伝う。

最低だ。私、最低だ。

なに浮かれてたんだろう。今日だつて、私が勝手に高津君に付いていつて、でもなんの役にも立てないで、きつと邪魔になっちゃつてた。高津君は、ちゃんと将来のことを考えているのに、適当に推薦で受かっちゃつた私が、調子に乗つて付いてきて、きつと高津君も……。

そこまで考えて、もうそれ以上、考えられなくなってしまう。一生懸命に涙を拭つて、拭いきれなくて、きつと酷い顔だけど、そのまま私は席を立つた。

「ごめんね……」

最後にもう一度謝つて、その場を離れようとする。ちゃんと

高津君の顔を見て謝りたかったけど、いまはできそうもなかった。

「お、おい西野、待てよ！」

歩き出した私の腕を、高津君が掴んだ。こんなときなのに、高津君で力が強いんだな、なんて、そんなことを考えてしまっ自分に落ち込んだ。

「お願い、離して……」

「いやだ」

「お願い！」

「いやだ！」

ぐっ、と強く引つ張られて、かくんとベンチの上に尻もちをつく。

「あっ、ごめん……」

慌てたように、高津君が謝ってくる。なんで、なんでこんなときでも優しいの……。

「さっきの弁当、ちようだいよ」

やめて。

「俺、腹減ってるんだ、食べたいな」

やめてよ。

「西野の手作り、すっげえ嬉し」

「やめてよ！」

その声に、自分で驚いてしまう。高津君も、びつくりしたように私を見る。

「……お願い、もう、やめて。私、高津君に優しくしてもら

資格なんてない」

「なに言ってる」

「だって！ だってそうだもん！ 私、一人で勝手に浮かれて、高津君に迷惑かけて、ほんと、ほんとバカみたい……」

また、涙がこぼれてくる。もう拭おうとする元気もなく、ぼたぼたと、流れるままに涙が落ちる。

「……ほんとはね、気付いてた。今日、私、来ちゃいけなかったんだって。高津君は、一生懸命進路のこと考えてて、でも私は全然そんなことなくて、そんな私が高津君と一緒に大学見に来るなんておかしいんだって……。夏休み、一緒に過ごしたいからって、高津君の邪魔して、自分勝手に、ほんと……」

言葉に詰まる。うつむいた顔を上げられない。涙で視界がぼやける。もう、ダメだ。こんなに泣いちやって。なにやってるんだらう。

「……悪い、開けるぞ」

うつむいた私の上から、声がかかる。最初、高津君がなんのことを言ってるのか分からなかった。そのうち、なにかをあさるような、がさがさとした音が聞こえてくる。はっとして顔を上げると、思った通り、高津君は私の鞆からお弁当箱を取り出していた。

「やめてって！」

今度は怒りにも似た恥ずかしさから、大きな声が出る。だけど高津君は、気にする風もなく、蓋を取る。

「やめて、ほんと、やめてよ、ぐちゃぐちゃなの恥ずかしいん

だつて！」

「うん、ごめん」

高津君の声は、静かだった。

「西野が、弁当見られたくないつてのも、分かる。ごめん。でも、俺、腹減つてるし、西野の手作り、すげえ食いたいし。だから、食う」

律儀に手を合わすと、ぐちゃぐちゃのお弁当を食べ始めた。私は顔から火が出そうになりながら、その様子を見守るしかなかった。

「うめえな！」

まっさきに、そう言ってくれた。

「卵焼き、甘めなんだな！ すつげえうまいよ、俺、甘党なんだ！」

知つてた。だから、砂糖を多めにしたのだ。

今度はアスパラベーコンを箸でつまむと、頬張つて、美味しそうに笑ってくれる。

「これ、アスパラベーコン、胡椒の加減ばっちりだな！」

自分でも自信があった。程良い辛さだなんて。

それから、高津君は、一つ一つのおかずにかちんと感想を言ってくれた。そしてあつとつ間に平らげると、また手を合わせて「ごちそうさま！」と微笑んだ。

「西野、サンキューな、超うまかったよ！」

それは、私が一番聞きたい言葉だった。高津君に喜んでもらいたい、美味しいつて言ってもらいたい、そのために、そのた

めだけに、頑張つて作ったのだ。

気付くと、一度止まりかけた涙がまたあふれてきた。

「ごめんな、西野」

なんで謝つてるのか分からず、私はぼろぼろと泣きながら高津君を見詰める。

「俺、食うなつて言われたのに、勝手に食っちゃつた。ごめんな。でも、美味しかったから、やつぱり食つて良かったよ。俺、自分勝手だな」

そう言つて、高津君はにこにこ笑つた。さつき、私が自分のことを自分勝手だつて責めたから、だから、気にするなつて、高津君も同じようにそう言つてくれるんだつて、気付いた。

「うん……うん……」

頷くことしかできない。言いたいことは後から後から頭の中に溢れてくるのに、口に出そうとすると涙が邪魔をする。優しく背中をさすってくれる高津君の手の温かさを感じながら、私はしばらく、泣き続けた。

ようやく泣きやんだのは、それからどれくらい経つてからだろう。恥ずかしくつて、何時間も泣いていたような気もするけど、実際はせいぜい十分くらいだったのかもしれない。

「落ち着いた？」

覗きこむように尋ねられて、私は顔を隠すように黙つて頷く。きつと目が真っ赤だ。恥ずかしいな。

「高津君、ありがとね、ごめんね……」

「謝るのはナシ、おあいこだろ」

「……うん」

夕方の涼しさを孕んだ風が、私達の間を優しく吹き抜ける。

「……俺、さ」

高津君が、なにか言い淀むように口にした。

「えっ、なに？」

何となく嫌な予感がして、私は静かに聞き返した。

「俺、実は西野に言っておかなくやいけないことがあるんだ」

「うん……」

なんだろう、怖い。あんなに恥ずかしい姿を見られて、高津君、私のこと嫌いになっちゃったのかもしれない。

「実はな、俺、この大学第一志望じゃないんだ」

だけど高津君の口から出たのは、そんな全然関係のない言葉だった。思いもかけないその言葉に、私は黙って高津君を見詰める。

「俺、大学でやりたいことは、なんとなくだけ決まってるんだ。ここでもそれはできそうだって、今日分かった。でも、第一志望は別にある」

そこで口を開かず。私はそっと、続きを促す。

「俺の、本当に行きたい大学はな……」

少しだけ頬を染めて口にしたその大学名は、私が推薦で合格したところだった。驚いて、高津君から目を離せなくなる。

「元々、俺、そこに行きたかった。でも西野みたいに成績良くないし、一般受験するしかないって分かってた」

そこまで一息に言いきると、小さく息を吸って、吐きだして、

続きを口にする。

「俺、この前の模試でポロポロだったんだ。全然ダメ。どう頑張っても、合格には程遠いって感じで。だから今日は、安全圏の大学に見学に来たんだ。そんなんに付き合わせちゃって、悪かったな」

高津君は、私には謝るなって言っておいて、自分は謝罪の言葉を口にした。「そんなのずるい」って私が言うと、また「ごめん」と、困ったように笑った。

「ここも、すごく良さそうだって思った。今日来て良かった。でも、やっぱり俺、第一志望を諦めたくないって、その気持ちの方が強くなった。ずっと憧れてた大学だし、それに、そこに行けば西野と——」

最後の言葉は、風に吹かれて消えていった。だけどしっかりと私に届いて、しっかりと私の頬を赤く染めさせた。本当、高津君はずるい。

嬉しくて、恥ずかしくて、顔が熱い。高津君を見ていると、鼓動が速まって息苦しくなって、そっと視線を池に移す。

お互いに、言葉はない。だけど、そんな静かな時間が、とても心地よかった。

どれくらい経っただろう。日はだいぶ沈んで、辺りに夜の気配が漂ってきた。風が涼しさを運びながら、木々をさわさわと揺らした。

「あっ！」

急になにかに気付いたように、高津君が声を上げた。

「え、どうしたの」

驚いて高津君に視線を移す。

「いま、なにか聞こえなかった？」

「なにか？」

「うん、なんか、笛の音みたいなの……ほら、また！」

高津君は、黙って辺りに耳を傾け始めた。私もならつて口を閉ざす。緩やかに、風が吹く。

「あっ！」

思わず声が上がると。

「聞こえた！」

「だろっ！ 聞こえただろ！」

「うんっ、聞こえた！」

「なあ、これってさ！」

「うん、これ、きつと！」

「祭り囃い！」

声が重なる。互いに目を合わせて、一呼吸。沈黙が、大きな笑いに変わる。

「どこのお祭りだろっ、大学かな？」

「や、もつと遠くつぼいな！」

「ねえ、探しに行こうよ！」

「おお、そうしよう！」

勢い込んで、高津君が立ち上がる。私も後から、すぐに腰を浮かす。高津君はもう歩き出そうとしていて、慌てて隣を指す。そんな私の様子に気付いて、高津君は立ち止まると優しく

微笑んでくれた。

「西野、焦んなくていいよ。一緒に行こう」

差し出された右手に、私の左手を重ねる。高津君の手の温かさが、じわりと伝わってくる。

手をつないだまま、二人で歩きだす。高津君の歩幅は、やっぱり広くて、私は一生懸命付いていかなくちやいけなくて、でも、いまはそれでいいやって思える。大きな高津君の背中を、精一杯追って行こうって思える。

すっかり夜の匂いに満ちた大学構内を歩きながら、また、祭り囃が風に乗って耳に届いた。

「楽しみだね！」

「うん、楽しみだ！」

二人で笑って、二人で歩いていく。

高津君に手を引かれながら、やっぱり私は幸せ者だなあって、もう一度、小さく笑った。

「はい、冷やし中華お待ちどう！」

容器と箸を手渡す。アロハシャツを着たお客さんは、「いただきます」と冷やし中華をすすり、頬をほころばしてくれる。月並みな言い方だが、お客さんの喜ぶ顔を見れたとき、この仕

事をしていて良かったなあと何よりも強く感じる。

本日は、夏祭り。いつも開いている店舗は臨時休業にして、公園内の会場に屋台を出している。店舗に比べると、屋台を出すのは色々手間がかかる。それに売り上げだけ見たら、結局トントンかそれ以下だ。だけど俺は、なんだかんだと毎年出店させてもらっている。もちろん、商店街の寄り合いでの立場もあるからなのだけど、何より俺は、夏祭りが好きなのだった。色とりどりの浴衣、セミの声をかき消すほどの太鼓と笛の音、ソースや調味料の焦げる香ばしい匂い、少しだけ熱を孕んだ夏の夜の空気。俺は、そういったものが、昔から好きだった。アロハシャツのお客さんを笑顔で見送り、ようやく一息つく手元に缶ビールを引き寄せて、ちびりとすすする。少しぬるくなつたビールが、喉の奥をピリピリと刺激する。

夏祭りでは、常連のお客さんだけでなく、今日初めて来てくれる方も大勢いる。一人一人の喜んでくれる顔が嬉しくて、つい熱がこもる。一期一会の楽しさもまた、夏祭りの良さの一つだった。

そしてもう一つ、毎年夏祭りを心待ちにしている理由があった。あまりにも個人的で、誰かに言っても分かつてはもらえないだろうが、年に一度、この日が待ち遠しくて仕方ない理由が――。

「ここら、仕事中に飲んでいいのカー？」

また一口、ビールを口にしたとき。心待ちにしている理由が、その相手が、俺の背中から声をかけてきた。からかうような声

の調子は、すっかり耳に馴染んでいる。顔を見なくても、その声の主が誰だか分かる。

「よう、一年振り」

ビールの缶を机に置いて、ゆっくりと振り返る。少しはにかんで、絵美が小さく手を振っていた。

「やあ、一年振り」

絵美の柔らかな声が、耳の奥をくすぐる。

「どう？ 賑わってる？ テンチョーの店」

相変わらずからかうようなその声に、俺もわざと顔をしかめてみる。

「お前までその名前と呼ぶのかよ」

「だって恥ずかしいんだもん、店の名前」

テンチョーの店というのは、俺が開いているラーメン屋の通称だ。世界中のどんな店にも店長はいるはずなのだが、なぜか俺だけ「テンチョー」と呼ばれ、店の名前までそっちに奪われてしまった。

そんな、忘れられがちな俺の店の本名は、『笑み』。「笑顔で溢れたお店にしたいから」という思いと、絵美の名前が、その由来だった。本人は恥ずかしがっているが、嬉し恥ずかしというヤツだと勝手に解釈している。俺だって、ちよつと恥ずかしいし。

「お客さんいないけど、大丈夫？」

今度は少し本気で心配した様子を見せる。

「大丈夫だって、さつきまで結構いたんだから」

これも嘘ではない。心から笑い飛ばすと、絵美も安心したように微笑んだ。昔から、自分のことは無頓着なのに、やたらと俺のことは気にしてくれる。嬉し恥ずかし。

絵美は、ちらちらと辺りを伺い、さりげなさを装うように「そういえば、由実は何？」と聞いた。少し申し訳なく思いながら、「友達と遊びに行ったよ」と本当のことを伝える。

「お前が来るまでは引き留めようと思ったんだけどな……」

「いいよそんなの、由実に悪いもん。それにしても、もう由実も友達と遊びに行くような歳なんだね」

「うん、一応向こうの親御さんも一緒にしてくれてるけどな」
お祭りを楽しむ人たちの輪に目を向ける。この人混みのどこかで、一番の仲良しの麻衣ちゃんと一緒に、夏祭りを堪能していることだろう。

由実はいま、幼稚園の年長だ。来年からはいよいよ小学生である。絵美の言葉の通り、日々その成長の早さに舌を巻く思いだ。昨年までは俺の足元から離れずにちよろちよろと動き回っていたのにと、つい昨日のこのように思い出す。

「ラーメンくださいな」

絵美と話していると、いつの間にか二人連れの女子高生が店先に立っていた。

「まいど、ラーメン二丁！」

慌てて注文を繰り返し、狭い屋台で麵を湯がく。ちゃんと賑わってるだろ、という思いを込めて絵美を見ると、まるで「分かった分かった」と窘めるように苦笑いしていた。

「はい、ラーメン二丁お待ち！ 熱いから気を付けて」

笑顔で器を差し出すと、二人は嬉しそうに、特設のテーブル席に向かっていた。

「いまの子たち、この辺りでは見ない制服だね」

二人の背を見ながら、絵美が言った。その言葉に頷く。

「今日、大学でオープンキャンパスがあったみたいなんだ」

大学……。それはここから歩いて五分程度の場所に位置する、俺と絵美の出身校だ。絵美の方が一つ先輩だったが、そんなキャンパスライフもすっかり過去の話。今ではその学生がうちの常連客になってくれていて、未だに縁の絶えない所である。

「オープンキャンパスかあ。懐かしいな」

まだ二人の背中を見詰めてはいたが、絵美の目はもつと遠いところに向いているようだった。

オープンキャンパス。それはともすれば、大学生活に最も夢や希望を抱くときではないだろうか。かく言う俺も、その一人だった。「大学ではこんな研究をして、あんな事に役立てたい」と青写真を描いていた。

だが結局、いまはラーメン屋の店長である。逃げたわけではない。むしろ、進んでこの道を選んだ。

自分で言うのもなんだが、俺は大学院でかなり真剣に研究に取り組んでいた。修士の段階で論文も出し、そのまま博士課程へと進んだ。

博士課程では、ただがむしゃらに、研究を重ねた。しかし、いつしかその意義は、かつて夢見た理想を達成するためではな

くなつていった。わずかでも新規性のある結果を追い、一報でも多くの論文を出すことだけに価値が置かれた。書類上の華やかさだけが増していった。

そして、そんな生き方にふと生じた虚無感は、心の内で急速に肥大し、気付けば俺はもう、その道を歩くことが、できなくなつてしまつた

休学届を出し、ただ寝て覚めてを繰り返す日々を過ごした。何も考えられなくなつていた。何も考えたくなかつた。そんなとき、俺に新しい道を示してくれたのが、絵美だつた。

「もつとシンプルに、なにを一番大事にしたいのか考えてもらよ」

その一言が、そんな簡単な一言が、当時の俺にとってどれだけ有り難かつたことか。

教授に謝罪し、俺は大学を去つた。幸いにして、教授は俺を前向きに送り出してくれた。

俺は、絵美の言葉を胸の内で繰り返した。なにを一番大事にしたいのか――。

「ねえねえ、変なこと訊くだけぞさ」

いつの間にか、絵美が高校生から目線をこちらに戻し、いたずらを思い付いたような顔で俺に尋ねてきた。

「なんだよ？」

「女子高生に目移りしない？」

「思わず、吹きだした」

「えつ、いや、笑うほどのことかなあ？ だって、なんか女子

高生って、ただそれだけで可愛いじゃん？ 若いしさー」

「目移りなんてしないよ、流石にもうそんな歳じゃない」

言いつつ、制服姿の女子高生をふと目で探す。

「ただ……」

「ただ？」

濃紺のセーラーカラーを見ながら、呟く。

「由実がすぐにあんな歳になると思うと、心配だよな……」

「おじさんっぽいなあ」

今度は絵美が笑う番だつた。

そのとき、公園内のスピーカーがざりざりと音を立て、アナウンスが流れ始めた。打ち上げ花火の準備が整つたらしい。

「テンチョー！」

アナウンスに耳を傾けていると、聞き慣れた呼び声が届いた。

「常連さん？」

絵美の質問に頷き返す。

「研究室の後輩たち」

十近く歳が離れているのに、俺のことを慕ってくれている。

嬉しい限りだ。その後輩たちは、二人で連れだつて俺の店の方

に歩いてきた。両手には、金魚の入った袋や水ヨーヨーがぶら下がっている。すでに夏祭りは堪能済みの様子。そして何より、二人とも浴衣姿だつた。

「よう、こんばんは」

「よう、こんばんは」

店の前で立ち止まつた二人の後輩、清水と西郷に挨拶すると、会釈を返してきた。

「いいね、浴衣。夏っぽいじゃん」

俺の言葉に、西郷が答える。

「清水がどうしても言ったんですよ。夏を満喫しようって」
言い訳するようなその言葉を受けて清水を見れば、困ったように顎髭を触っていた。へえ、なるほどな。思わず笑みがこぼれる。

「今日、昼に行ったんですよ、テンチョーの店。そしたら臨時休業で、夏祭りのことを思い出しました」

「そうだったんだ。じゃあ、なにか食つてく？」

「はい、もちろん。メニューは、何があるんですか？」

「普通のラーメンと、冷やし中華」

「シンプルでいいですね」

笑いながら、西郷が冷やし中華を注文する。一方清水は黙ったまま、心ここにあらずといった様子で、手首にぶら下げた金魚を見詰めていた。

「……おい清水、注文は？ 食べない気か？」

西郷の呼びかけを受けてようやく顔を上げると、「じゃあ同じので」と相変わらず上の空なまま返事をした。

「なんか清水、今日少しおかしいんですよ」

西郷が困ったように言った。

「そういえば君ら、いまM2だったよな？」

薄焼き卵を作りながら、二人の学年を確かめる。

「そうです」

「じゃあ今年で卒業か。最後の夏休み。そりゃ楽しまないとな」

「清水と同じようなこと言いますね、テンチョー」

西郷が、ヨーヨーをびよびよ弾ませながら笑った。

その言葉を聞きながら、麵をほぐして具材を盛り付ける。

「はいお待ち、冷やし中華二丁！」

二つの容器を差し出すと、西郷が、次いで清水が、順に受け取る。

「頂きます。……冷たくておいしい」

笑う西郷の横で、清水は黙々と冷やし中華にがついていた。

「そうだテンチョー」

麵をすすりながら西郷が話しかけてくる。

「ん、どうした？」

他に客もいないので、ついビールに手が伸びる。一口すすって、先を促す。

「折角なので、テンチョーも一緒にどうです？」

「え、なにになに？」

「清水と話していたんですが、この夏は皆でどこかに遊びに行こうかと計画しています。まあ、八月もじきに終わりますが」
ちらつと清水に目を遣ると、俺らの話を傾けながら冷やし中華を凄く勢いすすっていた。

「うん、それで？」

「もしお時間があればテンチョーも、娘さんと一緒にどこか遊びに」

そこまで口にしたときだった。

「西郷っ！」

清水の声が、割って入った。頬張った麺が、口の中に溢れていた。

「どうした」

怪訝な表情で、西郷が問う。

「俺は、俺はっ」

「どうした落ち着け」

「俺はっ、西郷と二人で出掛けたいっ！」

「なんだ、幹事がそんなに面倒か」

呆れ顔の西郷に、清水の声が被さる。

「そうじゃねえっ!!」

その大きな声に、辺りの視線が集まる。西郷は清水の剣幕に驚いたように口をつぐんだ。

清水は容器に残った冷やし中華を一気に頬張ると、苦しそうにむせた。

「おい、何やってるんだ」

慌てて飲み物を探す西郷に、俺は手元のビールを渡す。礼もそこそこに、西郷から清水の手へと缶が渡っていく。清水は手にしたビールを傾け、一息にあおる。そして、声を張り上げる。

「西郷おお理紗ああっ!!」

好奇の目が一斉に集まる。突然フルネームを呼ばれた西郷は、驚いたように身を強張らせる。頭の後ろで結ったポニーテールが、小さく跳ねる。

「な、なんだ急に!」

「俺はあつ! 清水啓二はああつ!! 貴女のことがああああ

っ!!! 好きだあああああああああつ!!!!」

その瞬間、夜空を大きな火花が彩った。

公園内のあちこちで、さざ波のように歓声上がる。みんな夜空を見上げて、色とりどりに散る火の粉に心奪われている。

俺たちの周りだけ、誰も火花を見上げず、清水と西郷から目を逸らせずにいる。

清水は肩で息をしながら、どこかすっきりした表情で西郷を見詰めていた。片や西郷は、夜でもはつきり分かるほど、顔を真っ赤にして目をあちこちへ泳がせていた。菖蒲の花とツバメが描かれた白地の浴衣に、赤く染まった頬が可愛らしく映える。「な、なに、言ってるんだ、なにを、なに……」

先に口を開いたのは西郷だった。泡を食ったようにもによもによと呟き、すぐにまた口を閉ざす。

「だからっ!」

清水は吹っ切れたのか、大きな声で応じる。

「お前は気付いていなかっただろうけどっ、俺はずっと西郷のことがっ」

「ば、バカやめろ! 何度も言うな! 声大きい!」

「何度でも叫んでやるっ! 俺はっ! 西郷のことがっ!」

「あわわわわわっ!!」

西郷は首元まで真っ赤に染めながら、「こつちへ来いっ」と清水の手を掴んで引つ張った。俺たちが見詰める中、西郷は清水を引きずるようにして、祭りの人混みの中に消えていった。

二発目の火花が、打ち上がった。

二人が消えた辺りを、茫然と見つめる。すると辺りから、まばらな拍手が沸き起こった。驚いて首をめぐらすと、次第に拍手は大きさを増し、気付けば賑やかな嬌声と喝采に包まれていた。

「兄ちゃん、ラーメン一つ！」

ふいに店先から声がかかる。おじさんが白い歯を見せて笑っていた。

「えっ」

「だーかーら、ラーメン一つ！ 兄ちゃん、ここの店の人だろ？」

「あっ、はい、ラーメン一丁！」

慌てて麺を湯がき始める。するとおじさんが、親しげに話しかけてきた。

「いいもん見せてもらったよ！」

「えー、っつ」

「さっきの若い兄ちゃんと姉ちゃんだよ。いやあ、いいね、可愛らしいじゃねえか！」

それは分かるが、俺、関係ないぞ。

そう思っていると、おじさんの後ろから新しいお客さんが顔を出して、ラーメンを頼みつつ「どうもありがとう！」と声をかけてきた。俺は曖昧に頷いて注文を受けることしかできなかつた。なぜか客足は増えていき、気付けば、店の前には列ができていた。どのお客さんも、興奮冷めやらぬ様子であの二人の話に興じている。俺はせつせと注文を捌きながら、人混みに消

えた二人の後ろ姿をぼんやり思い出していた。

ようやく落ち着きを取り戻したのは、それから二十分ほど経ってからだった。最後のお客さんに冷やし中華を手渡し、俺は机に腰を下ろした。ビールを飲むうとして、清水に渡してしまつたことに思い至る。

「お疲れ様、大盛況だったね」

絵美が嬉しそうに笑いかけてくる。

「うん、商売繁盛だ」

疲れていたが、俺も笑顔で応じる。

「ねえ、あの二人、どうなったかな」

絵美の言葉が、清水と西郷を指していることは間違いないかつた。

「どうかな」

短く呟いて、二人の様子を思い浮かべる。

清水の気持ちは、割と前から察していたが、西郷はどうだろうな。一番親しい友人が清水なのは間違いないけど、はてさて。耳まで真っ赤にした西郷を思い出し、小さく笑う。なんだかなだ、上手くいく気がするな。

「なんか、いいね、若いって」

溜息がこぼれる。

「なんだよ、おばさんっぽいぞ」

「うーん、そうかな。そうかもね。たださ、まだこれからなんでもできそうだなって思うと、ちよつと、羨ましいよね」

「……そうだな」

ああ、なんだか、すっかり情けない大人みたいな会話をしているな。

「それにしても、可愛い後輩たちを持ったね。なにに、ああいう教育方針の研究室？」

「どんなだよ」

教育方針は別にしても、いまになって振り返ると、あの忙しい研究室の日々も悪くなかったなあって思える。清水や西郷にとって、いい思い出になってくれれば幸いだ。

「それにあの二人、絵美の後輩でもあるだろ」

思い付いて軽口を飛ばす。研究室は元より学科も違うが、同じ大学ではあるのだ。

「まあそれ言ったら、俺も絵美の可愛い後輩なんだけどな」

「なあに言ってるの、元同級生」

絵美は適当に俺の話を受け流して笑っている。確かに、浪人させたせいで俺は大学では後輩だったが、高校じゃ同じクラスだったのだ。

幾分落ち着いた喧噪の中に、スピーカーがアナウンスを流し始めた。いよいよ、次が最後の打ち上げ花火らしい。

「忙しくて、ほとんど見れてねえな」

「一発目は、びっくりしたしね」

「ホントにな」

言いつつ二人で空を見上げる。最後の一発を、少し淋しい思いで待つ。

「……由実、帰ってこなかったね」

まるで今思い出したかのように、絵美が呟く。どこか切なげな声音に、どう返事をして良いか迷う。

「会いたかったけど、私もそろそろ行かなくちゃいけないからなあ」

「あー、早いな……」

俺たちの間に沈黙が下りる。言いたいことはいくらでもあるのに、口にするのが憚られる。

「……こんな言っても仕方ないけどさ」

無理矢理に口を開く。果たしていまの絵美に伝えるべきことなのだろうか。絵美は優しい視線を俺に送ってくる。一瞬の迷いを断ち切って、続きを口にする。

「俺さ、やっぱり、絵美には食べてほしかったな、俺のラーメン」

言ってから後悔する。どうしようもない、叶う訳のない願いを口にしてしまったことを悔やむ。絵美も困ったように頬を掻いて、ゆっくりと空に視線を移す。

「そりゃ、私だって食べたかったよ。君が大学を辞めてまで進んだ道だもん」

「だよな、ごめん」

「ばしっと、頭を叩かれる。」

「そうやって、自分だけ謝るのずるいよ、相変わらず」

「ああ、ごめん」

「ほらまた、と、絵美がもう一度俺の頭を叩いた。さっきより、力は弱くて、余計に申し訳なくなる。」

結局俺は、自分勝手と知りつつも、ただ身近な人に笑ってほしかっただけなのだ。別に名譽も、富もいらぬ。世界を救える発見も、いらぬ。ただ、そばにいる大切な人を笑顔にしたかった。だから俺は研究室を去り、多くの笑みで溢れる場を作ろうと思った。

それなのに、結局一番大事な人には、俺の手料理すら振る舞うことができなかった。そのことが、ただ、悔しかった。

「あつ！」

絵美が声を上げて、空を指差す。打ち上げ花火の玉が、笛のような音を発しながら、空に昇っているところだった。

そして、夜空に大きな花が咲いた。

「綺麗だねー」

弾んだような声に、空を見上げながら頷く。

「……なあ、絵美」

夜空を眩しく照らす花火を見詰め、俺は絵美に語りかける。

「来月はさ、六日が土曜日なんだ。だから、由実も連れていくよ。一緒に、絵美のところに」

返事はない。ゆっくりと目線を下げると、もうそこに、絵美の姿はなかった。

今年も、あつという間だったな。

淋しく笑う口の端から、小さな吐息が洩れた。

最後の火花が空に消え、祭りも終わりの時間が近付いてきた。

「おとーさんっ！」

店の片付けを始めてみると、由実が元氣いっぱい走ってきて、腰に抱きついた。その頭を撫でてあげながら、後から歩いてきた麻衣ちゃんのお父さんに会釈する。

「ありがとうございました。由実がご迷惑をお掛けしませんでしたか？」

麻衣ちゃんのお父さんは、「大丈夫ですよ」と笑顔で応じてくれる。

「こつちこそ、麻衣の遊び相手になってもらっちゃって、助かりました。由実ちゃん、ずつといい子でしたよ」

すると腰に抱きついた由実も顔を上げ、「いい子にしていた！」と声を張る。保護者二人で笑って、「偉いぞー」と由実の頭を撫でる。

「そうだ、良かったら食べていって下さいよ。ラーメンか冷やし中華しかありませんけど」

提案すると、麻衣ちゃんのお父さんは頬をほころばす。

「じゃあ、ラーメン頂こうかな。あつ、でも、お疲れじゃないですか、高津さん」

「いえいえ、大丈夫ですよ」
仕舞いかけた器具を出し、準備を始める。

すると、急に由実が、落ち着かなげにきよろきよろと辺りを見回しだした。

「ねー、おとーさん」

「どうした？」

「あのね、おかーさん帰ってきてたの？」

無邪気な言葉に、心臓が跳ねる。

「……どうして？」

「なんかねえ、なんか、おかしさんの匂いがした！」

きゃらきゃらと笑って、麻衣ちゃんの方へと走っていった。

そんな由実の小さな体を、目で追いかける。驚きはゆっくり

と温かな喜びに変わり、つい、口元がほころんでしまう。笑い

だしそうになるのをこらえて、そっと視線を空に移す。

さっきまで花火が彩っていた夏の空は、すっかり夜の色に染

まっていた。小さな星が一つ、瞬いた。

夢の中の雪

ジョーズ

夢の中の雪

「放課後、部室に来て」

（僕こと平坂真（ひらさかまこと）と同じく文芸部に所属する深谷彩花さんにそう言われたのは、梅雨のジメジメした空気が去り、代わりに蝉の鳴き声をバックバンドにその存在感を如何なく發揮する夏の暑さが到来した6月下旬のある日のことだった。

昼休みに僕は、今年も春を実感できた日は少なかったな、と長く居座っていた冬の寒気と待ちきれないとばかりに梅雨明け前に既に訪れていた夏の熱気に対し心中でばやきつつ、教室で弁当を広げていた。

僕の席は日当たり良好の窓際の席である。クーラーの存在しない教室の前後二つの入り口にはそれぞれ扇風機が設置されているが、僕の席にまではその恩恵が届かない。開け放たれた窓から吹く風からは多少清涼感を得られるものの、同時にカーテンがなびきそれによって防がれていた直射日光が容赦なく僕に降り注ぐため、総合的に暑さは増しているように思う。

まだ夏真っ盛りというわけでもないのに、暑さには強いと自負している僕はその場所を動かないが、僕以外の窓際の席の持ち主達は皆、昼休みが始まると同時に弁当などを持ち、去っていった。友達との交流及び一時の涼しさを得るための行動なのだろうが、親しい友を多く持たない僕は午前中の授業を経て折角暑さに慣れてきた体を元に戻したくなかった。

そういうわけで、昼休みに窓際の席に座って弁当を食べているのは僕一人であった。そのため、ただでさえ注目を集める彼女がわざわざ他の教室の暑い窓側に来てまで僕に話しかけたことは、僕まで注目を浴びるという結果を招いた。

深谷彩花。この県立朝霧高校の一年生で、端正な顔立ちと細い体躯を持つ美人だ。男子の集まりの中で気になる異性についての話題があがると大抵彼女の名前を聞くことができる。彼等の意見では、友達達の輪の中心で笑いながら会話をしている姿も良いが、髪を耳にかけながら眼鏡越しにハードカバーの本を読む姿がたまらないのだという。彼女が去ったあとに、僕を横目に見つつ教室中で彼女の行動の理由の推測を囁き合う級友達の様子からも、彼女の存在感の強さを伺うことができた。

かく言う僕自身も、彼女に惹かれていないわけではない。文芸部に所属してから部室で見ることの多かった彼女の優しい物言いや気品さを漂わせる仕草は美しいと形容しても遜色ないものであり、健全な男子高校生として魅力的な異性が気になるのは当然のことだった。

しかし、僕の彼女に対する見解の話はそれで終わりだ。これ以上親しくなる間柄ではないし、容姿端麗な部活仲間という認識が変わることは無いだろう。彼女から部室に来て欲しいと言われた際も、何も期待していなかったと言えば嘘になるが、呼び出した理由については深く考えなかった。

文芸部の活動は、隔月で部員の書いた作品を部誌として発行する以外は特に無い。執筆は基本的に家で行えるため、部活動

として部室に行くのは作品の評価会や製本作業の時だけである。それ以外の日には、即ちほぼ毎日であるが、あの自他共に認める変人の部長が集会と称し、持ち込んだトランプやら将棋やらで遊んでいる。部長は大抵、独りで、遊んでいるが、「ぬふふー、今宵の儂は道連れを求めておるのじゃー」と奇怪な発言をしては部員を遊びに付き合わせることもある。今日もそんな部長がトランプ四組使用の大富豪をしようとしてもしたのだらう。人伝に知らされたのは初めてだが、あの部長のことだ、この程度のことを思いつきで実行しても何の不思議もない。

「真(まこと)、深谷さんと、何かあったの?」

弁当を食べ終わって、弁当箱を片付け午後の授業の準備をしようとした時、僕は再び声をかけられた。顔を向けると、泉広太(いずみこうた)が不思議そうな顔をしてこちらを見ていた。

広太は中学時代からの付き合いだ。長身の彼は近くにいと迫力があるが、社交的で明るい人柄で誰からも好かれる性格だ。高校生になっても彼以外に友達と呼べる人間を持たない僕と違い、教室内で彼のことを知らない人間はいない程有名だ。生徒会にも所属し、持ち前の行動力を遺憾なく発揮している。そんな彼も文芸部に所属しており、よく部長の道連れとして部室で遊んでいるのだが、彼にはまだ呼び出しの旨は伝わっていないらしい。

「放課後部室に来て欲しいってさ。部長の生贄召還だと思っただろ」

「え、俺さつき会ったけど、挨拶だけで何も言われなかったよ」

「あれ? じゃあ僕だけ呼び出されたってこと?」

「多分そうだろうな。ということはまさか、告白するんじゃないか?」

「声量を落とせよ。そんなわけないだろ」

「ちら、とにやにやしている広太の背後を窺うと、ギャラリーと化したクラスメート達の動揺が見て取れた。どうやら聞こえてしまったらしい。

「そんなまさか、彩花さんがあんな根暗を……」

「いや、ないだろ。ただの呼び出しのはずだ。そうに違いない。そうに違いないんだ……!」

「まあ、ありえないだろう。逆に罵られるんじゃないか?」

「それはそれでうらやましいが、万が一の可能性を考慮し、校内アイドル保守会に連絡を」

「や、やっぱり、単なる用事なんじゃないかな?」

「いえ、それなら広太君が呼ばれないはずないわ。少なくとも個人的な用件でしょうね」

「あんなやつどこに惚れたのかな? 今度聞いてみよう」

「大変だわ、大事なキャラなのに! 甘×夢(あまかけるゆめ)同好会に報告しないと……!」

不穏な会話が聞こえてくる。何やら怪しい団体らしき名前が二つ程挙がったような気がするが、聞かなかったことにしよう。

広太にも後ろの話が聞こえたらしく、声を落とした。

「ああ、悪い。でも、実際何の用があるんだろうな?」

「僕は知らないよ。本人に聞けば教えてくれるかもよ?」

「うーん。あ、もしかして……」

広太は何かを思いついたらしい。思案中に右人差し指を額に押しつけるという、彼特有の癖をした。彼曰わくこの癖をすることで頭が上手く働こう。科学的根拠のまるでない話だが、難題に直前した際、多くの場合それで解決するそうだから羨ましい。

果たして、彼は自らの考えを述べた。

「部長の新手の実験だった……」

「うわあ……」

ありえそう。というより、言われてみればそれしか納得できる理由がないようにさえ思える。

僕達が入部している文芸部の部長、霧中望(きりなかのぞみ)。

あの変人部長は、自分が面白いと思えることに対しては全く妥協をしない。普段は良識のある一般生徒を演じているが、その裏で噂されている、彼女が残した伝説の数々はどれも一般生徒と呼ばれる人間が残すようなものではない。

曰わく、校庭で花火を打ち上げた、校舎内で単車を乗り回した、屋上から飛び降りて無事だった、などなど。

実際はどの伝説も証拠は存在せず、あくまで複数の生徒がたまたま目撃したただけというが、多少尾ひれがついていたりしてもこれだけの噂が流れる部長はたまたまのものではない。

そんな、決して自殺志願者などではない部長の行動原理は、面白そうだったからの一言で表せるという。これもあくまで噂だが、部長の実験を実体験している僕達はその意見が正しいと

思っている。

「つまり今回の呼び出しは、また何か面白い映像を撮るために部長が画策したものってことか」

「俺が呼ばれなかったってことは、偽告白を受けた真の反応でも狙っているのかもな」

溜め息とともに頭を抱える。

「まあ、気をつけるよ。クラスの皆には上手く説明しておくから」

そういつて、広太は席を離れていった。

一人になった僕は、部長の思惑通りにならぬよう、繰り出されるであろう数々のトラップの予想を試みた。

同時に、僕は入学当時の忌まわしい記憶を思い出してしま

「文芸部、か」

部員勧誘の激しい当時、上級生の誘いに若干の嫌気が差し始めた時に、僕は不意にその名前を思い出した。部活動紹介の際、特に目立つようなアピールをしていなかったにも関わらず、何故か紹介をしていた女性の先輩が印象に残った部だった。彼女に大きな特徴があるわけでもなかったのだが、何故か、親近感と呼ぶのが一番ふさわしいであろう不思議な感情を抱いたのだった。

「文芸部？ あの、たった一人だけで紹介していた部活か？」

僕の呟きに、同じく勧誘に辟易していた広太が反応した。大きな体格ながら運動が不得意な彼は、本人に運動部への興味が

ないにも関わらず運動部に属する先輩方から多くの誘いを受けていた。それらの回避策として、既に入部する部を決めると答えるのが常なのだが、なかにはどこの部に入る気なのか尋ねてくる相手もいる。そこで下手に適当な部の名前を挙げてしまうと、それを聞きつけたその部に所属する先輩が急襲してくる恐れもあるため、いつそのこと活動の緩い部に入部してしまおうかと彼が提案していたのだった。

「うん。活動は週に一度だし、活動内容も緩そうだからね」

あのとき部長は活動内容について、本を読んで意見を言い合ったり、自分で物語を作って発表したりします、などと言っていたので、読書を苦としない僕と広太にはびったりだと思っただけだった。実際の活動が余りに厳しいようであれば入部しなければいいだけの話であるし、相手が少人数なら上級生相手でも意見を言いやすいだろう。

「悪くない選択だな。俺も丁度気になっていたところだし」

「へえ、じゃあ早速行ってみようよ」

そういう訳で僕達は文芸部の部室に足を運んだのだ。

我が校の鳥瞰図は角張ったJの字をしており、校舎に囲まれるようにしてプールがあり、その上にグラウンドがある。体育館は西校舎の北に建っており、移動の間を減らすためか運動部の部室も西校舎の一階に固まっている。逆に東校舎には音楽室や美術室、パソコン室など特別教室が多くあり、それらは文化部の部室としても使用されている。文芸部も東校舎一階の奥にある視聴覚準備室を部室として使用していたため、運動部の

勧誘を避けていた僕達は直ぐに移動することができた。

東校舎一階には、右側に手前から図書室、和室、保健室があり、それらの向かいに視聴覚室と視聴覚準備室がある。視聴覚室の

入り口には、『演劇部 is here! 練習公開あり 新入生歓迎公演には是非是非来てね』と大きく書かれたポスターが貼っており、和室の前には、『茶道部の部室です。興味がありませんの方はどうぞお入り下さい』と墨で流れるように書かれた和紙が掛けられていた。

そこを通り過ぎると、新入生歓迎ムードが一切感じられない殺風景な廊下になった。新入生がここまで来ることを想定してないかのようで、ここは来てはいけなところだったのではないかと、少し不安を感じた。

「本当にここか？」

広太は視聴覚準備室の前に着くと、疑問を口にした。彼もまたこの雰囲気戸惑っているようだった。

「ここ、だろうね」

僕は引き戸の曇り硝子を指差した。そこには『文芸部』とだけ書かれたノートの切れ端らしき紙がセロハンテープで貼られていた。部員獲得に積極的すぎるのは煙たがられるだろうが、ここまで積極的すぎるのもどうかと思った。ちゃんとした部活動ではないのだろうか？

「今からでも引き返すか？」

広太の提案は、もう少し早くするべきだった。視聴覚準備室

より更に先には非常用にしか使われないであろう無骨な鉄の扉しかないため、ここから戻るためには今来た廊下を引き返すしかない。そしてそこには丁度新入生を獲得したらしき演劇部に所属しているであろう上級生がいた。その人物もこちらに気づいているようなので、僕達が文芸部の部屋に入らないということが分かればすかさず勧誘してくるはずである。部屋に入った瞬間入部ということになるわけでもないの、最悪避難のためだけにでも部屋に入ってみるべきだ。

「入ろう」

僕の意図がある程度伝わったのか、広太は無言で頷いた。

コンコン、と二度ノックする。

「入るがよい」

中から声が聞こえた。しゃべり方が紹介時とは違うが、声は同じだった。

「失礼致します」

意を決して引き戸を左に開ける。

「よく来たのう」

視聴覚準備室は一般教室の半分程度の広さだった。入り口近くに本棚や掃除用具を入れるロッカー、奥の隅には演劇部のものであろう大道具などがあるが、人が動く分には不自由が無さそうだった。部屋の中央には入り口から見て縦に長い長方形の大きな机があり、それを囲むようにしてパイプ椅子が並んでいる。そして独特の喋り方をする声の主は、入ってきた僕達と向かい合うように座っていた。

「扉を閉めて、座るがよい」

僕に続いて入ってきた広太が後ろ手で扉を閉めることを確認し、椅子に座るため一歩進んだ。

「うわっ！」

途端、何かが足に引っかかり、僕は前方に大きく体勢を崩した。

「危ない！」

僕の転倒を防ごうと、広太は僕に手を伸ばす。

しかしながら、まだ扉を閉め切っていなかった広太は反応が一瞬遅れていた。

この一瞬が致命的だった。

その間に僕は更に前のめりになり、転倒の被害を和らげようと咄嗟に利き腕である右手を前方に出した。それにより、左手で扉を閉めていた広太は右手を伸ばしたわけだが、彼が掴めたのは僕の左手だけだった。広太は僕の真後ろにいたため、彼の右手と僕の左手の間には距離があった。それを掴むためには彼もまた体を前に出さなければならず、結果、広太は僕の左手を掴んだものの踏ん張りがきかず、倒れまいとする僕が引く力に適わなかった。左腕を引かれた僕はというと、もつれた足を軸に半回転し、倒れながら広太と向かい合う形となった。伸ばした右手もそれに伴い床ではなく倒れかかってくる広太に向けられ、そのまま僕と広太の体は重力に従い、重なるようにして倒れた。

「ぐあっ！」

「すまん！」

「ほほう！」

三者三様の声がかかる。

「悪い、今どくから……」

広太が立ち上がる。僕も立ち上がるようにするが、その前に文芸部の部長が僕に近づき、その場で屈んだ。もしかしたら手を貸してくれるのかと思つたが、彼女の手は僕ではなく、僕のすぐ隣にある本棚に向かって伸びた。不思議がる僕達をよそに、彼女はその一番下の段の中から、一冊の黒い国語辞典を取り出す。

「予想外の収穫があつたのう。これは動画のほうも期待できさうじゃ」

しかしそこから出てきたのはビデオカメラだった。どうやら国語辞典にカモフラージュされたビデオカメラの隠し場所だったらしい。

「カメラ……？ 動画……？」

「つてちよつと、何撮っているんですか！」

僕の言葉で広太の混乱は解けたらしく、僕もようやく立ち上がる事ができたが、その時には全てが終わっていた。

文芸部部長はスキップしてもといった場所に戻ると、カメラを大事そうに鞆にしまった。

「待たせたのう。今のは気にせず、席に着くがよい」

「いや、気にしないわけじゃないですか！」

僕は叫ぶも、彼女はにこにこしている。

「ていうか、何で盗撮なんかしたんですか？」

「盗撮とは人聞きが悪いのう。あれは防犯用のカメラじゃ。いかかわしいものを撮る目的は無き故、言葉が過ぎるぞ」

「けど、俺達にはその存在を知らせずに撮ったことじゃないですか」

「後々説明するはずだったのじゃよ。撮った後とはいえ、その存在も明かしたのじゃから、許してくれぬかのう？」

口では謝っているものの、表情は相変わらずにやけた顔のまま僕と広太の抗議はあつさりと返された。そんなに嬉しいものが撮れたのだろうか？

「この紐を仕掛けたのも貴女ですか？」

僕は足下から、床とほぼ同じ色の紐を拾う。紐の一端は本棚の後ろから、もう一端は掃除用具を入れるロッカーの後ろから、それぞれ伸びていた。手練り寄せると、床をするすると這つていく何かが見受けられる。そしてそれはどちらも、彼女の足下から動いていた。恐らく、それぞれ本棚とロッカーの後ろから紐をまわし、手で持つて、僕が一歩足を踏み出した瞬間に手を引くことで紐を張ったのだろう。僕はまんまとそれに引っかかり転倒してしまったというわけだ。

つまりカメラも防犯目的というのはただの口実で、僕達のように入ってきた人間の醜態を収めるために仕掛けたのだろう。「知らぬなあ。この部屋は演劇部の大道具などの保管場所にもなっておる故、それもまたその一つではないかの？」

しかし彼女は全く揺るがなかった。確かに、物的証拠があつ

ても実際に彼女がそれを行っていたことを示す証拠が無い以上、彼女の行動を証明することはできないのだ。それが可能だったのは彼女しかいないとしても、実は僕が何も無いところで転倒しただけだったという可能性は無くすることができない。

僕は反論できず黙ってしまふ。

「その映像、何に使うんですか？」

広太が話題を変えた。彼もまた彼女に非を認めさせることは難しいと判断したのだろう。

あのカメラには僕と広太の転倒シーンの一部始終が映っているはずだ。あまり大多数の人に見られないものではない。とはいえ、見られても少し恥ずかしいだけで大きな害はないはずだ。ないはずなのだが、しかし、彼女の喜びようを見ると、とても嫌な結果を招くような使い方をする気がしてならない。その映像をどういった場所で何の目的で誰が見るのかは大きく気になった。

「先にも言った通り、防犯目的のカメラじゃからのう。特に不審な人物などが映っていないかどうかを確認し、その限りでなければ映像は破棄するのじゃ」

「あ、そうなんですか」

それを聞いて広太は安心したように息をつくが、僕は食い下がる。

「先輩、さつき予想外の収穫だとかなんとか言っていましたよね？ あれはどういう意味ですか？」

「はて、そんなことを言ったかのう？」

あからさまに惚けてみる彼女を見て、嫌な予感が津波のように押し寄せてくる。

「教えて下さい。その映像、本当は何に使うんですか？」

「僕は嘘を言ったわけではないぞ。詳しく言わなかっただけじゃ」

「撮られた当人たちに十分な情報開示をしないのはどうかと思いますか？」

「大したことではないからのう。話す必要は無いと思ったのじゃ」

「それは僕達が判断することです」

「ふうむ、仕方がないのう」

「やれやれといったように彼女は肩をすくめた。

「このビデオカメラはのう、本来儂の物ではないのじゃよ。人気の無い場所に一人でおる儂の身を案じ、友人が貸してくれたものなのじゃ。そして儂は機械に疎いゆえ、映像の確認が上手くできぬののう。その友人に確認してもらうのじゃ」

つまり彼女ではなくその友人が僕たちの映像を見ると、そういうことだろうか。それだけならば、まあ、確かに大きな問題ではないが……。

「それだけ、ですか？」

しかし、それだけではあの喜びようを説明できない。

「目敏いのう。お主の察している通りじゃ。これだけじゃありませんよ」

「続けて下さい」

先を促す。彼女はため息をつき、しかし笑みは全く崩さないまま続けた。

「その友人はのう、男の子同士の熱い、あつつくつくつく友情に対して並々ならぬ興味をもっておるのじゃよ。先ほどのお主らの映像は、先ず間違ひなくあやつに気に入られるじやろうから、良い手土産ができたと思つたのじゃよ。ほれ、これで終いじゃ。大したことではなかつたじやろう？」

「……………」

大した問題ではない、のどころか。客観的に考えると特に問題が起きそうな気配は無い。その友人とやらは僕と広太を知らないだろうし、見られても少し恥ずかしい思いをするだけだ。だけなのだが……。

僕は広太を見る。広太も何やら不穏な空気を嗅ぎ取つたらしく、複雑な表情をしていた。

嫌な予感の波は引いたように見えるが、それは第二波、第三波の前触れのようにも思えて。

その映像を彼女の友人に見せることで、何か取り返しのない事態を招いてしまうかのような、そんな不安が少しずつ、だが確実に僕たちに迫つていた。

理屈ではない。何かしらの本能が、危険を訴えている。

「その映像、破棄していただけませんか？」

不安に耐えかねた僕は、言った。

「ふうむ、何故じゃ？ 友人一人が見るだけじゃ。問題は無からう」

「そうかも知れませんが……」

どうしても曖昧な説明になつてしまふが、ここで退いてはいけないと自分に言い聞かせる。

「お願いします。その、僕らにとつて、ものすごく恥ずかしい映像なので、これ以上周知させないでください」

個人的な感情を理由に破棄を求める。個人の感性の多様性が認められている日本において、これを退ける理由はそうそう無いだろう。

「成程のう。それほどまでに恥ずかしかつたのか？」

にやにやしたまま彼女は尋ねる。言つてしまつたからには撤回するわけにもいかず、僕は押し通すことに決めた。

「ええ、そうです。すつごく恥ずかしいので、やめてください」
「じゃが、僕にはこのビデオカメラを操作することはできんのでな。悪いが諦めてくれ」

「ああ、だったら俺が消去しますよ」

機械に強い広太が言う。しかし彼女は首を縦には振らない。
「このカメラは友人の大事な所有物じゃ。会つたばかりで所存も分からぬ者にそう易々とは貸せぬよ」

「うつ……」

苦しい状況だった。このままでは言いくるめられ、あの映像がどこの誰とも分らない彼女の友人に渡つてしまう。

どうすれば、どうすれば阻止できる……？

僕が打開策を模索しはじめたときだった。

「おお、そうじゃ」

彼女は何かを思いついたかのように手を叩いた。

「えっ？」

突然の声に、僕の思考が停止する。このタイミングで、彼女は何を思いついたんだ？

「文芸部に入部してくれぬかのう？ さすれば知らぬ仲ではあるまいて。カメラも貸してやろうではないか」

その言葉で、僕はこの部屋に来た目的を思い出した。

元々は他の部活動の勧誘を避けるための訪問だったのだ。ビデオカメラの映像の削除に躍起になっていたが、入部することで解決するなら、それに越したことはないのではないだろうか？

広太の反応を窺う。彼も思案顔をしていたものの、やがて何かを決心したかのように頷いた。

「分かりました。是非、文芸部に入部させてください」

「うむ。歓迎しよう」

こうして、僕と広太は文芸部に入部したのだった。

そして、これら全ては僕と広太が自然と入部するよう考えを誘導させるためだったのだと気づいたのは、同じような方法で深谷彩花さんが入部させられたと聞いた時だった。

それからというもの、部活動という大義名分の下部長はやりたい放題だった。普段は部長一人で部室に籠り、トランプなどで遊んでいるが、突発的に思いつく人間観察のための実験と銘打った悪戯の数々はなんとも陰険で、その上証拠も残さないものだから教師に訴えることもできない。呼び出しに応じない

場合にはさらに質の悪い別の実験が実行され、僕たちは巻き込まれるたびに仕方ないと諦め、泣き寝入りするしかないのだった。

これを免除される条件が、良質な文芸作品を書くことであった。部長曰く、「儂の実験より面白いものを書いて来れば実験は免除してやらんこともない」とのことだったが、小説なんぞ全く書いたことのない僕たちが面白い話などを書ける筈もなく、大抵実験に強制参加させられる羽目になっていた。

そんな僕たちを見て、実験を免除された彩花さんは面白そうに笑うのだった。それを憎く思えないのは、彼女の美貌の成せる技なのだろうか。

深谷さんがどういった思いで部長の思惑にのつたのかは定かではないが、部長の遊びやノリに付き合える程くだけた性格をしている彼女のことだ、もしかしたら面白半分で付き合っているのかもしれない。

午後の授業が終わった教室で、僕は深谷彩花さんの心情を推測していた。

だが、僕がそれに付き合う義理は無い。面白い反応を求められていても、あの部長に対し弱みを握られることは避けたかった。

頭の中で告白ドツキリの他にもいくつか実験（またの名を悪戯）の候補を挙げたところで、ホームルームが終わった。途端に教室が騒がしくなる。僕は手提げ鞆を肩にかけると、一際騒

がしい集団の中にいる広太に声をかけた。広太は話しをしていて級友に、ちよつと待つて、と断つてからこちらを向く。

「どうしたの？」

「広太は今日、部室に行くのかどうか聞きたくつて」

「……いや、行かないよ」

僕が尋ねた途端に歯切れの悪い言い方になり、僕に向かつて合掌する。面倒ごとに巻き込まれたくは無いのだろう。僕としては、一人で来て、とは言われていないことを利用し、二人で行つて部長の迷惑を外したかつたのだが、仕方がない。

見ると、先ほど広太と話していた何人かのクラスメイトらも、僕に向かつて手を合わせていた。

部長の噂はかなり広まつているとはいえ殆ど迷信としてしか伝わっていないはずなのに、まるで死地に赴く人間にするかのように接せられるのは何故だろう。広太が彼らにどのような説明をしたのが気になつた。

「ねえ、広太君の言つてたこと、本当かな」

「間違いないですよ。ほら見て、あの通夜の如き空気」

「先輩から聞いた悪魔の肉体改造伝説は、本当だったの？」

「深谷さんに呼び出されたとなれば、例え畏だと分かつていても断れないからな。なんて周到なんだ……」

「こんなにも早く級友を一人失うことになるなんて……。くつ！」

「また一人、闇に引きずり込まれ帰らぬことのない哀れな犠牲者が生まれる……」

広太がしたらしき噂を背後に聞いた。どうやら他の噂をも利用して僕の危険をアピールしてくれたらしい。その配慮はとも有り難いが、改めて部長の悪戯の凄まじさを実感せざるを得ず、部室に行く気がどつと失せていった。

試しに「アイルビーバック」と棒読み口調で言いつつ力なく親指を伸ばした右手を上げたら、数人が目頭を押さえて上を向いた。彼らの想像する僕の未来像が遠からず当たっているような気がして、さらに気分が重くなつた。

ため息と共に、教室を後にする。このまま逃げ出したい気分だったが、逃げた後日行われる部長の報復はより恐ろしいものだ。行くしかなかつた。

教室を出て、一旦職員室に向かう。部活動のため部室を使う場合、職員室から鍵を借りる必要があるためだ。部長が僕に待ちぼうけをさせるつもりで呼び出した可能性もあるので、先ずは鍵がちゃんと貸し出されているかどうかを確認する必要がある。

職員室についての。失礼します、と断り、特に返事が返つてこないことを確認してから職員室の扉を開ける。入つてすぐ左側にある、鍵の貸し出し状況が記されたノートを見ると、文芸部の部室である視聴覚準備室の鍵は、深谷彩花の名義で既に借りられていた。それだけ確認してから、失礼しました、と言つて職員室を出る。待ちぼうけをさせるつもりではないらしい。

職員室から部室へと向かう間、窓からは校舎と隣接した屋外プールが見えた。水泳部と思われる生徒が水しぶきを上げて泳

ぐ姿は何とも涼しげに見える。

プールの向こうに見えるグラウンドでは、どこかの体育会系部員が走っていた。

開け放たれた窓からは、蝉の合唱が飛び込んでくる。空気は熱気を帯び、何かを急かすかのように体温を上げる。

「夏、か」

ため息と共に漏らした咳きは、蝉の声にかき消される。これが高校生となった僕の、新たな日常だった。

一階にある下駄箱から少し離れた目立たない角を曲がると、薄暗い廊下がある。一般生徒はあまり来る機会の無い場所だ。文芸部の部室は、廊下の先の保健室の向かい側にある視聴覚室の、更に奥に位置している。直ぐ隣にグラウンドへと続く無骨な扉があるが、避難時にしか使用されないものだ。保健室手前にある和室で活動する茶道部も、視聴覚室で活動する演劇部も、部室を共にする漫画研究部も、金曜日は活動日でない。よって文芸部部室周辺は全く人気がなかった。

僕は部長によるブービートラップを警戒しながら進むが、何もないうまま部室の前まで到達する。中は電気がついているが、話し声などは聞こえない。僕という獲物を今か今かと待ち構えているのだろうか。

僕は一つ深呼吸すると、自分の姿を中にいる人物に見せないよう部室の引き戸を開けた。

「誰？」

中から柔らかい声が耳に届いた。彼女と部室にいたときに何度か聞いたこの声は、間違いない深谷彩花さんのものだった。

「僕だよ」

扉から離れた場所に姿を現した僕を見て、彼女はとても嬉しそうに微笑んだ。

線の細い体躯、肩まで伸びた艶やかな髪、整った目鼻立ちと、男子同級生の話題に上がる人物として相応以上の容姿を持つ彼女の微笑みは、絵になりそうな程美しかった。夏服である半袖の白いカッターシャツも着崩したりはせず、スカートもちゃんと膝が隠れるように穿いている。清楚、という言葉を体現しているようだ。

彼女の立ち位置は、丁度引き戸を境に僕と対照だった。微笑む彼女を見て、自然と僕の頬も緩む。

「おお、真か。僕が呼ばぬのに来るとは、中々に關心じゃのう」彼女の背後から届いたその声を聞いて、頬が強張る。そうだが、忘れるな、ここには部長がいるんだ。少しでも気を抜いたら終わりだと肝に銘じるんだ。

部長も制服を着崩すことなく、いつもの、入り口から入ってきた人と向かい合うことのできる席にいた。この人ももう少し大人しければ好印象を抱くことができるのだろうが、彼女が大人しくなるのは部室の外、他人の目につくような場所においてのみである。その豹変ぶりからは噂が噂に留まる理由を悟らざるを得ない程だ。

部長がいるということは、偽告白でもないのだろう。すると

また糸か何かを使って、僕が深谷さんを襲うかのような写真でも撮るつもりなのだろうか。実際にその手のものを撮られた際の未来を描き、ぞっとした。

油断なく部室内を観察する。畏らしきものは見受けられない。

「どうしたの？ 入ってよ」

「うん」

僕は多大な精神力を使い何も心配していないかのように振る舞う。面白いことが大好きな部長は、白けることが大嫌いだ。かつて広太が入室した際、警戒心を露わにした瞬間制裁が加えられたことを僕は忘れていない。

ゆっくりと室内に入ると、素早く目を動かし上下左右を確認した。床、天井、掃除用具入れロッカー、本棚、それら全てに異常は無い。

畏があると見せかけて実は何も仕掛けておらず、怯える僕を見て楽しむのが目的なのだろうか。いや、そう思わせておいて第二第三のトラップを仕掛けている可能性は高い。気は張っておくべきだ。

「丁度良い。三人でじじ抜きでもしようではないか」

僕と彩花さんが椅子に座ると、部長がトランプ遊びを提案する。それ自体はいつもやっていることだが、もしかしたら何かを企んでいるのかもしれない。

「罰ゲームとかあるんですか？」

「おお、儂としたことがそんな指摘をされるとはのう。そうじやな、ゲームを盛り上げるために罰ゲーム付きで行おう」

確認するつもりだったのだが、墓穴を掘ってしまったらしい。激しく後悔しつつ、部長の言う罰ゲームの内容を待つ。一体どんな罰ゲームをさせる気なのだろうか。

「負けた者は女装写真を撮られる、というのはどうじゃ」

「待ってください！ 罰が不公平すぎます！」

明らかに僕だけを狙ったものだろう。まさに性差別だ。

「仕方ないのう。では負けた者は女子トイレに」

「同じじゃないですか！ 僕を犯罪者にする気ですか！」

恐ろしき罰ゲームの内容を聞き、今すぐダッシュで帰りたい気分が襲われる。早まるな、ここで逃げたら後々さらなる悲劇が巻き起こるぞ。

「はっはっは。冗談じゃよ。そうじゃなあ、負けた者は三人分のジュースでも買ってきて貰うかの。代金は儂が出すので」

「……………ありがとうございます」

笑みを保つ部長に、軽く頭を下げる。からかわれていただけのようにだった。

部長は時折こういった優しさを見せてくれるので、中々憎めない。一体どこまでが計算なんだか分からないが、最低限感謝の念は忘れないようにしている。勿論、舐めさせられた苦汁も忘れないが。

いつか色々とお返しをしなければ。

トランプを配り始める部長を見ながら何度目かになる決心をして、僕は悪戯を回避するために改めて気を引き締めた。

「むう、負けたか」

僕が部長から取ったカードで最後の一組を揃えると、部長は苦笑いして言った。部長は手からクイーンの手紙を取ったカードを出し、伏せてあったカードを表にする。当然、それもまたクイーンであった。

僕は辛くも部長に勝利した。負けたとしてもお使いを頼まれるだけなので大したことではないが、負けた途端に罰ゲームを変えろという理不尽なことを平気でする部長である。勝っておいて損はないだろう。

けれど、こういう勝負で部長が負けるなんて珍しい。いつもなら嬉々として罰ゲームをさせる側なのに、する側になるなんて初めて見たかもしれない。まあ、運の絡む遊戯だ。全戦全勝という方がおかしいだろう。

「では、僕が買いに行くとしよう。希望はあるか？」

「ミルクティーをお願いします」

「私は緑茶で」

僕と彩花さんの言葉を聞き、部長は頷いた。

「いいじゃろう。暫く待っておれ」

そう言つて、部長はトランプを片づけぬまま引き戸も閉めずに出て行った。

僕と深谷さんが部屋に残される。

「……………」

こうして二人で取り残されると、何を話していいか良く分からない。部長がジュースを買いに行く場所は学校の近くにある

品物が安いスーパーマーケットのはずなので、二十分はこの間まだ。もしかしてこれこそが部長の目的か？ それともその間に部長は実験用の道具を持ってくるとか。いやしかしこの状態はトランプの勝ち負けの結果だし、それとは関係ないはずだが

あれ、とそこで僕は一つの疑問に思い至る。

そもそも、これは本当に部長の実験なのか？

部長の罠を回避することばかりに頭を使っていた僕は、部長という脅威がなくなつた今、他の可能性を考える余裕が生まれ
ていた。

俯き、思考を深める。

実験を行うとき、部長はいつも直接僕たちに実験があると言いに来ていた。だから僕たちは覚悟して実験に臨むことができたので、入部の際のような致命的な失態は犯さなかった。今回そういった覚悟抜きで部長が僕たちを撮影しようとしているんだと決めつけていたが、その前提が間違っているのではないだろうか。勿論、実験ではないと思わせて実験させるということとは何回か行われたし、今回もそういうケースであるということとを否定はできないが、例えそういった場合でも、やはり事前に部長が直接、実験があると僕たち二人に通達に来ていた。僕だけに對し深谷さんが部屋に来て欲しいとだけ言つた今回の状況は、前回までの通達に比べるとかなり特殊なものだ。思えば、部長は僕の来訪に對し関心だと言っていた。とほけているだけかと思っていたが、実際に意外だったのだろうか。いや、

やはりとぼけていて、深谷さんは巨大な釣り針であるとか……。
思考が同じ場所を回り始めた。右手でこめかみを抑え、思考を中止する。

駄目だ。疑い始めたらきりが無い。答えの出ない問いは止めよう。

とりあえず、部長の実験を警戒するという基本的なスタンスは変えないこととした。気を張っておいて損はないだろう。

待てよ、と新たな疑問が浮かぶ。

もしこれが実験でないとしたら、深谷さんは何の用事で僕を呼び出したんだろう。部長がいる部屋に呼び出したということは、ただ単純に三人で遊びたかっただけだったのだろうか。それとも結局実験で……、いや、そこを考えるのは無駄だ。折角二人きりなのだから、聞いてみてもいいかもしれない。実験の呼び出しだったのなら彼女は嘘を言うだろうが、それならそれで別に構わないし、別の要件で呼び出したのなら今こそそれを聞くべきだろう。

聞こう。自らの行動を定め、まさに深谷さんに話を聞こうとした時だった。

「ねえ、深谷さ——」
ピシヤン。

引き戸の閉まる音に驚き、入り口に目をやる。そこにはいつもの間にか深谷さんが立っていて、僕に背を向けていた。

ああ、彼女が閉めたのか。現象の理由に納得するも、新たに納得のいかないものを知る。

何故彼女は引き戸を開めた？

普段であればさして気にならない他人の行動の理由に、しかし、僕は大きく疑問を抱いた。

何故僕はこんなに彼女の行動が気になる？

その疑問に対する答えは既に出ている。出ているのだが、あまりにも抽象的すぎて、その答えを信じられないでいた。

違和感。

引き戸が閉まった瞬間である。突如として大きな違和感が僕を襲った。景色が変わったわけでもない。変な音を、匂いを、感じているわけでもない。それにも関わらず、何かが変わったと僕は悟っていた。

空気が変わったのだろうか。しかし僕がそれを知る根拠は何だ。

考えても、謎は深まるばかりだった。

パチン、と音がして、部屋を満たしていた蛍光灯の白い光が失せる。深谷さんがスイッチを切っていた。カーテンによって遮られた、色の薄い陽光が部屋を照らすのが、先程と比べ景色は色褪せた。

深谷さんは、何が目的で電灯なんか消したんだ？

室内に静寂が訪れる。微かにでも聞こえていたはずの、蟬の声や運動部の掛け声が、今や耳を澄ましても届かない。おかしい。絶対になにかがおかしい。

異様だった。窓の向こうには、扉の先には、間違はなく日常があるはずなのに、この部屋だけがそこから切り離されている

ように感じた。僕は複雑ながらも日常に生きていたはずだったのに、気がつくとき非日常の渦中にいるようだった。何度か訪れているはずの部屋が、まるで違うもののように思える。漠然とした不安は、段々と恐怖へと変わっていった。

部長の実験とは違い、世間体や社会的立場の危険に対する恐怖ではなく、もっと深い、原始的な恐怖だった。

何故だ、何故だ、と不安定な精神が答えの分からぬ問いを自身に繰り返す。

いても経つてもいられなくなって、立ち上がろうとしたときだった。

ぐらりと、と、突然視界が歪む。

何が起きたのか分からなかった。急に視界がぼやけたのだ。薄い色ながらもそれぞれの識別ができていた世界が、霞がかかったかのような、漠然とした世界になった。まるで揺らめく水面を見ているかのような。物と物の区別が上手くつかず、混ざり合っている一つの背景のようになっていた。

だが何故か、扉の前にいるのが彼女だけは、前と変わらずはつきりと見えた。

ぐるりとその彼女が首を動かし、横目でこちらを見た。その顔は深谷さんのものであるはずなのだか、霞がかかった世界中で唯一姿が変わっていないにも関わらず、まるで違うもののように思えた。

「うっ！」

突如彼女が全く別のナニカに変わってしまったように思え

て、混乱していた僕は声を出す程驚いた。そんな僕を見て、半分しか顔の見えない彼女は、にたり、と笑った。

その笑みは、普段のものと同じには思えなかった。同じ人間が、ここまで違う微笑み方ができるものなのか。

「どうしたの、真くん？」

その声を聞いて、僕はまた声を上げそうになった。絶対に見つかってはならない相手に後ろから声をかけられたかのような恐怖が身体を走る。

そして悟った。どんな方法を用いたのかは分からないが、この世界を作り出したのは彼女のせいだ。

逃げる。

本能の警告に、しかし身体は従わなかった。立とうとしても座ったままで、動こうとしても、気づかぬうちにだらんと下がった手の指一本さえ動かない。体は完全に脱力していた。

「あ、あ、」

何か言おうにも呂律が上手く働かず、意味の無い言葉が発せられるだけだった。

彼女はゆっくりりと、恐怖を助長させようとしているのか、ともゆっくりりと歩き、僕に近づいてくる。

「動けないでしょ」

ぐにやぐにやと変わる世界の中で、形の変らぬ笑みを浮かべながら彼女は言う。獲物を捕らえた罌の出来に満足しているようだった。僕は益々混乱し、恐怖する。

彼女は一体何者だ。何故僕をこんな目にあわせた。これから

何をするつもりだ。

答えは、出ない。

彼女との顔の距離が近づく。彼女の顔はやはり美しかった。だが今はそれがこの上ない恐怖の対象となっていた。

す、と無造作に彼女の指が僕の喉に触れる。その瞬間、喉元に刃物を突き付けられているかのような恐怖を感じた。生殺与奪は彼女の思うがままなのだと思つた。全身に悪寒が走り、皮膚が粟立った。

僕の恐怖を知つてか、彼女はくすつと笑つた。僕は完全に弄ばれていた。彼女の行動を見ることしか出来ない僕は、それにより恐怖し、彼女を楽しませていた。

もし彼女がそれに飽きたら。

頭に思い浮かんだ疑問の答えを想像し、僕は身震いする。

「それじゃあ、ばいばい」

宣告が、下つた。

片手で僕の喉に触れたまま、彼女はもう片方の手で眼鏡を外した。大きな瞳が僕を捉える。黒いそれは、さながら底の見えない深淵のようで、吸い込まれそうだった。深谷、彩花。その美しさに魅せられた人間は、今の僕のように、深い谷へ引き込まれていったのだろうか。

彼女は更に顔を近づけた。瞳に僕が映る。その表情は、自分でも驚く程強張つていて――

「いただきます」

そんな彼女の声が聞こえた。喰われる、と怖い程に実感した。

理屈ではなく、僕の全てが喰われてしまうと悟つた。首を回し僕の首もとに顔を近づける彼女は肉食獣で、僕は捕えられた草食獣だった。

もう何も不思議に思わず、頭の中は逃げたいという一心だった。考えることは放棄していた。ただただ突き付けられる現実に従うしかなかった。まるで悪夢だ。現実ではありえないような事態を認知していて、早く夢から覚めなければならぬと分かっているのに、体は思つたように動かない。

ああ。

死を覚悟する直前、不意に、僕の脳裏にある記憶が浮かんだ。いつの頃かは思い出せないが、夢の中の記憶である。

夢の中でも僕は、似たような境遇に陥つていた。動かない体、歪む世界、近づいてくる恐怖、そして――

そしてその後、僕は何かに、誰かに助けられた。

そうだ、その時僕は――

「た、」

こう、言つたんだ。

「たす、けて」

語尾が掠れるようになった。

僕に喰らいつこうとする彼女は一瞬だけ動きを止め、

「やだ」

からかうように言い、動きを再開する。

僕の言葉で変わったのは、それだけだった。

事態は何も解決していない。

夢の中の話が現実に通じる道理も無い。

けれども、何故だろう。

僕はこの時、先ほどまでの戦慄も全て忘れ、自分が助かることを信じて疑わなかった。

喉に歯が当たる。

「きゃっ！」

途端、彼女は短い悲鳴を上げた。その瞬間、先ほどの記憶はどこかへ消え去り、世界に色が戻った。

彼女は椅子に座った僕の傍で尻餅をついていた。

「どうして」

彼女は驚いたように言った。僕にも何が起きたのか分からない。しかしどこかで、やはりこうなつたかと現実を受け入れていた。

立ち上がる。難なく椅子から立ち上がることができた。両手で握って開いてを繰り返す。問題はない。

日常に戻つてこれたことを実感した。

「君は、一体」

彼女がこちらを見上げて疑問を口にする。

「それは、こつちの台詞、だよ」

僕は彼女を見下ろしながら言う。今の彼女は、得体の知れない何かでなく、ただの人間の深谷彩花さんのように思えた。

今なら彼女にこの事態を説明させることも可能かもしれない。けれど、リスクが大ききように思えた。いつまたあの謎の現象が僕を襲うかも分からない。

ここでとるべき行動は――

「帰るね」

「えっ」

僕はいつでも帰ることができるように近くに置いておいた手提げ鞆を持つと、足早に部室の出口へと向かう。

「それじゃ」

「あ、ちよつと……」

何かを言いかけた彼女の言葉を待たず、僕は扉を閉めた。

「……………」

部室から、走らずに、けれど出来るだけ迅速に離れる。忘れていた恐怖が戻ってきたのだ。背中に冷や汗が流れ、腕には鳥肌がたっていた。

生きている。僕は今、日常に生きている。

そのことに心から喜ぶと同時に、また襲われるかもしれない不安が募る。

振り返ると、部室の扉は閉まったままだった。彼女が追つてきたら走つても逃げようと思つていたが、どうやら彼女は追つてこないらしい。それでも焦りはあった。

下駄箱に着くとすぐにスリッパから靴に履き替え、校舎から出た。

「むむ、どうした真よ？」

校門のところで、買い物を終えたらしい部長とすれ違った。その手にはミルクティーと緑茶、それと部長のものであろうエナジードリンクがあった。

「すみません、折角買って頂いたのに。体調が悪くなってしまうして」

そう言つて僕は頭を抑える。実際、あの変な体験のせいで僕の頭が幾分おかしくなつてしまつたのではないかと少し心配していた。

「ふむ、そうか。明日明後日はゆっくり休むが良かるうよ。来週、また何か実験をするかも知れぬのでな」

意地悪そうに笑う部長に、少し救われた気がした。今だけは部長の実験が、変わつていながらも、色々と危ないながらも、充実した日常が恋しかった。

そこでふと、気になることを尋ねてみた。

「部長、その、僕が来るまで彼女と二人きりだったんですよね？」

「そうであつたが、それがどうかしたかのう？」

「何か、変なこと起きませんでしたか？」

「何も起きてはおらんぞ。ん、まさか僕の居ぬ間に何か面白いことでも起きたのかのう？」

どうやら、彼女の狙いは僕一人だったようだ。その情報を得ることはできたが、同時に部長の好奇心に火をつけてしまったらしい。面倒なことになってしまった。

何しろ僕自身、何が起きたのかさっぱり分かつていないのだ。確かなことは、深谷さんが僕を狙い、二人つきりになるのを待つて、喰らおうと襲いかかつてきたことくらいだろう。一人で抱え込むには大きな問題であるし、誰かに相談したいとは思

が、それをどうやって説明すれば納得してもらえるとこのだ。深谷さんが世界を変えて、僕の体は動かなくて、彼女に首を噛み砕かれそうになりましたなんて説明したら、いくら変人の部長でも僕の正気を疑うだろう。

いや、でももしかしたら、この部長なら僕の話を通じてくれるかもしれない。相談に乗ってくれるかもしれない。

話す、べきだろうか。

「ほれほれ、僕に話してみよ。どんなことでも僕は構わぬぞ。黙つたままでいいないで、早く語らんか」

迷っている僕に、部長は笑つたまま尋ねる。

それは、いつもの部長だった。

面白いことが大好きで、自らも色々な伝説を持つまでの行動力を持ち、ひどい実験を行うも中々憎めない、いつもの部長だった。

そんな部長を見て、僕は、やはり話さないことにした。部長だつて、巻き込まれてしまうかもしれない。僕が話すことによつて、部長も彼女に襲われるかもしれない。

僕は部長を、非日常の中に連れて行きたくはなかつた。

「すみません、部長。とても話しくい内容なんです」

僕は何とか部長の追及を逃れようとする。

「話しくい内容、とな。それはどういつた理由で話しくいのじゃ？」

「話しても、信じてくれないでしょうし、本気にされたら、それはそれで困る問題なので……」

「——ほう」

「えっ」

僕の話聞いた部長の目が細くなる。その瞬間、部長の周りの空気が変わったような気がした。

深谷さんに襲われたときは違い、身の危険を招くような不穏な空気ではない。部長の中で何かが変わったことを示すかのような、そんな雰囲気の変化だった。

「では明日、改めて聞こう。僕は部室に居るから、学校の開いている時間ならば好きな時に尋ねるが良い。何、お主の心配するようなことは起きぬさ」

「あの、それって——」

「ではの」

混乱する僕を残し、部長は校舎へと去っていった。聞きに追うべきかとも考えたが、そうするとまた深谷さんと会うことになつてしまう。

暫く悩んで、僕は帰ることにした。

「ただいま」

「おかえりなさい」

リビングでは妹の花奈がテレビを見ていた。いつもの光景である。

「あら、おかえりなさい。今日は少し遅かったわね」

キッチンからは晩御飯の準備をしている母さんの声が聞こえる。

「ええ、部活動があったので」

「真、口調」

短く妹に指摘されて、僕はうっかり丁寧語で返してしまったことを悟る。

「あ、ごめん」

「ふふ、いいのよ。まだ慣れが抜け切っていないからかしらね」
「ごめんなさい。気を遣ってしまった」

「謝らなくていいわ。その方が気を遣っているように見えるから。無理しないで、ゆっくり慣れていきましよう」

母さんの言葉に、心が温かくなる。

「ありがとう」

自然と口をついた言葉に恥ずかしくなつて、僕は逃げるように自室に向かった。

「ふう」

鞆を下ろし、制服から部屋着に着替えると、椅子に腰かけ一息をつく。

幼い頃両親を亡くした僕が叔父さんの家に迎えられてから十年は経つが、つい最近まで僕は叔父さんと叔母さんと距離をとってきた。呼び方を叔父さん叔母さんから父さん母さんに変えることはかなりの勇気を要したが、これから少しずつその呼び方にも慣れてくるだろう。

僕の日常は変わってきている。それを今終わらせたくはなかった。

制服から部屋着に着替える。その際、いつも首から提げてい

る手作りの人形が目に入った。

幼い頃、裁縫が苦手だった父と母が協力して作ったらしい、ビーズの目と糸の口を持つ僕をかたどった人形だ。今じゃ唯一の形見である。

両親の分も、僕は生きなければならぬ。僕は決心を固めた。

今日の放課後を思い出す。

部長はあの不思議な世界について、何かを知っていたようだった。何故だかそう、確信している。あの不可解な現象については、是非とも教えてもらいたい。明日、それを聞くために学校に行ってみなければ。

いや、けれどももしかして部長は深谷さんと仲間で、また僕を罠に嵌めようとしているという可能性はないだろうか。でもそれなら深谷さんと二人で僕を襲うことだってできたはずだ。それをしない理由は、ない、だろう。

待て、もし部長があのと僕と同じように深谷さんに襲われていたらどうだろう。本来の目的は僕だったらしいからこそ部長は襲われなかったけど、逃げ出した僕の変わりに、もしくは僕の情報を聞き出そうとして標的を変えたとしても不思議じゃない。あの変な空間の中じゃ、いくら部長と言えども、きつと抵抗はできないだろう。脅されでもしたら、明日僕が部室に来るかもしれないことを喋ってしまうかもしれない。そうなれば明日部室に来る僕を、深谷さんは待ち伏せることができる。あの時は深谷さんが動けない僕をゆっくり喰おうとしていたけれど、今度は躊躇なく、僕が彼女の姿を認識する前に喰われ

るかもしれない。

「ご飯ができたわよ」

リビングから母さんの声が届く。

「今行きま、行くよ」

つい丁寧になりそうだった言葉を言い直し、僕は椅子から立ち上がる。部屋から出ると、カレーの良い匂いが漂ってきた。

「おいしそうだね」

花奈は既にカレーを食べていた。

空いている席につくと、母さんが僕の前にカレーライスが盛られた皿を出してくれた。

「はい、サラダも」

「ありがとう」

「花奈、ドレッシングをとってくれない？」

「ん」

カレーを口に含む。母さんのつくるカレーは、いつもと同じで、とてもおいしかった。

変わらない味だ。

「父さんは今日も遅いのかな？」

「ええ。残業があるから」

「パパ、今日も残業なんだ」

とりとめのない話をしながら食事を続ける。

幸せだなと感じた。

「おやすみなさい」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみー」

歯磨きを終えた僕は二人にそう言って、自室へと向かった。今日の授業の復習をする気にもなれず、直ぐにベッドに倒れこむ。頭が疲れているように感じる。一週間の授業のせいか、今日の不思議な体験のせいかは分からないが、なんとなく後者が原因であるように思えた。

すうっと、自然と瞼が落ちる。

今日は夢が見れないくらい深く眠れそうだ。

——
——
——
——
どのくらい経ったのだろう。

僕は水の中にいた。大きな球状をしている青い水である。その外側には真つ黒な空間がどこまでも続いているようだった。僕は水でできた球の中心辺りでたゆたいながら完全に脱力している。僕が今向いている方向が、前なのか上なのか下なのかも分からない。口からぼこぼこ小さな気泡が出ていくが、息苦しくない。体は安らいでいた。

ああ、これは夢の中か。

悟る。と同時に思い出す。

この光景もまた、どこかで見たような気がする。

なんてことを思っていると、空間に変化が生じた。

しゆるしゆると、僕から見て前後左右、更には上下から長く黒い薄手の布が水の中に入ってくる。先端が五つに分かれたそれらはさながら六つの手の影のように思えた。

黒い布は僕の前で集まり、透明人間を包んでいくかのように、人の形を模っていく。顔を除いた女性の体が完成しても布は余り、それらは服を形作り、影のような人間を包んでいく。

そして、先端と同様五つに分かれた布のもう一端が見えるころには、ところどころ線の入った不格好な和服が幾重にも重ね着されていた。

最後の和服が完成し、布も全て使い切ると、ぽっかりと空いた頭部が激しく光り輝き、光がだんだんと薄れていくにつれ、人の顔が現れる。

僕より少し上か同じくらいの年頃の、腰まで伸びていそうな長髪を持つ凛とした少女の顔だった。何となく僕に似ているような、そんな気がする。背丈は僕より少し小さいくらいだ。

そうだ。この後僕は問われるんだ。

「何を望むの」

それに対して僕は——

消えたい。消えたい？

違う。

「生きたい」

僕は、答えた。

「そう」

それを聞いて、彼女は嬉しそうに笑い、言った。

「ようやく、聞けた」

「ばあ、と、水の外の黒い世界から、無数の光の筋が漏れる。幾筋もの光は、だんだんと太くなり、僕と彼女に注がれて――」

「……………あ」

目が、覚めた。

毎朝見る自室の景色だった。

相変わらず暑さを主張する夏の、晴れた土曜日の朝だった。上半身を起こす。寝起きとは思えないほどに覚醒していた。

「今の、夢は」

夢の内容を思い返す。夢だったとは思えないほど、鮮明に脳裏に思い浮かべることができた。

あそこは、一体？ それに、彼女は誰だ？

夢の中の出来事であるにも関わらず、僕は大きく気になった。

夢の中の既視感、そして、彼女の言葉。

あれは、何だったんだ？

「……………いや」

考えても結論は出ない。今はそんなことより、これからのことを考えなければ。

ぐー。

そこで腹の虫が鳴った。まずは本能的欲求に従い朝食を食べるべきなのだろう。

午後一時、お昼ご飯も家で食べた僕は、校門の前にいた。

さつきから三十分程、炎天下でずっと右往左往している僕は、

傍から見たら完全に不審者だった。夏の制服は遠目で見ると他校のものとは区別がつかないし、殴り込みにきたと勘違いされてもおかしくない。

さて、どうしてこのような場所であらうしているのかというと、それは勿論深谷さんの待ち伏せを警戒してのことである。ここに至るまでの道中もかなり警戒していたが、待ち伏せに適した箇所が殆ど無かったので、ゆっくりではありながらも進むことはできた。しかし我が校の校門には、どうしても外から見ることでできない死角が存在する。まさか、とは思いつつも一抹の不安は拭い去ることができず、僕は校門をくぐることはできないでいた。

どうする、どうする。ぐるぐると廻る思考と足跡。

全速力で走れば襲われる前に逃げられるかな。いやでも相手は僕の姿を認識した瞬間あの異次元世界へと引きずり込んでくるかもしれないから、走っているからと言って絶対に大丈夫とは言い切れない。今からでも帰ろうか。けれどそれじゃ今捕まらなくても同じじゃないか。平日になれば学校には行かざるを得ないのだから。やはりどうにかして校内に入らなければ。いつそのこと堀でも乗り越えてみるか。目立つ方法だけどころなこと構ってられない。待ち伏せているのなら僕が警戒しているなんて向こうは思っていないはず。こちらが先に深谷さんの姿を確認できれば、相手に気付かれない間に逃げることでできるだろう。まあその場合、結局平日まで問題を先送りしただけの結果になるだろうが、それならそれでまた別の方法を

考えれば良いだろう。

よし、塀を乗り越えよう。

僕は結論をだし校門から離れると、人目が無く、低い塀のある場所を探す。

「さて、このあたりかな」

適当な場所を見つけた僕は、辺りに人がいないことを確認し、塀によじ登った。

「くろう……!!」

思ったよりも難しい。人目につかないことを優先してしまつたため、足場になりそうなものが殆どないのだ。

それでも、やらなければ。

懸垂の要領で体を持ち上げ、右腕を塀に乗せる。そこに体重を預け、今度は左腕も塀に乗せる。両腕が乗ったら、下に押し付けるようにして体をさらに浮かし、腹に乗せる。

よし、ここまで来たら――

「……………何しているんだ?」

背後から声をかけられた。振り返るとそこに、僕の親友泉広太の姿があった。

僕の動きが止まる。広太は何か信じられないものを見たかのような、そんな表情をしていた。

「……………」

「……………」

二人の間に沈黙が流れる。

とりあえず僕は塀から降りた。先ほどまでの苦労は徒労とな

った。理不尽な現実により努力が水泡に帰す。世の不条理を学んだ気がした。

先に口を開いたのは僕だった。

「これにはわけが」

「聞くよ。何?」

「……………」

言われて気付く。どう説明するか決めていなかった。

素直に待ち伏せを警戒していたと言うか? しかし深谷さんの待ち伏せなんて、事情を知らない人間からしてみたらこんなことをしてまで避けるものじゃない。

そうだ、部長に待ち伏せされていることを恐れていたと言うのはどうだろう。これなら説得力もあるだろう。

「実は、部長に呼び出されていてね。待ち伏せがないか心配だったんだ」

我ながら素晴らしい説明だ。主語を省略したことで嘘をつかずに曲解させることが可能なものになった。

「ああ、成程。だから授業の無い土曜日にお前がここにいるのか。……大変だな」

広太は納得してくれたらしく、気の毒そうな目でこちらを見ている。

「そうだ、丁度いい。広太、校門を通過して、誰も待ち伏せしていないことを確認してくれないか。特に、深谷さんがいないかどうかには目を光らせておいて欲しい」

「ああ、了解だ。ところで、どうして深谷さんをそんなに警戒

するんだ？」

「……昨日の深谷さんからの呼び出しの後、色々あつてね。できれば聞かないで欲しいんだけど、どうしても聞きたい？」

「……いや、遠慮しておくわ」

広太は僕に哀れむような視線を送ってきた。完全に同情させることに成功したようだ。僕は今更ながら日本語の曖昧さに大きな魅力を感じた。

ビバ、日本語。

その後、僕は広太のおかげでようやく部室まで辿り着くに至った。広太はとても協力的で、人が隠られるであろう死角を悉く確認してくれた。持つべきものは親友だ。

「失礼します」

部室を開けるのも広太がしてくれた。深谷さんが室内で待ち伏せている可能性もあるためだ。普段なら広太は巻き添えを食らうことを恐れ、ここまで積極的に僕を助けてくれたりはしないのだが、心底僕を不憫に思ったであろう彼は快く引き受けてくれた。騙しているようでこちらも多少心を痛めたが、懸かっているものの大きさが違うのだ。許してもらおう。

「んむ、広太か。何用で来た」

「ああいえ、俺は真の付き添いです。これから生徒会の仕事をするんで、これで……」

広太は室内を見渡して、部長に背を向けた。

「大丈夫。部長一人だ」

すれ違いざま、僕に耳打ちしてくれる。

「ありがとう。とても助かったよ」

「気にするな。それより、今日も生きて帰るんだぞ」

そう言つて、広太は去つていった。

僕は苦笑いし、途中で返事をする。

僕は、生きるために来たんだ。

部室に入った。

「来たか」

僕の姿を認め、部長が言う。その表情は、昨日の去り際に見せてくれたものと同じだった。細くなつた双眸と、薄い笑み。言葉も、先ほど広太に放たれたものとは、少し違うように感じた。

「何ゆえ、広太と来たのじゃ」

「深谷さんを警戒していたんですよ。あの後、二人きりだったと思いますが」

「いや。ただお主が帰つたことを聞いただけじゃな。その後は適当に時間をつぶして、五時に帰つたさ」

嘘は言っていない、だろう。この部室には隠れる場所なんてないし、きっと部長は深谷さんとは繋がっていないはずだ。

僕は多少緊張感を緩め、部長に近づき、立ったまま尋ねる。

「教えてください。部長は何を知っているんですか」

「待て。先ずはお主の体験を話してもらつてからじゃ」

まあ座れ、と部長は、上げた手を下げて着席を促す。

僕は言われた通り部長と向かい合うように座ると、一つ深呼吸して、昨日のことを語り始めた。

「成程のう。そんなことが起きたのか」

僕の話の全て聞き終えて、部長は閉じたままだった口を開いた。

「中々、面白いのう」

「え、あの……」

予想の斜め上をいく部長の反応に、僕は困惑する。

まさか、本当は何も知らなくて、面白そうってだけで僕にどんな意味深な態度をとったのだろうか。まさか、いやでも、部長ならありえる……。

そんな僕の心配をよそに、部長はぶつぶつと呟いている。

「あやつに襲われて、何かに守られた。ふむ、とすると潜在的な霊力が反応したのかのう。さて、どう話をするか……」

隠す気のない部長の呟きは僕の耳にも届き、中二病患者の如き発言を聞いた僕は絶望する。

やつぱりこの部長は、面白いことにしか興味がないのか……。

「よし、決めたぞ。つと、どうした。何をそんなに落ち込んでおる」

「部長を頼った僕がバカだったと反省しているんです」

「僕はまだ何も言っておらんじやろうが」

「聞かなくても分かりますよ」

「お主、まさか僕がおかしくなったと思っておるのではなからうな」

「元々おかしいじゃないですか」

「違う。今も、いつでも本気じゃ」

「それじゃ今もいつもと変わらないってことですね。納得しました」

二度と部長を信用すまい。早く帰って別の案を考えよう。

「やれやれ、仕方がないのう」

席を立とうとした時だった。

「うわ！」

ぐにやり、と背景が、世界が歪んだ。唯一、部長の姿だけが元のままで。

「これは、あの時の……」

「信じてくれる気になったかのう？」

いたずらっぽく笑う部長の言葉に、僕はがくがくと頷く。

「さて、お主には選択肢がある」

部長がそう言うと同時に世界は元に戻ったが、その言葉で、空気が重くなったように感じた。

「選択肢、ですか」

「うむ。謎を謎のままにするか、僕の知る全てを聞かか、じゃ」部長が指を二本立てる。この選択が、僕にとって大きな意味を持つものになる。何となく、そう悟った。

「選択によって、今後が変わるんですか？」

「変わるとも言えるし、変わらぬとも言えるかのう。お主がどう受け止めるのかに依るものじゃ。お主がそれを知ろうが知るまいが関係なく日常は日常のままじゃろうし、彩花の件については、大きな影響は生じぬしの」

「聞きます」

僕の答えに、部長は目を少し大きくした。

「ふむ、聞きたいと申すか」

部長の問いに、僕は頷いた。怖い体験ではあったが、そういう非日常なものには多少惹かれる僕である。

「釈然としないものを残したままにすると、後悔しそうですからね。知ろうとしないことによる後悔よりかは、知って後悔したいものなので」

「いい気概じゃ。説明するから、よく聞いておくのじゃぞ」

部長の言う答えを受け止めるため、心構えをする。

部長の口が開いた。

「貴様は夢現の世界に引きずり込まれたのじゃ」

相変わらず、笑みを浮かべたまま部長は言った。

「ムゲンの、世界？ 夢、幻のムゲンですか？ それとも限り無いムゲン？」

「いや、夢、現と書くのじゃ。儂の造語じゃが、うまく言い表せているとは思うぞ」

ユメウツツと書いて、夢現。読めないこともないけれど、どういう意味かはさっぱり分からない。

「夢現の世界とは、個人の思考が現実世界に作り出す特異な空間の総称じゃ。夢の世界と現実の世界の狭間とも呼べるのう。その中ではその空間を作った人間、具現者と呼ぶが、そやつらの意志が他人の意思に作用する。簡潔に言えば、思い通りになる世界、といったところかのう」

「思い通りって」

そんなのありか、と悪態をついてしまう。まさしく夢の世界のようなのだが、それが存在しているのは言葉のとおり夢の中だけで、現実にはあつてはならないものだ。

「少し言葉が過ぎたかの。とはいえ思うことができれば、人間は何でも想像できるからのう。その幻想を他人にも共有させ、ありえるはずの無い事態を体験させるのじゃ。分かりやすく言うと、その空間内における集団催眠のようなもので、他人にあるはずのないものを見せたり、感じさせることができる。本当は何も無いし何も起きていなくとも、その中ではそういったものがあるように思い込まされてしまう。そういう意味で思い通りということじゃ。じゃが、当然限りはある。半分は現実じゃから物理法則は健在じゃし、直接には肉体的影響は及ばさん。それに実際の現実世界の情報は、人間にとって多すぎる。結果夢現の世界は細部が不明瞭で、それこそ夢の中のような、何もかもが曖昧な世界となるのじゃ」

僕は彩花さんに襲われたときを思い出す。確かにあの時はつきりと見えたのは彩花さんの姿だけで、他は壁や本棚も何もかもごちゃ混ぜにしたかのような背景が朧気に見えていただけだった。

「じゃから何でもできるといつても、あくまでそう感じるだけなのじゃよ。それに何らかをしたとしても、精神的影響しか及ばさんしの」

「でも僕は動けなくなりましたよ。それは肉体的なものではな

いのですか？」

「うむ。動こうとする意志に働きかけたのじゃ。自分では動こうと思っているつもりでも、実際には思っていると思込んでいただけになってしまう。金縛りに似たようなもの、と言えはわかりやすいかの？」

多少複雑な話だったが、何となくは理解できた、と思う。

「僕のした摩訶不思議体験の理屈は、非常に信じがたいもの、とりあえず納得しました。では、何故彼女にそんなことができただんですか？」

「ふむ、それはかなり本質的なことじゃの。先にそれを説明すべきじゃったか」

そこで部長は言葉を切り、笑みを少し薄くすると、再び確認するように尋ねた。

「覚悟は、いいか」

僕は、念を押すような部長の言葉に数秒逡巡し、頷く。踏み込んだら戻れないものであるというのは何となく感じていたが、ここまできて引き返したいとは思えなかった。

それに、怖いもの見たさというか、未知なるものへの興味というか、何にしろ、僕を誘うものがあるように感じる。

「知ったら、戻れぬぞ」

「今更引き返そうだなんて思っていないですよ」

「そうか。すまなかつたな。もう尋ねぬよ」

部長は僕の答えに満足したように頷くと、話を続ける。

「世の中には、意思により作用する何らかの力が存在するのじ

や。僕は、まあありがちじゃが、霊力と呼んでおる。魔力とも、超能力とも言われておるがのう」

「霊力、ですか……」

非現実的な単語の代表例とも言っている言葉なのだが、体験が体験なだけに一笑できない。

「あるかどうかは実際のところ分かっておらぬ。科学的な実証もされてはおらぬし、殆どの人間は存在すら知らぬじやろうなしかし、先に見せた夢現の世界然り、科学的な説明の成されぬ現象が世にあるのは確かなのじゃ」

僕は神妙に頷く。

「意思によって作用するそれらは、どこにでもあると言ってもよい。空気にも含まれておるし、実のところ全ての人間が少なからず持ち、無意識のうちに使用しておる」

「え、僕も、ですか？」

「うむ。意志ある動物でさえ使用しておるとも言われておるのう。例えばじゃが、今僕はどんな感情を持っておると思う？」

「そんなこと言われても、分かるわけがないじゃありませんか」

「目を閉じ、僕の方へ意識を集中してみよ」

「……………」

それで分かるのだろうか、と半信半疑になりつつも、部長の言葉通りにする。

殺す。

「うわあ！」

僕は声を上げ、弾かれたように立ち上がると後退った。ガシ

ヤン、と椅子が倒れ、大きな音が響く。

「座るが良い。本気で害を為そうとは思っておらぬよ」

静寂が戻ると、笑ったままの部長は言った。

「さて、今僕はお主に対し、どんな感情を抱いておったか分かったか？」

「……殺意とでも言えればいいのでしょうか。殺す、と聞こえたような気がしました」

「ほう、明確な声も聞こえたか。中々靈力があるようじゃのう」
部長は感心したように言う。

「今のような例は稀じゃが、人は少なからずその場の空気に影響を与え、また受けることができる。不穏な気配や違和感を、靈力を以て知ることができるとのじゃ。逆に、僕のようにその場の空気を交えることも可能で、その極みが夢現の世界じゃな」
自分の意思を自分の靈力に乗せて、周囲の靈力にその意思を伝播させるのじゃ、と分かりにくい説明を付け加える部長。僕は透明な水に墨を垂らしたその後の経過を思い浮かべた。透明だった水に、だんだんと墨の黒が広がっていく。

「普通の人でも、ですか？」

「うむ。例えば誰かが怒っているとしよう。するとその場には不穏な空気が流れるはずじゃ。それは多少なりとも怒りの感情が靈力を介して空気に影響し、周囲の人間は、あの人が今怒っているということを知ること、その空気を意識してしまうのじゃよ」

「待つて下さい。それって普通のことじゃないですか」

「左様。今のような例じゃと、靈力は殆ど影響せぬ。それは発信者も受信者も靈力を多く持たぬがゆえじゃ。しかし靈力の強い人間の怒りは、靈力を知らぬ者なら余程意識せねば隠していても伝わってしまう。逆に、誰かが怒ったということ知らなくても、不穏な空気を感知することができるのじゃ。野生動物などはそのように危機を察知したり、仲間伝えたりするといふ仮説もある。お主には、そういった経験は無いか？」

僕は過去を振り返ってみる。言われてみれば、そんな経験もないわけではないが、当時は全く意識していなかった。

「靈力が取り分け強い人間は、それを意識して使用することも可能じゃ。相手の意思を悟ったり、彩花のように動きを封じたり、催眠術のように相手に幻覚を見せたりすることもできる」
「え、じゃあ催眠術師とか超能力者って、靈力が強い人間なんですか？」

「比較的強い人間は居るだろうさ。ただ、靈力の存在に気づいておるものは極稀じゃろう。殆どは心理学やらそういった知識の賜物として認知しているはずじゃ。意識して使用しているかもしれぬが、あくまで知識という支えのもと成立しているだけで、彼らの常識の範囲内のことしかできぬよ」

心理学が全く靈力に関係ないとは言いが、と付け加える。

「ということ、あまり靈力が無い人間でも、知識によってそれを強めることはできる、ということでしょうか」

知識によって多少ながらもその存在を意識することができ

るのなら、それは靈力が強くなった、と見ることができるのだろうか。

部長は答える。

「可能じゃな。靈力というのは先天性を含んでおるが、後天的に伸ばすこともできる。じゃがその認知度故、殆どの人間はそれに気づかぬままじゃから、なんとなく生きていくことで、靈力は次第に衰えてゆく」

「靈力は衰えるもののですか」

「うむ。知識も使わないでいけば衰えていくじゃろう。それと同じじゃ。先天的に差はあれど、社会に出るころには皆均される。とはいえ、減っていく一方というわけでもない。食物にも靈力は含まれておるから、最低限は残る。衰えるというのはつまり、靈力を多く蓄えることもできなくなり、現実には干渉できる程の靈力を持ち続けることができなくなるとい意味じゃ」

「では、どのように鍛えるのですか」

質問しながら、僕は頭の中で山奥での滝行や座禅による瞑想を思い浮かべる。あれらは精神を鍛えるためのものだったと思うが、靈力を伸ばす効果もあつたのだろうか。すると昔の人は今より靈力が強かつたのかも知れない。確かに科学だとかが発展した現代よりかはその存在を受け入れやすいだろうし、秘境のような場所における修行とかは効果が高いのだろう。

殺気や敵意を靈力によって知る武士だなんて、まるでお伽噺の中存在だが、昔には本当に存在していたのかと思うと、胸が熱くなった。

少しドキドキしながら答えを待つ。

「体はどうやって鍛える」

しかし逆に予想外の質問をされた。

その言葉により神秘的かつ荘厳な雰囲気を持つ山奥の寺院は消え去り、代わりに擬人化された脳が筋トレしている姿が現れた。肉体的研鑽としては正しいのだろうか、それはまさしく脳筋になるための方法だ。正解とは程遠い答えだろう。

「……そりゃあ、訓練するんじゃないですかね。でも、精神の訓練だなんて、一体どうやって——」

「その前の話じゃ」

皆まで言う前に止められる。前？ 鍛えるのに前も後もあるのだろうか。頭の中では脳がラジオ体操を始めた。まさか準備体操というわけではあるまい。休憩、睡眠……。

「あ」

悟る。そして繋がった。

「食事、ですか」

「その通りじゃ」

部長は僕の答えを聞き、嬉しそうに言う。

「それこそが唯一、靈力を高める方法じゃ。相手の靈力を喰らうことで自らの靈力を高めるのじゃ」

「でも、食べ物にも靈力は含まれるのなら、それで十分なんじゃないんですか？」

「靈力というのは意思あるところに多く集まる。しかし死んでしまえば意思も消え、同時に靈力はその殆どが空気中などに拡

散してしまうのじゃ。維持や回復には足りるかもしれないが、増強には向かん。たんばく質を多く取らぬやつに筋肉はつかぬよう、靈力を強めるためにはより多くの靈力が必要じゃから、生きている意思から靈力を摂取するのが自然なのじゃ」

「だから深谷さんは僕を……って、あれ？」

僕はいくつか疑問を抱く。

「それなら、どうして部長は襲われなかったんでしょ。部長の方が、絶対僕より靈力がありますよね」

僕は意識しても、夢現の世界なんて作れっこない、はずだ。僕より部長のほうが靈力が弱いなんて思えない。

「靈力を測るには、色々とやり方があってのう。単純なのが殺意のような意思を乗せた靈力を大多数の人間にぶつけ、反応を見ることじゃな。殆どの人間は気付かず、多少靈力を持つものが反応する。恐らくお主も、いつかは分からぬが彩花の発したそれに反応してしまったのじゃろう。二人きりにもなりやすかったじゃろうし、お主は絶好の獲物だったのじゃ。儂のような人間はそれがどういう意味か分かっておるから、大げさに反応したりせず、気取られぬようさりげなく靈力を発した相手とそれに反応した相手を確認するのじゃ」

「そうだったんですか」

疑問の一つが解決した。けれどまだ疑問はある。

「じゃあ、どうして今になって襲われたんでしょ。深谷さんと知り合ったのは一か月以上前ですし、もっと早くに襲われていてもおかしくなかったと思うのですが」

「今回の問題は、そこじゃ」

空気の質量がより重くなったように感じた。ピリピリと肌ざわつく。時期にそれほど深い意味があるのだろうか。

「靈力は食うことで強くなる。では食われた者はどうなる」

「……それは、靈力が減る、とか」

「そうじゃな。少し食われたくらいじゃ影響はないがの。それこそ日々の生活を続けていくうちに元通りになる。じゃが、全て食われたら、どうなる」

「全て……」

靈力は意思により作用する、誰もが持つ力。それが全て失われたら――

「死ぬ、のですか？」

「ああ。精神的に、じゃが」

こともなげに、部長は言った。

ざわり、と鳥肌が立つ。

「自分の意思が分からず、他人の意思も分からない。何が起きても、そこから情報を受け取れない。全ての事象をただ事実として五感で受け止め、思考に至らない。反射だけで生きる、屍となる」

あの時感じた死の恐怖が蘇る。植物人間になった自分を想像して、怖気が走った。

「精神的な死は、結果ではなく過程のものじゃ。靈力を食われたから死ぬのではない。靈力を食うために殺されたのじゃ。お主たちが食している野菜も肉も、そうじゃろう」

僕は昨日の晩カレーに入っていた牛肉を思い浮かべた。生き物は食われるために殺される。当たり前のことを聞いただけに、肌寒さを感じた。

間接的な捕食者であり続けた僕もまた、被食者になるところだったのか。

「霊力は少なからず意思に結びついておる。全てを喰らおうとすれば、その意思を殺さなければならぬ」

「意思を、殺す」

今度は深谷さんの行動を思い出す。確かに僕は、死の自覚一步手前まで追い込まれた。あれが意思を殺すということなのだろうか。

「夢現の世界などで精神を殺せば、意思は死に霊力を失う。失われた霊力は意思という容器を失い大気中に漏れ、それが広がらぬうちに全て喰らうのじゃ」

「精神はどうやって殺すんですか？」

「簡単じゃよ。夢現の世界で人を殺せばいいんじゃない。現実のよう

に体を使つての」

「……………はあ、夢現の世界で、ですか」
身体を使つて殺す、というたとえと思いつくのは、深谷さんのような噛み殺しや、絞殺、撲殺などといった物理的手段くらいなのだが、精神的な死の迎え方としては相応しくないように思えて、今一つ納得できなかった。

そんな僕の不満を察してか、部長は説明を続ける。

「夢現の世界では他人に幻覚を見せることができる」と言った

じやる？ あれは霊力が関係しているのじゃ。お主は、霊体という概念を知っているかのう？」

「霊体っていうと、幽霊というか、白いぼやーっとした人影のようなものを思い浮かべますが」

僕は幽体離脱現象を思い出す。実際にあるかどうかは定かではないが、夜眠っている自分の体を、霊体となり体から出てきた白っぽい自分が見る、といったようなものであったはずだ。

「夢現の世界では、具現者も含め中にいる人間はまさにその霊体となつておるのじゃ。霊体は精神によつて形作られており、霊力によつて影響を受けるが故に幻覚を見てしまう」

「じゃあ、深谷さんに襲われたあの時も、僕の体が霊体になつていたということですか？」

「その通りじゃ。個として存在する精神を、群として存在する現実に出現させ得る局所的な空間、それが夢現の世界じゃ」

「ちよつと待つて下さい。それじゃあもうそこは完全に精神世界じゃないですか。現実の影響なんてあるんですか」

「大有りじゃ。確かに夢現の世界では具現者が霊力を用いて他人に色々な幻を見せるが、他人は同時に現実世界の影響もちやんと受けておる。夢現の世界では景色が歪んで見えたじやるう？ あれは実際の景色と夢現の世界における具現者の霊力とが作用しあつた結果なのじゃ。現実では五感から受けた刺激が中枢神経などを通して脳に伝わり霊体がそれを感じる事ができるが、霊力はその霊体に直接作用をして、感じたように思わせる。それらが混ざり合つて最終的にお主が体験したよう

な景色が生じたのじゃ。しかしそれ自体は具現者が意識して見せているわけではない。夢現の世界は具現者の靈力によって創りだされておるから、その靈力が作用した結果じゃ。逆に、お主の体が動かなくなつたというのは具現者である彩花が靈力を使つてお主の動こうとする意思を抑制させたのじゃ。無意識に動かないと錯覚させられて、動けと思つているつもりでも実際には動かそうとしておらなかつたのじゃろうな」

「そう言えば、夢現の世界では人だけははつきりと見ることができましたが、あれは一体？」

「お互いに靈体じゃからのう。靈体の姿は本人のものとはほぼ同じじゃし、相手の靈体内の靈力を感じることもできるから現実の姿とさほど変わらず比較的まともに見えるのじゃ。具現者が自分の姿を別の何かに見せようとすれば話は別じゃがの」

「昨日、夢現の世界の中がとても静かだったんですが、あれも靈力で聞こえていないように思わせていたんですか？」

「うむ、恐らくそうじゃろうな。大方、雰囲気づくりのためじゃろうが」

「雰囲気づくり、ですか」

「夢現の世界では意思の力が作用するからな。相手の意思を挫くのも大事なのじゃよ」

話を聞いていくうちに、何となく靈力などの実態が掴めていつているように感じる。

「さて、話を戻すが、靈体は精神でできており、靈力の器でもある。その器を壊すことで中の靈力を食らうことができるから、

夢現の世界で人を殺めることで、その者の靈力を食うことができる」

「うーん、やっぱり物理的な方法めいていて、どうにも相応しくないように思えるのですが。何でも思い通りなんだつたら、直接的な方法じゃなくてもいいじゃないですか」

昨日、深谷さんも直接僕の喉笛を噛み砕こうとしていたが、離れた場所から幻でも何でも使つて殺めることだつてできたんじゃないだろうか。靈力がすぐに拡散すると言つても、すぐに近づけば食べることだつてできるだろうし。

「それができないのじゃよ」

しかし部長は首を振る。靈力を食べるためには直接的な殺害じゃないといけないとか、そういう法則のようなものがあるのだろうか。

「靈体は靈力によつて影響を受けると言ったじゃる。しかし具現者が自身の靈体内の靈力を放出し間接的に与えられる影響は幻覚程度のものなのじゃ。それでも動きを封じたり、暑さ寒さを疑似体験させるぐらいのことは出来るが、靈体という器を壊すには足りんのじゃよ。そこで、靈力だけでなく自らの靈体をも使い、他人の靈体を壊すのじゃ。とても靈力が強い者ならば間接的に殺害することも可能じゃが、相手がほぼ無抵抗だといふのに無駄な靈力を使う必要はないじゃろうしな」

その場合、強烈な痛みなどの拷問めいた刺激で無理矢理精神を殺すことになるがのう、と部長は続けた。ぞつとしない殺り方だ。

けれど成程、だから深谷さんもああやって僕を食べようとして、あれ？

「ところで、僕はどうして助かったんでしょか？ 完全に喰われる一歩手前だったのですが」

部長は潜在的な霊力が云々と言っていたが、どういふことなのだろう。僕にそこまで霊力があるようには思えないが。

「ふむ、それは恐らく命の危険に晒されたお主の意思が無意識に霊力を使ったのじゃろう。比較的霊力が強いようじゃし、抵抗くらいはできたのかもしれない」

「夢現の世界の中でも、抵抗はできるんですか？」

「うむ。霊力により作られている世界じゃから、霊力で抵抗は可能じゃ。複数人が夢現の世界を発生させ、中で霊力を競うことも出来るし、圧倒的な霊力で夢現の世界そのものを打ち消すこともできる。今回夢現の世界が消えたのは、彩花が思わぬ抵抗に動揺したからというのも大きいじゃろうがな」

火事場の馬鹿力、ということだろうか。けどあれは普段筋肉にかけてある脳の無意識のブレーキが危機的状況で外れたから発揮される本来の実力ってだけで、霊力とは無関係のようにも思えるが。

「とりあえず、僕が精神的に殺されそうだったってことは改めて実感しましたが、それが襲われた時期とどういふ関係が？」

「お主が、初めての被害者になりそうだったということじゃ」

僕は暫く、言葉を失った。

「それは、どういふ」

「彩花は恐らく、まだ精神的に影響が出るほどには霊力を喰らっておらぬはずじゃ。あやつの周りで最近大きな変化をした者はおらぬし、遠出をしたという話も聞かぬしの」

「何故部長がそれを知っているんですか」

こんな時だが、改めて部長を恐ろしいと思った。

「僕は他人の霊力を知る特別な方法を持つておるのじゃよ。正確には言えぬが、ある程度の目星はつく。じゃから深谷には前々から目をつけておったのじゃ。彩花の家に訪問して親御さんから話を聞くこともできたしの」

「家はどうやって知ったんですか？」

「あとをつけた」

「つまりはストーキングしたと」

「お主のような被害者を出さぬための探偵調査と言わぬか」

「けれど僕は被害者になりそうでしたよ」

「四六時中守れるわけがなからう」

「予防策くらいあつてもよかったんじゃないですか」

「ビデオカメラは仕掛けておる、と伝えてはいた」

「ではどうして僕は襲われたんですか？」

「嘘だとばれたのじゃろう」

部長は、昨日トランプで負けた時と同じ苦笑いをしている。緊張感とは違う意味で重い空気が漂った。

とはいえしかし、確かに悪くはない策ではある。無いビデオカメラは見つかりっこないから、どこかには仕掛けてあると意識させることはできる。なんだかんだ僕のことを気遣ってくれ

ているし、これ以上責める気は起こらなかった。

僕は沈黙を破るために、一つ咳払いをする。

「それで、どうして僕が第一の被害者になりそうだったんですか？ それで僕が襲われた時期と、どう関係があるんですか？」

「夢現化が進んでおるのじゃ」

気を取り直し、普段の笑みを取り戻した部長が言う。

「夢現化、とは？」

「霊力は意思に影響される。そして、逆もまた然り、じゃ。意思は自分の霊力を通じて空気の霊力にも影響を与える。そして空気の霊力は他人の霊力を媒介にして意思に働きかける。それと同様、霊力もまた意思に働きかける」

僕は頷く。深谷さんも霊力で僕を縛ったはずである。

「つまりは自分の意思と霊力は相互作用しているわけじゃが、稀に、自分の意思で大きな影響を受けた強い霊力の一部が、本人の意思とは別に生命を持つことがある」

「霊力が、生命を持つ……」

それは、どういうことだ？ 力が命を持つ、ということとは？ 嫌な予感がする。

「さながら、二重人格のようなものじゃ。そうなつてしまえばもはや霊力ではなく、霊と言った方が正しいかの。当初は霊力も少なく意思を持つてはおらぬが、それは無意識のうちに成長しようと他人の霊力を食い、時を重ねることで自分の霊力を増やし、やがて意思を持つのじゃ」

「それで、どうなるんですか？」

「乗っ取られる」

戦慄、した。

自分の生み出したものに自分が凌駕される。コンピュータの反乱だとかSFの物語で時折耳にするそれが、意思においても生じるなんて。

深谷さんも、乗っ取られているということだろう。それはつまり、今まで普通だった人間が、ある日突然深谷さんのように人を襲って、襲われた人は訳が分からぬまま意思を殺される。その内容と、それを笑みを保つたまま言う部長の姿に、恐怖せざるを得なかった。

何故笑っていられるのだろう。翻弄される僕が面白いのだろうか。

「乗っ取るという少し語弊が生じるかの。元々の意思に譲ってもらおう、というのが正しいじゃろうな。無意識化で元の意思の望みを聞き、それを叶えるという口実で体を借りるのじゃ。一度貸してしまえば自力での奪取はほぼ不可能じゃがの。体を明け渡した本来の意思はまるで夢を見ているかのような気分になり、もう一つの意味に体を任せれば、何となく、少なくとも自分よりかは自分の望みを叶えてくれると思ってしまうのだそうじゃ。そして実際は現実ではなく、夢の中で望みを叶えさせる。それに満足した本人は段々と残りの霊力を奪われていき、自我を失い、最後は完全に霊だけが意思を持つようになる」

無意識化で望みを聞く。その言葉に少し引かかったが、今は別に聞きたいことがあった。

「けれど、何故ですか？ 何故乗っ取り、何故更なる靈力を求めるのですか？」

「それが存在理由だからじゃよ」

「存在、理由……」

自分を作り出した人間から体を奪い、他の人間を襲うことが、か？

「元々持ち主の意思によって作られたものじゃ。最初はその元の意思に基づいて行動しようとする。じゃから先ずは理想を叶えるため自ら行動しようとする。じゃから先ずは理想を叶えてより良い考えを思いつくような意思を得るために他人の靈力を食べるのじゃ。しかし、他人の靈力を食らい続ける間に意思も成長していき、自我を持つようになる。そうなった意思は本人の夢を現実で叶えることより自らの独立を望み、より多くの靈力を求めるのじゃ」

「独立？」

「靈力によってできた意思も、所詮は人の体あってこそその存在じゃ。しかし膨大な靈力を得ることにより、人体無くしての行動が可能になる。要は寿命を持たぬ不死身の存在じゃ」

「……不死身」

呟くが、それでも実感には至らない。永劫の存在。そんなものが現実存在するのか。

「そうなった靈は悪霊と呼ばれ、人から人へ乗り移り靈力を貪る極めて有害な存在となる。とはいえやはり生命維持に靈力は必要とするから、憑りついておる者からうまく除霊し封印すれ

ば平気なのじゃがのう」

封印に除霊。いよいよ物語めいている。僕の頭は未知の世界の恐怖から混乱していた。今までの話が全て嘘だったと言われても信じて、受け入れてしまえばよかった。深谷さんに襲われたことだって、全部夢だったと言われたら納得してしまえばよかった。

でも、聞いてしまった。

もう戻れないのだ。それに、僕は覚悟を決めた、はずだった。現実はず想よりもずっと怖くて、後悔してしまえばよかったけれど、それでも。

僕は、受け止めなければならない。

「つまり深谷さんは、いえ、深谷さんの創り出した意思は、その悪霊とやらになるために僕を襲ったのですか」

「そうじゃ。そしてお主という被害者が出そうになったということは、かなり靈の意思が成長してしまっているということじゃ」

僕は深呼吸をして、心を落ち着かせる。

そうだ、これは僕の問題なんだ。襲われたのも僕で、知ろうとしたのも僕なんだ。だから、それを知った上でも、僕自身のために、深谷さんを止めないといけない。

後戻りはできないんだから、前に進むしかないじゃないか。

「……僕は、どうすれば」

意を決して、尋ねる。

僕の、すべきことを。

「どうもしなくてよい」

あつさりと、ごくあつさりと、部長は答えた。

「……………え？」

思わず声を出してしまう。

何も、しなくていい？

それはつまり、何もしなくても解決するということか？ いや、そんなはずは無いだろう。まさか僕を見捨てる、というわけでもないだろうし。僕の聞き間違い？ それとも僕の言葉が聞こえなかった部長の独り言？

「除霊は儂一人で十分じゃろう」

「……そ、そうなのですか」

自身の耳に対する疑問を続く部長の言葉が打ち消した。

僕は生返事以外何も返せない。なまじ無用な決心をしてしまったために何とも居た堪れなくなる。

「どうか、部長、除霊なんてできるんですか？」

「うむ。儂の家系は代々それを生業にしておるし。う。じゃからこういつた話に詳しいのじゃし」

それを聞いて部長の笑みの理由が分かった。部長はやつぱり怖がる僕を楽しんでいたんだ。僕にとつての未知の恐怖は部長にとつてはさも当然のことなのだろう。話を聞く覚悟がどのとういふくだりも、話を重大に見せるためのものだったのかもしれない。

どつと力が抜ける。

そりゃ、僕には霊力なんてないし、除霊や封印なんてやり方

も知らないけれど……。

「でも、その、何か手伝えることはありませんか？」

けれど、聞かざるを得なくなる。このまま、後を全て部長に任せるといふのは、どうにも締りが無いように思えた。

部長にしてみれば何でもないことだとしても、ここまで聞いてしまつて何もしないでいてよいというのは、部長に対してとても申し訳ない。僕でできることなら、せめて手伝いでもしたかった。

「ふうむ。おお、そうじゃ」

「な、何でしょう」

部長は何やら、僕に出来ることを思いついたらしい。僕は改めて決心する。

部長が何を提案しても、快諾しなければ。

「悪いのじゃが、餌になつてくれぬかのう？」

「はい！ ……………あれ？」

餌というのはつまり、深谷さんを油断させるための餌のことだった。明日二人で深谷さんの家に訪問し、僕と二人きりになる状況を作り出して、僕に襲い掛かろうとする深谷さんの隙をつき、隠れている部長が除霊する、といった手筈で除霊を行う、と部長は言った。

「明日、一時に校門前に集合じゃ。安心せい、既に深谷には昨日のうちに、日曜日遊びに行くと言えておる。一人増えたところで問題はないはずじゃ」

手ばかりのない部長だった。元々は、明日一人で除霊するはずだったのだろう。

そして、夜。

僕はベッドの上で横になりながら、今日聞いた部長の話を思い出していた。

世の中には意思によって作用する霊力が存在し、無意識ながらに誰もが使用している。強い霊力は稀に意思を持ち、本人の気づかぬうちに成長し、意思を乗っ取る。さらに霊力を食った意思は独立を夢見て、人を精神的に死に追いやる程霊力を求める。

きつと、今の深谷さんの霊は、独立を夢見ているのだろう。

不死身の存在になろうとしているのだろう。

けれど、じゃあその前は何が行動目的だったんだろうか。深谷さんは、何を望んだのだろうか。

おや、とそこで気づく。

僕は部長の話の中で、何かが引つかかっていたのだった。けれどそれが何だったか思い出せない。

思い出そうとしているうちに、睡魔が訪れた。

まあきつと、大したことじゃないか。

意識が闇に落ちる前に、僕はそう思うことにした。

「お———ト」

薄く目を開けると、そこは昨日の夢と同じ、青い水の球の中だった。

また同じ夢か。そういえば眠る寸前、誰かの声が聞こえた気がする。あれは何だったんだろう。

疑問を抱いている間に、昨夜の再現がされる。即ち、六つの先が五つに分かれた薄手の黒い布が水の中に入ってきて頭部を除いた少女の形を成し始めた。

昨日の夢というと、あの後彼女は僕に何が望みかを聞いて……。

あ！とそこで部長との会話で気になっていた内容を思い出す。

意思を持った霊は、無意識化で元の意思の望みを聞く。それは正しく昨晚の夢そのもので、それが意味することは、つまり

「僕も、夢現化が、進んでいる？」

いつの間にか、少女の体も衣服も完成していた。

そして頭部が光り輝き、少女の顔が現れる。

僕と、どこか似ている顔を持つ、凜とした少女が。

「き、君は、僕の霊、なのか？」

震える声で尋ねると、少女は少し考える素振りをしてから、頷いた。

何で女の子なんだろう。いや、今はそんなこと構ってられない。

「それじゃあ、僕の体に乗っ取る気、なのか？」

努めて落ち着こうとするが、そう尋ねる声の震えが止まらない。
い。

まさか僕にも意思が宿るほどの強力な霊力があつたということだろうか。けれど、そうだ、ようは僕が彼女の申し出に首を振ればいいんだ。体を明け渡すことに同意さえしなければ、きつと大丈夫、のはずだ。

しかし、僕の心配は杞憂に終わる。

彼女は首を横に振った。

……どういふことだ？

僕の言葉が通じることといい、彼女には確かに意思があるようだし、僕の霊であることを肯定もした。けれど体に乗っ取る気はないという。まだ完全には意思が身についていないとか？ それだと昨日の質問の説明がつかない。部長の話が間違っていた？ そうだとするともうどこまでを疑えばいいか分からない。い。

待て、整理しよう。要は、僕の霊であり意思を持つ彼女が僕に成り替わろうとする意思は無いということだ。

そして恐らく彼女は僕に用があるのだろう。だからこうやって姿を現したのだろうし。すると、彼女の目的は一体何なのだろう。

そればかりは考えても結論は出なさそうなので、素直に尋ねてみる。

「じゃあ、君の目的って、何？」

「それは」

僕のその問いを待っていたかのように、彼女は直ぐに答えた。
「貴方を」

僕を、黒い指で指す。同時に、水の外から光が差し込んでくる。

「——」
彼女の声は、その姿と共に光の中に溶けていって——

目が覚めた。そこはやはり水の中ではなくベッドの上で、少女の姿も存在しない。

けれど夢の中の記憶ははつきりしていて、まるで現実が夢の延長であるかのようにだった。

「彼女は、どうして……」

彼女の、僕に会う理由が分からないままだった。今のところ僕に害を成す気は無さそうだけど、はたして、どうなのだろう。

「……考えても、仕方ない、か」

不安が残るが、こればかりは仕方ない。変に思考を深めても的外れな解答が出るだけだろう。専門家の部長に相談するに留めよう。

けれど部長は他人の霊力がある程度知れるはずなのに、僕が強い霊力を持つていることを知らなかったのだろうか。

それともあれはただの夢で、霊力とか何の関係も無かった、とか。

「……起きよう」

埒が明かない。それに今は今日の除霊に集中するべきだろう。集合は、一時。

「来たか」

集合時間二十分前に校門前に到着した僕を出迎えたのは、部長だった。制服の半袖シャツを第一ボタンまで閉め、学校指定のスカートを膝が隠れるように穿き、蝶ネクタイを付けた彼女は傍から見てとても暑そうに見えるが、本人は涼しげな表情で額には汗ひとつない。一体いつからいたのだろう。丁度今さつき着いたばかりなのだろうか。

対して僕は暑いの見越して半袖半ズボンのラフな格好だ。それでもここまで歩いてくる途中で若干の発汗が生じている。

「早いのう。緊張で急いたか？」

「部長こそ、僕より早いじゃないですか」

「人を待たすことは苦手なのどのう。つい一時間前行動をしましちゃうのじゃ」

「い、一時間？」

炎天下で四十分立っていた、というのか？

「冗談じゃよ。三十分前行動じゃ。儂とて暑い中ずつと立ったままではいるのは苦手さね」

「はあ……」

それでも、僕が時間通りに来ていたらもう二十分立ったままだったわけで、あまり変わらないような気がする。そんな冗談を言った部長の意図もよく分からない。明るい雰囲気でも作りたかったのだろうか。

「さて、予定より少し早めじゃが、揃ったところで行くかのう」

「はい。あ、ちょっと待ってください」

「どうした？」

「実は僕、昨日も一昨日も変な夢を見たんですけど……」

僕は夢の内容を細かく説明した。夢の中の水の球、六つの布で創られていく少女の体、少女の問いと僕の答え、それらを一通り説明した。

部長は話の途中で、ふむふむと頷いたり、ほうと興味を持ったような声を上げた。

「それで、少女は僕の霊らしいんですけど、僕を襲うつもりはないみたいなんです。これって、どういう事なんでしょうか？」

「夢じゃろ」

間髪入れずにぼっさりときられる。

「え、夢、ですか？」

「うむ。儂の話で混乱した頭が創り出した幻じゃろ。気にするでない」

「その、根拠はなんですか？」

返事があまりに早すぎた。何か根拠がなければそうはなるまい。

「お主は霊力が多い方じゃろが、霊力が意思を持つまでには至っておらぬ。それに本人の意思と霊の意思の性が異なることはない」

「そう、なんですか」

夢、か。あの中で意識がはっきりしていることといい、普通の夢ではないとは思うのだが、まあ、そういうことにしておこ

う。

「そうなのじゃ。それでは行くぞ」

「あ、はい」

歩き始めた部長の後を追う。僕の家とはちょうど逆の方角だった。

「そういえば、深谷さんの家はここから遠いんですか？」

以前部活の終わりに、彼女が自転車を通っていることを聞いた覚えがある。大した距離で無ければよいのだが。

「徒歩で三十分程かのう。なるべく日陰を歩くよう心掛けるさ」
部長は前を向いたまま答える。その答え方だと、やはり部長は暑さをあまり気にして無いようにも思えるが、はてさて。

もしかして、暑さを気にしている場合ではないとか、そういうことなのだろうか。強気に見せていて、除霊の際の不安を隠しているとか、自信満々な自分を演じることで、緊張を和らげているとか、普段の部長を見ている時からは想像もできない感情と闘争が、しかし、部長の胸中では常日頃から存在しているものかもしれない。

どんなに霊力があつたって、部長も人間だ。人並みに、人並みならないことに悩んでいてもおかしくない。

「ところでお主」

「あ、はい」

思考の途中で部長が立ち止まり、振り向く。微笑んではいるが、心なしかその表情からは、何かに対する不安が伝わってきた。緊張で体が強張る。

「実は、どうしても聞きたいことがあるのじゃが」

「何でしょう」

出来るだけ声を落ち着かせて尋ねる。部長が、今ここで僕に聞きたいこと、それは一体。

「お主、昼ごはんはきちんと食べてきたか？」

「え？」

「答えよ」

「はあ、まあ、ちゃんと食べましたけれど、それがどうしたんですか？」

「いや、ただ気になっただけじゃ。そうかそうか、食べてきたか。よしよし」

部長は一人で納得すると、いつもの屈託のない笑みを浮かべ再び歩み出す。僕は体から力が抜けていくのを感じながらその後が続いた。

「儂の心配なぞせんでよいぞ」

「どうして分かったんですか！」

いきなりの発言に思わず突っ込んでしまう。心が読まれていたのだろうか。馬鹿な、と思いつつ部長ならあり得ると思えた。そうだとすると、何とも居た堪れない。

「読むというか感じるのじゃよ、他人の感情を。これも霊力の成せる技じゃがのう。何かに不安を抱いておるといのは察したからの。儂の身でも察じているのかと思っただけじゃ」

「……そうですよ」

恥ずかしくなつて、部長の後頭部から視線を外す。

「儂は専門家じゃ。大船に乗った気でおるがよい」

「それでも、僕より一つしか年が違わない、女の子じゃないですか」

「ほう」

部長は再び足を止めて振り返った。僕が視線を戻すと、その顔には不敵な笑みが浮かんでいる。

「儂じゃ不服か？」

「そういうわけじゃないですよ。ただ……」

少しの間、口籠る。僕が言おうとしている言葉は素人意見そのもので、部長にとっては煩わしいものかもしれないから躊躇った。けれども、僕は自分の気持ちを伝えたかった。

「部長から見れば、深谷さんから僕を守ることは、当然のことをしているだけかもしれないが、僕にとっては、部長に命を救われているも同然なんです。そんな、助けられるだけの何も知らない第三者としては、部長はとても凄い人のように思えますが、同時にとても大変なことも、当然のように受け止めて平気だと言えてしまう、そんな危なっかしさを感じるんです。全部自分だけで引き受けてしまうような、独力のみで解決しようとするような、そんな人に映ってしまうんです。だからその、おこがましいと思われるかもしれないませんが、無理はしないで欲しいんです。僕程度が何をしたらって微力にすらならないかもしれないませんが、何か協力がしたいんです。助けられるだけじゃ嫌なんです。可能な限り、貴女の力になりたいんです」

緊張からか、饒舌になってしまった。言わなくていいことま

で言ってしまった気がする。

少しばかり後悔している僕に対し、部長は一つ頷いて言った。

「確かにおこがましいな」

ぐさ、と僕の心に言葉のナイフが刺さる。覚悟はしていたつもりだったけれど、中々こたえる。

「儂が自分の力だけで無理してでも物事を解決しようとしていると思ひ込むのは自由じゃが、何の力を持たない人間がへたに手伝うと逆効果を生む可能性があることは知っておろう。自分の非力を自覚してまで手伝いたいと言うのは、非力でも何か出来るかと勘違いしている愚か者だけじゃ」

部長の言葉に、僕は何も返すことができない。貸せるほどの力を持たない僕は、全てを部長に任せるしかない。当然だ。分かっていたはずなのに、どうしてあんなことを言ってしまったのだらう。他人に頼ってばかりいる自分を、自尊心が許せなかったのだらうか。誇れるほどの力も持たないくせに。

「すみませんでした」

深々と頭を下げる。このまま置いて行かれても文句は言えないと思つた。僕は、馬鹿だった。

「謝らずともよい。お主の善意は嬉しいぞ」

ふふふつ、と笑う部長はいつもと同じだった。まるで動じない理由を部長の過去に見た気がして、益々申し訳なく思う。

僕のような素人の的外れな意見を、部長は何度も言われてきたのだらう。その度に、今のような反応をして、一般人と自分との見解の違いを悟っていったのだらう。

僕は部長にとつて、どうしようもなく一般人になつてしまつた。見限られて、しまつた。

「それに、僕はお主を非力じやとは思つておらぬよ」

「えつ」

驚き、頭を上げる。

「でなければ僕の仕事につき合わせたりはせぬさ」

「あ……」

今更ながら、僕は今自分がどこに向かおうとしているのか思ひ出す。そうだ、僕は部長の手伝いをするために、今ここにいるのだつた。それは、僕の力が少ないながらも部長の助けになると、認めてくれたからだろう。餌として、ではあるが、手助けには変わりないはずだ。

「さあ、いつまでも落ち込んでいる場合ではないぞ。まだ問題は解決しておらん。謝罪も後悔もその後にするのじやな」

「……はい。ありがとうございます」

僕はもう一度、大きく頭を下げた。申し訳なさと、感謝を込めて。

「着いたぞ」

「ここですか」

僕たちは比較的大きな家の前で立ち止まつた。住宅街とは少し離れた場所にある、落ち着いた雰囲気を持った木造家屋だ。屋根も瓦で敷き詰められていて、庭も広そうな、古き良き日本家屋といった感じである。

「凄いですね。深谷さんはこんな場所に住んでいるんですか」

「父が中々売れている純文学の作家だそうじやからな。一般人よりかは財を持つておるのじやろう」

「どこで知つたんです、それ？」

「それとなく彩花に聞いたのじやよ」

部長の情報量の多さに一種の恐怖を感じた。ある意味、深谷さんより恐ろしく思える。

「さあ、入るぞ」

部長は、ここに至るまでと変わらぬ足取りで敷地内に入る。何とも頼もしい人だ。僕も続いて足を踏み入れる。

ぞわ、と毛が逆立つ。

僕は一歩足を踏み入れた形で固まつてしまつた。空気の質が、その意味が、境界を超えることで変わったと感じた。急激に体が冷えたように思え、汗が凍つてしまつたんじゃないかと錯覚する。持つていた多少の余裕も吹き飛んだ。さつきまでは大きい屋敷だと思つていなかつたのに、今じゃ本当に妖怪が出る屋敷だと言われても信じてしまいそうな、そんなおぞましい雰囲気が漂つている。

自然と、首だけが動き、その原因を探そうとする。そして、見た。

見て、しまつた。

深谷さんが、二階の窓越しにこちらを見ていた。口元を歪ませ、微笑んでいた。とても、とても嬉しそらに。

「何をしておる、真」

はつとして、呼びかけられた方を見ると、部長が玄関の前に立ちこちらを見ていた。

「その、深谷さんが」

ちらと目だけで窺うと、既に深谷さんの姿は見えなかった。空気が少し軽くなる。体温も戻ってきたようだった。

「とりあえず、来い」

部長が手招きする。僕は足が動くことを確認してから歩みを再開して、部長の前に着く。

玄関も綺麗だった。雨や直射日光を避けるための屋根があり、景観を損ねるようなものも殆どなかった。何故か扉のすぐそばに口の縛られたビニール袋が置いてあったが。

「すごい殺気じやったのう」

小声で部長が言う。深谷さんに聞かれぬようにするためなのだろう。

「え、部長も感じたんですか」

做うように、僕も小声で話す。

「うむ。殺る気満々じやったの」

「笑顔で言われても笑えませんよ」

「とはいえあれでも常人には気付けぬ。ああいう殺気をと呼べるようなものを人混みの中で発することでお主のような霊力の強い人間を探すのじや」

「でも僕、学校の中に限らず最近あんな怖い経験をしたことなんてありませんよ」

「彩花に対する認識の違いからじや。当時のお主は霊力の存在

も知らなかったじやろうし、彩花に対して恐れなぞ抱いておらなかつたじやろうから、気付きにくかつただけじやよ」

意識の問題、ということだろうか。それだけでああも印象が変わるとは、にわかには信じられないが、部長が言うならそうなのだろう。

「さて、今から中に入るぞ。お主は今日、嫌々ながら僕に連れてこられたという設定じやからな。僕と一緒に襲われまいと安心しつつも、やはり怖いと思っっていることになっておる」

「はい。似たような心境なので、多分演技に問題はないはずです」

「よし。彩花の話じやと今日は家の中にはあやつ一人のはずじやから、儂らは同室で過ごすこととなる。儂は折りを見て退席すると見せかけて隠れておるから、お主はびくびくとしておれば良い」

「わかりました。しかし部長、恐ろしく周到ですね」

怖いほどに用意が良い。けれどそれは、僕の安心材料でもあった。

「褒めるでない。当然の準備じや」

部長はそう言つて、インターホンを押した。軽快な音が響いて暫くすると、玄関の向こうに人の気配が現れた。鍵を開ける音がして、扉がこちら側に開く。

「こんにちは、真君、部長。真君も来るなら、先に言つてくれれば良かったのに」

深谷さんが、そこにいた。私服の彼女は普段と変わらぬ口調

で話す。

あの口で、僕は喰われそうになったんだ。思い出して、夏だというのに寒気を感じた。長袖にしてくるんだったと今更ながら後悔する。

「予定が無いそうじゃから連れてきたのじゃ。迷惑だったかの？」

「ううん、全然です。どうぞ、中に入って」

「お邪魔するぞ」

「お邪魔します」

部長が続いて深谷さんの家上がる。深谷さんと僕の間には部長がいるから、今襲われるということはないだろう。

「ここでもいいかしら」

外と比べて多少涼しい室内を通って、深谷さんが案内してくれたのは八畳間の和室だった。部屋の中央に木でできた茶色い机があり、それを囲むように四つの座布団が敷かれている。部屋の入口は襖で、入って左にも隣の部屋へと続いているであろう襖がある。正面は障子張りの戸で、陽光に照らされた紙の白が眩しい。右手には床脇と床の間があった。かなりしつかりとした和室である。

「さ、座って」

深谷さんの示した席へと座る。僕は入ってすぐの、正面に障子のある席に座った。部長は僕の左、深谷さんは僕の正面に位置している。

四方が閉じているのに、不思議と暑さを感じなかった。

「部長、今日は何をしますか？」

「そうじゃのう。大富豪でもしながらお主の書いた作品の話でもするかの」

「ええー、恥ずかしいな。真君もいるのに」

そう言つて、ふふつと僕に笑いかける。僕は曖昧に笑つて返した。

「良いではないか。ほれ、早速始めるぞ」

「はい」

部長が制服のポケットからトランプを取り出し配り始めた。僕は無言で部長の手元を眺める。深谷さんの顔を見たくはなかった。

「むう、また僕が負けたか」

部長が手元に残ったカードを机の上にばらまく。あれから何回かトランプ遊びをやった後、部長が一昨日のように買い出しの罰ゲームつきのババ抜きを提案し、その勝負が終わった時だった。

「まあ、言い出したのは僕じゃしの。行つてくるとするか。一昨日と同じ飲み物で良いか？」

「はい」

僕は無言で頷く。

「では行つてくるぞ」

そう言つて部長は振り向きもせず部屋から出ていった。暫くして玄関の扉が開閉する音が響く。

これで今、この家の中には僕と深谷さんしかいない。この状況で深谷さんは、果たして。

「来て、くれたんだ」

深谷さんの声を、僕は顔を見ずに聞いた。とてもじゃないが、顔なんて見れない。俯きがちに顔を伏せ、机の木目をじっと見ていた。視界の上部に深谷さんの胸元が辛うじて映っている。

「部長がいるからって、安心してたの？」

深谷さんは動かない。僕は沈黙を貫く。

「来ないよ」

え、と思わず顔を上げてしまう。

上げて、見てしまう。

先程、窓越しに見た時とは比べ物にならないくらい、喜びの表情を。

室温が急激に下がっていく。冷や汗が頬を伝って、乾き、体温を奪っていく。心臓の鼓動が早まった。

来ない？ 誰が？ どういう意味だ？

混乱する頭で彼女の言葉の意味を理解しようとするが、分からない。

「どういう、こと」

解答を渴望する意思が、声になって漏れた。

彼女は笑っている。僕を見て、可笑しそうに笑っている。それは何を意味しているんだ。僕の何がそんなに可笑しいんだ。答えてくれ、お願いだから、嘘だと言ってくれ。

頭は解答を出している。出していて、それが信じられない。

その事実から遠ざかりたいと、自らが生み出したものから逃げようとする。叶わないとも自覚しながら、それでも、どんなに無様でも、それと向き合うことを避けようとしている。

「部長は来ないよ。だって——」

その先の言葉を、聞きたくない。

けれど、ああ、現実には捕まる。

彼女の口は、止まらなかった。

「部長は、私の味方だから」

気が付けばもう、そこは深谷さんの作り出した夢現の世界の中だった。部屋の形が自由に変わっていく。

現実ではないような、悪夢の世界。

しかしどうしようもなく、現実だった。

夢現の世界の、中だった。

体は動かない。動かない？ 動けよ。今すぐ立ち上がって、

ここから——

「逃げられないよ」

逃げられない。彼女の言葉が、すうっと僕の中に入っていく。逃げようとする意志が、消え去る。

でも、一昨日は、どうしてか分からないけれど、助かったじゃないか。今度もきつと、助か——

「助かりも、しない」

深谷さんは笑う。

面白そうに、楽しそうに、笑い、笑い、笑う。

戸惑う僕を弄んで、笑う。

心臓が、早い。

「どうして。一昨日は」

口から上手く言葉が出てこない。一昨日と殆ど同じ状態だ。時間と場所だけが違う。

ここは、深谷さんの、家。

捕食者の、巢。

「一昨日はねえ、部長が助けたんだってさ」

部長が、助けた？ けどあの時部長は、買い出しに行っていた。

「私たちが二人つきりになったときどういふ会話をするのか聞きたかったらしくって、スーパーマーケットじゃなくて近くの自動販売機で買って来たんだって。それで、私が君を襲う瞬間に出くわして、つい助けちゃったらしいよ。驚きだよね、部長もこんなことができるなんて」

ぐにやぐにやと歪む空間を示すように両手を広げる深谷さん。

「それで君が帰っちゃったあの後、部長と話したんだ。私は君に憑りついている悪い霊を食べようとしたんだって。そしたら部長、信じてくれたよ。協力するぞって言ってもくれたし、優しいよね」

本当に、優しい。

そう言つて深谷さんは、嘲るように笑った。

僕の目の前が暗くなつていく。息は乱れ、心臓の早鐘は収まらない。

そんな馬鹿な。部長のあの言葉は、全て僕を騙すためのものだったのか？ 深谷さんの霊力を知ることができたのは、そういうことだったから？ けれど、除霊に協力したいと言つたのは僕だし。

ああ、と悟る。

そうか。何も今日僕を襲わせなくてもよかつたのか。たまたま僕が言い出しただけで今日という日になっただけで、そうじゃなくても除霊は成功したとか言つて油断させて、後日襲わせても違いはないじゃないか。

餌になつてくれぬかのう？

部長の言葉を思い出す。あれは僕の中にいると勘違いしていた悪い霊を、餌に例えたのか。

そういう、ことか。

部長は、僕の味方じゃなかつたのか。

「部長は色々計画を立ててくれてさ、すつごく助かつちやつた。どれも殆ど穴なんてなくつてさ、君と二人きりになるまでは部長に任せっぱなしだったよ」

僕の知つた部長の計画の緻密さは、今や僕を追い詰める情報でしかなかつた。

心の中の望みは、悉く断ち切られる。

絶たれていく。

「じゃあ、そろそろ食べちゃうね」

深谷さんが机に両手を突いて立ち上がると、手をそのままにして膝を机に乗せ、机上で四つん這いになる。そのまま、さな

が肉食獣の如く僕に寄ってきた。

僕はただ視線を虚空に彷徨わせることしかできない。あるはずのない逃げ場を探すように、目の前の獣と視線を合わせないように、僕は。

ぬつと。

僕の目の前に深谷さんの顔が現れる。その眼は、僕という獲物を前にした喜びからか爛々と輝いていて。口が、ぱかっと開いて、首を噛み砕こうと、動いて。

死ぬんだな、と思った。

嫌だ。

僕は、生きるんだ。

歯が、首に当たった。

胸の鼓動が、一際大きくなる。

死ぬ。嫌だ。死ぬ。死ぬ。死ぬ！

「諦めないで」

ぱあ、と背後から光が漏れる。同時に、黒い手のような布が二つ、深谷さんに襲い掛かる。

「あぐっ！」

まさに噛み殺そうとしていた瞬間に布で肩を押された深谷さんは後ろに倒れこむ。同時に、僕の左肩に手が置かれた。

「もう、動けるよ」

「え、あ」

首を動かす。動いた。

肩に置かれた、黒い布で巻かれた細い手、その肘を隠す黒い

何層もの和服、黒い長髪、そして、凜とした顔。

夢の中の少女が、そこにいた。

「君は……」

「立って。来るよ」

表情を変えず、前を向いたまま少女は言う。

慌てて前に向き直ると、机の上で起き上がった深谷さんが少女を睨み付けていた。

「誰よ、貴女！」

彼女は叫び、下に向けた右手から氷柱のように尖った氷の棘を二本出現させると、少女に向かって投げつけた。

「うわっ！」

驚く僕とは対照的に少女は顔色一つ変えず両方のたもとから先ほどの布を二つ伸ばし、難なく叩き落として見せた。

布の動きはそれだけで終わらず、そのまま更に伸びて深谷さんに再度襲いかかる。

「くっっ！」

深谷さんは左手を開いて体の前に出す。すると手の平を中心にした氷でできた円が現れ、見る見るうちに広がり壁のようになる。二つの布はそれに阻まれ、触れた箇所が凍りついていく。

「薄い」

しかし少女は大して驚くでもなくそう呟くと、氷の壁から布を離し、交差させると、ひらひらとはたいていた布が、まるでワイヤーでも入れていったかのように真っ直ぐに伸びていく。五つに分かれた先端までびんとなると、それはさながら黒

い刃のようだった。

「ふっ」

少女は鋭く息を吐くと、交差させた布を振る。黒い影が一瞬にして空間を切り裂いた。

ピシ、と壁に真つ直ぐな亀裂が走り、パンという音と共に白い光を発して消える。

「そんな……」

目の前で起きたことが信じられないというように呆ける深谷さん。少女はその隙を逃さなかった。

壁が消えると確信していたであろう彼女はもう既にはためく布を彼女に向かわせていて、

「あつ！」

それに気づいた彼女は両手を前に向けるが、時遅く、両腕を束ねるように布が巻き付いていた。

「ぐううう」

それだけに留まらず、束ねた腕ごと今度は体に巻きつき、彼女の自由を奪っていく。足も束ね、目と口を塞ぎ、布の動きが止まった時、彼女は完全に黒い布に何重にも覆い尽くされていた。

「ず、凄……」

僕はただ見ていただけだった。

少女は和服の袖の部分全て彼女を覆うのに使ってしまったらしく、黒い布で覆われた細い腕が見えていた。

少女は動けなくなった彼女に近づいていく。

「あ、ちょっと、待って」

僕は正気に返り、少女に呼びかける。彼女は無言で振り向いた。

「えっと、深谷さんを、どうする気？」

「食べる」

少女は素つ気なく言い放った。

「え、だ、駄目だよ、多分」

「どうして」

「だって、食べちゃったら、深谷さん、死んじゃうでしょ」

「大丈夫」

「大丈夫って……」

何がどう大丈夫なのだろう。死なない程度に食べるということだろうか。

「死ぬのは、霊の意思だけ」

少女は続けて言う。

つまり、今悪さをしている意思を持った霊力だけを食べるということなのだろうか。けれど、それでも。

僕は一つ深呼吸をする。夢現の世界でそれがどんな意味を持つのかは分からないが、少なくとも落ち着こうと自分に言い聞かせることはできる。心臓の鼓動が少し収まったように思えた。そして、少し言い出し辛さを感じつつも、自分の意見を言った。

「あのさ、説得とかって、できないかな」

僕の言葉に、少女は首を傾げる。言っている意味が理解でき

ないとも言おうように。

「ああいや、だからさ、意思があるんだつたら、もしかしたら
说得できるかもしれないでしょ。だからすぐに食べちゃうんじ
やなくて、一旦話し合うべきだと思うんだけど」

「無理」

対する少女の返答は簡潔だった。

「ど、どうして」

「食べることしか知らないから」

馬鹿に説得は通じない、ということか？ けれど襲われる前
とかは普通に生活していたはずだし、それなりの知能はあるは
ずだけど。

「止める意思が働いてないから」

「止める、意思？」

少女の言葉は簡潔すぎて詳しいことは推測するしかない。止
める意思というと、欲望を抑制する意思ということだろうか。
でも、働いてないってどういうことだ？

「あ、もしかして、本人の意思がそこにないから、とか」

僕の憶測に、少女は頷いた。

今までの深谷さんは霊力の意思だったけど、本来の深谷さん
の意思もあるはずなんだ。けれど行動を全て霊力に任せっぱな
しにしているから、霊力がどんな行動に出ても止めることがで
きない。少女はそのことについて言及しているのだろう。

「じゃあ、本来の意思を呼び起こせばいいってこと？」

「難しい」

難しいってことは、できる可能性はあるってことか。

「助けて貰ったのにこんなこと頼んで悪いんだけど、どうにか
それ、できないかな？ 僕で良ければ、手伝えることはなんでも
するから」

「貴方にしかできない」

僕にしかできないって、どういうことだ？

「彼女の霊体の中に入る」

少女は布でぐるぐる巻きにされた彼女を指さす。

「彼女を見つけて連れ戻す」

「霊体の、中で、か。中って、どうなってんの？」

「寒い」

端的な表現だが、よく分かった。

「他に気を付けることって、ある？」

「死なないで」

……オーライ。死の危険もあるってことか。

ここが夢現の世界で、夢と現実の狭間だっというのなら、恐
らく霊体の中の世界は夢の世界そのものなのだろう。何が起き
たって不思議じゃない、はずだ。

「分かったよ。ありがとう。早速行きたいんだけど、どうすれ
ばいいかな？」

「怖くないの？」

逆に尋ねられた。まあ質問しっぱなしだったし、今度は答える
番か。

「そりゃあ、怖い、よ。死の危険なんて、今まで殆ど経験した

ことなかったし」

昔、とつても痛い思いをしたときに、死ぬと本気で思ったことがあった。振り返ってみれば笑い話になるような過去だ。だから多分、今回もなにかなるんじゃないだろうか。今さつき本気で死を覚悟していてなんだけど。

思い出して、また胸の収縮周期が短くなつた。体は正直だな。「どうして？」

彼女の疑問が続く。この問いは、どうして怖いに行こうとするの、という意味だろうか。それとも、どうして襲ってきた相手を助けようとするの、という意味だろうか。

まあどちらでも、答えは一緒だ。

「その、命をね、大切にしないといけないなって思つて」

今回の一件で、僕は死の危険と隣り合わせになつた。その経験をして僕は、改めて命があることの素晴らしさを実感できた。だから、例え僕を襲った相手でも、意思がある以上は、無闇にその命を奪おうという気になれなかつた。せめて助ける努力だけでもしたかつた。どうしようもない自己満足だけど、それでも僕は、自分の意思に正直になりたかつた。

「それに、こういうのは、他人だけで解決しちやいけないと思ふんだ」

深谷さんの霊力がどうして意思を持つまでに至つたのか。深谷さんは何を切望していたのか。そういつた事情も知らずに、軽々しく扱つていい問題でも無いと思ふ。

そして僕は、自分の意思の大切さに気付いた。深谷さんが霊

力の意思に従つたように、僕も思考を部長に任せてばかりだったからこそ、今回のようなことが起こつてしまつたのだらうと思ふ。だから少しでも、自分の意思に正直にならうと思つた。多少の無茶をしてでも、自分の意思を貫き通すことが大事だと悟つた。

本心でそう思つていながら、助けられただけで終わるのは、見てただけで終わるのは、何だか、後悔しそうだから、同じ後悔でも、何かをやつて後悔しなかつた。怖くても、死ぬかもしれないなくても、僕は。

「だから、行きたいんだ」

胸を張つて、生きたいんだ。

「変」

少女は変わらぬ表情と口調でそう言つた。手厳しい。確かに

大口叩けた立場じゃないけど。

「これ」

「うん？」

そう言つて渡されたのは、少女の背中から伸びている黒い布の端だつた。

「中で三回引つ張れば戻る」

「あ、ありがと」

僕に何かあつた時の保険だらう。全く何から何までお世話になりつぱなしで申し訳ない。

「触れて」

少女は深谷さんの頭部を指した。僕は恐る恐る布を握つてい

ない右手を乗せる。

「気をつけて」

「うん。って、わっ！」

少女の言葉に答えた途端、右手で触れている部分がべこつと凹んだかと思うと手が引かれ、そのまま吸い込まれていき――

「……………あ」

気が付くと、そこは雪景色の中だった。降雪こそないものの、見渡す限りの降り積もった雪、雪、雪――

「ここが、深谷さんの、夢の中の世界……」

殺風景で、ただ寒い。これが深谷さんの気持ちを反映しているものだとしたら、彼女は一体何を思い、何を望んだのだろう。

考えても分からない。ただ寒さだけが感じ取れて、寒くて、寒くて。

「寒っ！」

すぐに耐えられなくなって、腕を抱くようにして体を震わせる。少女の言った通りものすごく寒かった。特に足の裏は靴下を通じて雪に触れているので尚更だ。曇天の空もそう思わせる一因だろう。

「あ、でも雪は溶けないのか」

現実と夢の違いを見た気がした。景色が単調なものも、複雑なものも、再現が難しいからであろうし、寒いというのも多分、そう僕が錯覚させられているだけなのだろう。それでもかなり厳しいが。

「何か羽織るようなものが、落ちているわけないか」

何で制服を着て来なかったんだろう、と激しい後悔に襲われる。夢の中でも少しは錯覚の寒さを気持ちで和らげることができただろうに。とそこで、僕は左手に握っているものを確認する。

少女が持たせてくれた布だった。これを三度引けば元の世界に戻れるらしい。夢現の世界かも知れないが。

「どうかこれ、どこに続いて、って、おお」

布を辿っていくと、空中にできた穴から伸びていた。

穴。それはさながら次元の裂け目のようで、中は真つ暗でどこまで続いているかわからない。そんなものが空中にできているのだ。どうやら少女の黒い布でできているらしく、穴の端からも布が伸びていて、穴を縁取っている。実は空中に巨大な筒のようなものが浮かんでいるだけだったという可能性も考慮し体を傾けて穴の外からその背後を窺うが、そんなものがない銀世界が広がっているだけだった。まさしく次元の裂け目だ。

「どうなっているんだろう」

穴を後ろから見てみたくなった僕は背後に回ろうとするが、何かにぶつかってしまう。

「え、何だ、これ」

手を伸ばすと、見えない何かがある。熱くも冷たくもない、見えない壁のようだった。

見えない壁に手をつきながら移動すると、どうやら地平線の彼方まで続いていそうだった。穴の後を見せないようにしてい

るように。

「いや、そうか」

思いつく。ここは深谷さんの霊体の中、つまりは精神世界だ。この壁はつまり、ここから先に行けないんじゃないかと、ここから先が無いという事なのではないだろうか。精神世界は限られた空間しかなくって、閉ざされている。そこにあの少女が穴をあけて僕を入れたのでは。そう考えれば、僕が今入ってすぐの場所に居ることになり、納得がいく。仮定としては十分だろう。

「ここがスタート地点、か」

それが分かっただけでも収穫で、少なくとも行く先の選択肢が背後約百八十度分消え去った。ここから離れるように移動すればいいのだろう。

「さて、どの方角に行こうか」

けれど未だ前方に百八十度分の自由度がある。見つけ出し連れ戻すって言ってたから簡単じゃないとは思っていたけど、こんな、かなり先まで見渡せる場所から動いて探すとすると、中々に骨が折れそうだった。夢の世界ならいくらでも大きくなりそうだし、けっこう無謀な挑戦だったと今更ながら気付いた。霊体にも、体力はあるのだろうか。

と疑問に思うと同時に、ひゅう、と風が吹く。

「うわ、寒っ！」

凍えそうになる。

そうだ、この布はどこまで伸びるのか分からないけど、少しは体を包んでくれるのではないだろうか。これも多分霊力の賜

物だろうから、効果はありそうだ。布がどこまで伸びるかは分からないが、その時は諦めたいだろう。

そう思い至り、僕は早速布を体に巻きつけ始める。三回引つ張らないように気を付けて、少しずつ穴から遠ざかりある程度伸びたら体に巻き、再び穴から距離をとり、と繰り返した。

「うーん、上手くないかな」

しかし中々思った通りにはならない。どうしても緩んだり、隙間ができたりしてしまふ。強制帰還を恐れて強く引けないのもネックだ。

「この布、自動的に僕を巻いてくれないかな」

何て、呟いてみたりもする。そんなこと起きるわけないかと自虐的に笑っていると、

「ん、ちよっと、ええ！」

伸ばした布がまるで意思を持っているかのように僕を巻き始めた。僕の意思が霊力に作用したのだろうか。

暫くして、僕の全身は黒い布で覆われた。少女もこんな格好だったな、と思いつく。だが少女とは違い、耳や口元まで覆われている。何とも有り難く、その利便性に改めて驚いた。特に足の裏のガードを増強できたのは喜ばしいことだった。布は想像以上に断熱してくれる。これも霊力の成せる技だろうか。

穴から伸びる布は僕の左足から僕の体を巻いていた。僕はそれを左手で掴む。ようやく先に進むことができそうだった。

「大分遅れちゃったな。時間とか、やっぱりかけない方がいい

よね」

この世界での時間の概念は分からないし、急げとも言われていないけど、早く解決するに越したことはないだろう。

「とりあえず、真っ直ぐ進んでみるかな」

穴から見て正面の方角へ進んでみる。ここが夢の世界の端なのであれば、端に深谷さんがいることはないはずだから、できるだけ穴から離れるべきだと思つた故である。

現実と違い、足跡のつかない雪道を、僕は歩き出した。

歩き始めて、どれだけ経つただろう。五分のようでもあつたし、五十分のようでもあつたし、五時間のようでもあつたが、ついに、見つけた。

気付けば簡単なことだった。人が再現できる情報量はそれほど多くない。だから夢の世界もどこか非現実的だったり、色や景色、音などの刺激も単純なものにならざるを得ない。しかし、ここが人の創り出した空間で、その人もこの空間のどこかにいるということなら、その人の周りは本人が近くにいる分強く本人の意思が反映されるのではないか。

その仮定は、進んでいくうちに風が強くなったり、雪が降り始めたり、地面の雪に足跡が残ったりと世界がだんだんと環境が変化していったことから思い至つたことだった。夢現の世界と違い現実の情報が存在しない分幻覚を事実として誤認しやすいのか、そういった変化は分かりやすかつた。それから僕は、少しでも何かしらの変化がある道を選んで進んでいき、彼女の

もとに辿り着いたのだった。

かまくら、だった。

周囲には、幼稚さが感じられる雪だるま、その残骸である雪の塊がいくつもあるなかで、そのかまくらはとても大きくしつかりとしていて、威圧感さえ放つているようだった。遊び心など一切感じさせない、完全に正しいとも言える造りは美しさとともに、非人間性を醸しだしているようにも思えた。

「……………」

雪の降る中、僕は暫くの間そこで立ち止まり、その景色を目に焼き付けると、かまくらの中に入った。

予想以上に広いかまくらの中で、小学生程の女の子が一人、壁に背を向けうずくまっていた。ぶかぶかの白いダツフルコートに同じく白い厚手の長ズボン、白い長靴を着用している彼女は、明らかに僕より厚手をしているはずなのに、何故だかとても寒そうに思えた。

僕は女の子に近づくと、女の子は、僕に気付かない。

「深谷、彩花さんだね」

僕が呼びかけると、女の子はゆっくりと顔を上げた。

「……………え」

女の子は、僕がそこにいることを信じられないような目でこちらを見ていた。まだ幼さの残る顔立ちの中で、目だけが何かを悟つたかのような、そんな憂いを帯びた影が宿っていた。

どうして若返っているのかはともかく、何か深い闇を負つていそうな目だ。これは、かなり難しいかもしれない。

けれど、本人は目の前にいるんだ。何とか打ち解けて、一緒に連れ出さないと。

「貴方は、誰？」

と、やる気を奮い立たせた僕は女の子に尋ねられる。

「え、僕は」

平坂真だ、と普通に自己紹介しようとして踏み止まる。

もし事がうまく運んで彼女をここから連れだした場合に、このことを彼女が忘れなかったら色々と面倒なことになりそうなのがする。幸い今は口元も隠れているし、誤魔化しておこう。

「名乗るほどの者じゃないよ」

「そう。じゃあ何をしに来たの？」

「それは君を」

ここから連れ出すため、と言おうとして再び思いとどまる。

彼女がここから出たくなかったら、ここでそのことを言うのは逆効果だろう。ていうかこのセリフ、けっこう危ないな。完全に不審者の格好だし。まあ、ここは夢の中だけど、警戒させるような言葉は避けるべきだろうな。

さて、何て言おう、と考えること一秒。僕は止めていた言葉の続きを言う。

「君を、助けに来た」

「……………」

僕の言葉を、女の子は無言で受け止める。いや、受け止めかねているのかもしれない。

……どうして黙っているのだろう。そんなに変な言葉を言っ

てしまっただろうか。ここはひとつ客観的立場に立つて考えてみるか。

かまくらの中で女の子が一人蹲っていた。そこに怪しい黒いお兄さんの登場。何しに来たのと尋ねる彼女に対し、お兄さんは答える。助けに来たよ。

結論。お兄さんはキチガイだった。

「あ、いや、その、これは、君がなんか困っているように思えてさ。何か力になってあげたいと思ったんだけど、迷惑だったかな？」

何とか取り繕うと下手な言い訳を並べる。果たして、彼女は。

「出てって」

追放を宣告なされた。絶望する。

「ご、ごめん」

再び蹲った彼女を置いて、僕はかまくらから出た。

どうやらファーストコンタクトの印象はかなり悪かったらしい。

「けれど、やっぱり何かに苦しんでいそうなんだよな」

呟き、崩れた雪だるまを見る。

「やれることだけでも、やってみるか」

再び己を奮い立たせ、僕は行動を開始する。

歩いている時も、こうして作業している時も特に疲れなどは感じなかったから、夢の世界に体力の概念は余りないのだろう。全てをこなすのにそれなりに時間がかかってしまったように

に思えるが、何とか終わった。

僕は再びかまくらの中に入る。

蹲った女の子の前に立つと、今度は気付いたようで顔を上げる。
「何？」

多少いらつきが混じった声のように思えた。僕は負けずに明るい声を出す。

「外の雪だるまさん、直しておいたよ」

それを言った途端、だった。彼女は突如立ち上がり、

「余計なことしないでよ！」

そう叫ぶと僕を突き飛ばし、走って外に出ていった。

「ちよ、ちよっと」

僕も慌てて外に出る。

そこで見たのは、彼女が雪だるまを壊している姿だった。蹴り、落とし、壊し、完膚なきまでに破壊しつくそうとする彼女は、目に涙を浮かべていた。

「深谷、さん……」

「こんな奴ら、こんな奴ら！」

落とした頭を踏みつける。何度も、何度も、何度も。

「絶対に、友達なんかじゃ、ないんだからあ！」

彼女の泣き叫ぶ声に呼応するかのように、雪が、風が、激しさを増す。彼女の姿は吹雪の中に霞み、見えなくなる。

「深谷さん！」

僕は彼女を呼ぶ。すると彼女が雪煙の中から姿を現した。

その姿は、成長した、高校一年生の深谷さんだった。ズボン

の丈が長くなっているが、それ以外に服装に特に変化はない。

それなのに、先ほどまでよりもさらに、寒そうだった。

「私にはね、友達がいないの」

冷え切った表情で、底冷えするような声で言う。

「一人も、いないのよ」

ねえ、と冷たい目が僕を捉える。

「私の友達は、どこに居るの？」

「それが、君の望みか」

僕は辛うじて、彼女と視線を合わせる。それだけで、体温が一気に奪われていくようだった。

「そうだよ。だから私に願ったんだ」

深谷さんの背後から、もう一人の深谷さんが現れる。服装ま

でがまるで同じである。

彼女は、霊の意思か。

「貴女は、いつの間に！」

「丁度今さっき、かな。拘束が緩くなった隙について、私の霊

体をこっちの世界に移したんだ」

拘束が、緩くなった？

「あの子に何をしたんだ！」

「別に何も。霊力が尽きたのかもね。確認はしてないけど、今頃倒れてるんじゃないかな」

霊力が、尽きた？

そうか、夢の世界で僕を包んでいるこの布も、少女の霊力の

はずだ。ここまで伸ばしてきた分、向こうの世界で少女は靈力を失っているのではないだろうか。

体に布を纏ったことを悔やみつつ、どうにか強気に見せる。「こんなところに君がいる間に、君の靈力を食べるかもしれないぞ」

「残念でした。私がここにいるということは、今私の体を動かす意思が無い状態、つまりは睡眠状態になっているの。そうなるともう、あの世界で私の靈力だけを食べるなんてできないのよ。この夢の世界に入ってくるか、夢の世界ごと壊して靈力を奪うしかないわけ。けど夢の世界ごと壊しちゃったら、私たちは靈力の器を無くす。君は生き残れるかもだけど、深谷彩花は死んじゃうでしょうね」

まあ少しくらいは食べられるでしょうけど、それじゃ足りないでしょうね、と彼女は笑った。

僕は歯嚙みする。まさかあの子まで危険に晒してしまうなんて。自らの不甲斐なさに悔しくなる。

左手で握っている、今まで伸ばしてきた布を見る。この先の彼女は、一体どうなっているんだろう。三回引けば、僕が夢の世界から出られるのと同時に、彼女も靈力を取り戻すのだろうか。いや、もう僕を戻せるほどの靈力も無いのかも……。

「さて、守る者のいない今なら、今度こそおいしく食べられてくれるわよね」

そうだった。僕には今、本当に味方がいない。先ずは自分の身を守らねば。

「そうだ、深谷さん！ 深谷彩花さん！ もうひとりの君は僕を、人を殺そうとしているんだよ。見過ごしていいのかい！」

「心配しないで彩花。食べ終わったら、あの子が貴女の友達になるから」

深谷さんは彼女の言葉に頷く。

駄目か。流石にそう甘くない。

「それじゃ、一つの希望も残さず絶望して死んでね」

守ってくれる人はいない。今度こそ、僕は死ぬかもしれないけれど。

「嫌だ」

けれど、これは自分で決めたんだ。誰かに頼つただけの結果じゃない。危険性や、怖さを知ったうえで自分で決めた行動の結果なら、最後まで貫き通す。どんなに無駄な足掻きだって、し続けてやる。

もう怯えたまま死を待っただけなんて、嫌だ！

「ふふ、その強がり、いつまでもつのか楽しみだよ」

言って、彼女は夢現の世界で見せたように、手の平を下に向けて氷の棘を作った。

「まずは、一本」

それを僕に放つ。

僕は体の前で腕を交差させた。この布が靈力による影響を防いでくれるのはその耐寒性から証明された。あの氷柱のようなものにどこまで作用するか分からないけど、多少は防いでくれ

るはず。いや、必ず防ぐ。

僕の期待は、しかし思わぬ形で裏切られる。氷の棘は、僕の目の前で叩き落された。黒い布によって。

「あ……」

「あら、生きていたのね」

彼女は僕の背後に語りかける。そこには、袖と、裾の一部を失った和服を着た、無表情の少女の姿があった。僕の持っている布の先が彼女の服に繋がっている。服の無くなった部分は僕が体に巻いている分だろう。

「よかった、無事だったのか!」

「ごめん。逃がした」

「謝らないで。僕が君の霊力を使っちゃったから……」

「私も油断した」

その布使っていて、と少女は言う。僕の体を包んでいる布のことだろう。

「今度は、さつきみたいに捕まったりしないからね」

「今度は逃がさない」

霊力を使った戦闘が再び繰り返られる。だが、今回流れは向こうにあった。

「ほらほら、どうしたの、当たっているわよ」

「大したことない」

吹雪を利用し、雪の中に小さな氷の棘を混ぜて攻撃する相手に対し、少女は防戦一方だった。

雪が降り、風が吹き荒れるこの場所は相手にとってホームで

あり、絶好の戦闘場所だろう。対するこちらは空間全てが敵だ。戦闘を有利に運ぶのは至難である。

分かっているのに、僕は何もできない。また、見ているだけだ。

何かないのか、僕にできることが。直接じゃなくてもいい、間接的な支援だけでも、何か。

と、そこで気付く。この空間を作り出しているのは、深谷さんだ。それは、霊の意思だけではない。そして本人の意思が空間に強く影響を与える理由は、その場所と本人が近いから。

僕のやるべきことを悟る。霊の意思が少女に集中している隙に、

「今だ!」

僕は立ったまま無表情で戦闘を眺めている深谷さんにタックルをかますように正面からぶつかり、肩に担ぐと、一目散に走り二人から離れる。現実世界で行ったら腰を痛めそうで怖い行為だが、ここは夢の世界だ。雪だるまを直した時も重いと感じたことはなかったし、きつと大丈夫のはずだ。

「な!」

深谷さんの霊が驚きの声を上げる。彼女は一瞬こちらを向き、それは少女にとってまたとないチャンスで。

「捕えた」

四つの布が素早く相手の両手足を拘束する。

「舐めないでよ!」

しかし彼女も同じ失態を犯す気はなかった。掴まれた箇所

水の輪を形成し、布が冷気によりその水にはりついている間にその輪を手足から外すことで拘束を回避する。しかしすぐにまた布が迫り、その対応に追われる。その間に僕達との距離は開いていく。

「――」

眠る前に聞いたような、内に響く声で呼ばれた気がして、走りながら振り向くと、少女がこちらを見ずに話しかけてくる。

「この彼女は私が抑える」

言って、一瞬だけ視線をこっちに移した。

「貴方はその彼女を説得して」

あの声は、君だったのか。

僕は悟り、頷くと、前に向き直る。

「待ちなさいよ！」

深谷さんの霊は叫ぶが、追ってはこられないようだった。

今のうちに遠くに行かなければ。

それだけを考え、走る、走る。

ひたすらに、遠くへ。

――どこまで走っただろう。僕は深谷さんを担いだまま雪の上に倒れた。深谷さんは腰から雪につくが、僕は顔面からだ。

いつのまにか息が切れている。霊体でも息が切れることはあるのか、と他人事のように実感した。心臓の鼓動は聞こえない。

夢現の世界では聞こえていたように思うけど、あれは現実の音だったのか。

「……………」

少女の言葉を思い出す。僕は深谷さんを説得しなければならぬ。それは多分、見つけて連れ戻すといった流れの中途にあるはずのものだろう。

見つけて、説得して、連れ戻す。

何をどう説得するのか。詳しくは分からないけど、きっと大局的には、霊力の意思なんか頼りつきりにならないで、少しは自分で行動しろという説得になるんだと思う

そして意識を、改革させるのだろう。

「難しいね、確かに」

呟く。少女の言う通りだった。僕が望まなければあのまま少女が霊の意思だけを食い、それで問題は解決していただろう。なのに僕は、わざわざ難しい道を選んだ。

「自分の意思、だけどね」

本心だったから、後悔してもいいと思った。けれど実際には思っていた以上に大変で、苦しい。危険だってあった。

「説得、か」

そして、これである。相手の弱いところをつき、自分の意見を押し付ける、精神に対する攻撃だ。僕の最も苦手とするものなのなかの一つである。

「けど、選択をした以上、責任はとらないとね」

僕は半身を起き上がらせる。無理だとは、もう、決めつけない。

心を鬼にしてでも、やりきってやる。

「さあ、意思の喧嘩をしよう」

「君の望みは、友達が欲しい、ということと合っているかい」
「……………ええ」

さつきから座ったままずっと黙っていた彼女が、僕の言葉に反応する。さつきまでは、ただ混乱していただけなのかもしれない。

「そう。じゃあ何故、自分の力で叶えようとしなかったんだい？」

「…………。貴方には分からないわよ。友達が、気兼ねなく話せる相手がいる貴方に、私のことは分からない。友達のいない孤独も、それに耐えるしかなかった悲しみも、悔しさも、何も」
「そうかもしれない。けれど、それは誰だって同じだ。誰も、他人の本当の気持ちなんて分からない。僕だって実際、深谷さんが実際はこんな人格で、こうやって悩んでいたことに気付かなかったしね」

「だったら、放っておいてよ。私は、私のやり方で、私の出した結論で、私の問題を解決しようとしているんだから」

「残念だけど、そうはいかない。何故なら君の出した方法は間違っているから」

間違っている。そう言っただけは彼女を否定した。

「何よ、何が間違っているのよ」

「先ずは手段だ。結局君は自分で考えることを放棄しているだけじゃないか。正しい手段だなんて言えない」

「もう一人の私が、考えてくれているじゃない。それは私じゃないって言うの」

「違うね。体が同じでも、意思が違えば別人だ。逆に聞くけど、君はもう一人の君と、どこが同じだというんだ？」

「それは、彼女が、私と貴女は同じだって、今度は私が考える番だから休んでいていいって」

こつん、と頭に何かが当たった。途端、白昼夢の中にいるような気分になる。目の前に、深谷さんがいて、甘い誘惑を囁いている。私に任せれば上手くいく、貴女は眠っていればいい。これは、深谷さんの記憶か？

記憶は終わった。けれどその後の行動が推測できる。深谷さんは、霊の誘いを断れなかったんだろう。

僕はそれを、否定しなければならぬ。

「それを鵜呑みにして、自分の大切な願いも任せちゃったってこと？」

「……………ええ」

「じゃあ結局、君は他人に考えることも何もかも投げただけじゃないか」

「だって、仕方ないじゃない。自分じゃ何やっても上手くいかないし、辛くて、耐えられなかったのよ」

こつん、と再び頭に何かが当たる。教室の隅で、一人でお弁当を食べていた。周囲からは話し声や笑い声が響くが、どうしようもなく遠かった。

「じゃあ、友達を作るために君は何をやったんだい？」

「……………話しかけられるのを待っていたり、相性が良さそう
な人を探したりしたわ」

「それで、どれだけの人に話しかけられたんだい」

「……中学校で、数人」

こつん。頭に何かが当たり映像が浮かび上がる。軽いノリで
話しかけてきた男子、挨拶をする近くの席の女子、皆笑顔で、
話しかけてくる。

「この人たちとは、友達にならなかったのかい」

「それつきりで、もう話してやることはなかったわ」

「どうして自分から行動しなかったんだい。そんなに友達が欲
しいのなら、今度は自分から声をかければよかったじゃないか」

「できないよ、そんなこと。無視されるかもしれない。煙たが
れるかもしれない。嫌われるかもしれない。だったら、自分か
ら行動なんて、しないほうがいい」

嫌われることを恐れ、好かれるような行動ができなかった、
ということなのだろう。その感情は、僕にも覚えがある。覚え
があるからこそ、問題点が分かる。

「だから、他人から話されることを待っていたのかい」

「そうよ。その何がいけないの」

「いけなくないよ。そうだね、口下手だったり、話す内容が分
からない人が、そういう考えに思い至るのは珍しくないと思う」
「だったら」

「それにそのほうが、相手が気に入らなくなったとき、切り離
しやすいものね。声をかけてきたのはそちらからで、自分は付

き合っていただけで、最初から友達だなんて思っていなかった
って」

「そ、そんなこと」

「少しも思っていなかったって、本当に言えるかい」

意地悪な質問だ。けれど、追い詰めないと彼女が持つ問題が
浮かび上がらない。

あの時、かまぐらの外で雪だるまを壊した彼女。あれがきつ
と彼女の持つ何らかの歪みの、ひいては彼女の霊力が意思を持
つてしまった原因なんだろうと思った。それを上手く突き止め
られれば、説得しやすくなるかもしれない。

「……………そんな、こと」

「結局、君の友達に対する執着はその程度なんだよ。嫌われる
かもしれないリスクを忌避して、自分と合わない人と関わりを
持つリスクを無視できなくて、リターンだけを求めようとした
結果が今の君だ。自分は上手く話せないから声をかけられなか
った。誰も声をかけてくれなかったから友達がいなかった。本
当は友達が欲しかったのに誰も気付いてくれなかった。私は悪
くない。責任は全て外にある。そう言い訳して自らを庇護し、
間違いを犯すことのない平和な日常を選んだんだ」

自分が責められることを恐れて、他に責任を押し付ける。そ
れは結局、自分はそのままで積極的じゃないってことだ。責任を
負うほどのものじゃないと自覚している。

そのことを自覚させる。

「ちがう」

「何が」

「ちがうわよ。確かに友達は欲しいわ。けれど、誰でもいいって訳じゃない。私に合った人が欲しかったの。誰だって自分と合わない人とは友達になんてなりたくないはずよ。私だってそうだし、逆に自分に合うと思つた人間がいたら、自分から声をかけるつもりだったわ」

本当に相性が良いかを見極めてから、と自分に理由をつける。それは現状が変化するまでの時間稼ぎか、友達に多くの妥協ができないということだ。

僕は責める口を止めない。

「相性が良さそうな人を探すってやつかい。じゃあ君は、なにももつて自分と合う人間であると判断するんだい」

「それは、遠目から見ても」

「遠目から見た外見や振る舞いだけで、何が分かるっていうんだ」

「少なくとも、他人に対してどういう態度をとるかは分かるわ」

「それが君の否定材料かい」

「否定、材料ですって」

「君は人間観察の結果、他人に対する振る舞いが分かると思つたね。そして君はそれを実践し、誰も友達に相応しいとは思えなかった。つまりはたつたそれだけで友達に相応しくないと判断したんだろう」

「それは、だつて仕方ないじゃない。私にはそれしか」

「できなかった。ほら、やつぱり君にとつて友達の重要性は大

きくない。外面だけで判断がつくと思つているんだからね」

「外から内面を垣間見ることだつてできるわ」

「垣間見る、ね。確かに距離を置くことで見えることもあると思う。けどね、それは近くで見たとときの対比がないとそれまでさ。自分と話しているときに相手がどう受け答えるか分からないまま、直に話もしないで他人の内面を決めつけることになる」

「それは、皆同じじゃない。誰だつて最初は外見でしか判断できないわ」

「その通りだ。だからこそ話しかけるんだ。本当に自分と合うかどうかを確かめるために。そして、信じるんだ。友達として、相手を信頼するんだ」

「しん、らい」

「友達というのは、信頼している相手を指す言葉だ。最初は軽くていい。知り合ったばかりの人間を心から信頼するなんてことはできない。段々と時間を共有していけば、自然と人となりを知つて、他人ではない、友達と思えていくはずだ。相手に気に入らないところがあれば指摘すればいい。どうしても合わないと思うのなら切り離せばいい。けれどそれは、相手の良い面も悪い面も、自分なりに十分判断してからするものだ。そのためにも相手を信じて直接付き合わない駄目なんだ。君はその努力を怠っているからいけないと言つているんだ」

「無理よ。そんな、他人を信じるなんて！」

悲鳴をあげるかのように、彼女は叫ぶ。体が震えていた。

他人を信じられない。その言葉と、乱しようで確信する。

皆敵、全員敵、誰もが敵、不安、不満、不易、不平、不逞、不徳、不粹、不恵、不実、不淑、不善、不良、不順、不当、不義、不正、不法、不埒、不律、不軌、不周、不信、不穩、不造、不弔、不吉、不祥、不幸、不合、不遇、不興、不快、不浄、不潔、オマエタチナンカ——

トモダチジャナイ！

「……これが、深谷さんの記憶」

虐めの質の悪さといい、頼る相手がいないことといい、そのあまりの凄惨さに吐き気が催してくる。高校一年生になりある程度精神が強靱になってきているはずの僕でさえこうなら、幼い深谷さんの心が直せないほどの傷を負ったであろうことは想像に難くない。

記憶は続く。

秘密で仕掛けたボイスレコーダー、いつものように始まる虐待、帰りの集会で再生される録音、青ざめていく全員の顔、皆が犯人ですという宣告、主犯格の引越し、手の平を返すクラスメイト、本当は嫌だったという弁明、最低、無様、殺意、ねえ。

どの口が言っているのよ。

私の友達は貴方たちのような屑じゃない。

加害者が馴れ馴れしくしないでくれる。

拒絶、孤高の確立、優越感、私立中学への進学。

今度こそ、裏切らない友達を——

記憶が、終わる。

「ぐう、うわ、ああああああ！」

僕は堪らず呻く。体中が痛みや違和感で襲われていた。霊体であるが故、精神的な傷が直接反映されるのだろうか。

壊れた雪だるま、中と外とを分けるかまくら、その意味を悟る。

無理だ、と思った。

こんな体験をした子にどうやって、他人を信じろと言うんだ。先程僕が言った意見なんて、事情を知らない第三者の勝手な言い分だと言われても何の文句も言えないじゃないか。

他人を救うだなんて。

そんな驕り、容易く吹き飛んでしまう。

たとえ最終的に死んでしまおうとしたって、夢に逃げようとしても何の不思議もない。それほどの、苦痛、悲壮、憎悪、そして絶望。

それを知って、僕は。

「……深谷、さん」

僕は、どうすればいいのだろう。どんな顔をして話せばいいのだろう。こんな体験をして、未だ深谷さんの心に深く根付くトラウマを直視して、何て言葉を投げかけたらいんだらう。

深谷さんは、既に叫び終わり、何かを悟ったような目をしてこちらを見ていた。

「私の記憶、見たのね」

「……うん」

「どうだった」

「……苦しかった。辛かった」

「分かったでしょ。だから私は、他人なんか信じられない」

私の気持ち分かったんなら、放っておいて。そう言つて、深谷さんは押し黙つた。

そうだね。君の気持ちは分かったよ。僕みたいに回想じゃなくて、あの時期に実体験したんだつたら、僕よりもつと、苦しかったろうね。辛かったろうね。

「……っ。深谷さん、でも、言わせてほしい言葉があるんだ」
僕は、けれど強く歯を食いしばり、深谷さんを正面に見据える。

「何？」

深谷さんも僕と視線を合わせる。その眼には、希望とか、願いとかは、映っていないように思えて。

ああ、やっぱり僕は、言うべきなんだな、と思った。

「ごめん」

嗚咽と共に、漏らす。深谷さんを直視したまま。

「ごめんね、本当に、ごめん」

謝罪を重ねる。謝つたつて、許されないことだろうけれど、謝らずにはいられない。

「いいのよ、分かってくれたのなら。だから独りにして」

「違う、違うんだ。分かつてなんじゃないんだ。分かっているよ。よになつていづつもりつてだけで、それを分かっているのに、こんな、こんなことをすることは、いくら謝つたつて足りないくらいなんだろうけど、ごめんね、ごめん」

「何よ。いいから早くどこかに行きなさいよ。許してあげるから」

違うよ、深谷さん。許さなくていいんだよ。僕が謝っているのは、これからすることに對してなんだ。

僕は、言う。正面から、自分の意見を言う。

心無い第三者の見解を、言い続ける。

彼女の痛みを知つて尚、攻撃を、追撃をする。

「やっぱり深谷さんは、自分で友達を作るべきだよ」
こんな残酷なことを言う僕を、どうか許さないで。

僕の言葉を聞いた深谷さんは、訳が分からないといった顔になる。

「どういうことよ。貴方、私の過去を知つたんじゃないの？」

「……知つたよ。走馬灯のように見て、ね」

それでも全然足りないだろう。

「じゃあどうしてそんなことを言うのよ」

「だつて、そうじゃないと、深谷さんの願いは叶わないじゃないか」

君だつて、氣付いているだろう。

僕の指摘に、深谷さんの肩が震えた。

「何を、言っているのよ」

「君の願いは、友達を作つて終わりじゃないはずだ。その友達と、一緒に遊んだりして時を共有するのが目的だろう」
「それは、もう一人の私が作つてくれた友達と一緒に」

「その友達を、君は友達と呼べるのか？」

彼女は、返答に詰まる。

僕はここぞとばかりに畳み掛ける。強気にならないと、気圧されてしまいそうだった。一度始めた攻撃の手を、止めてはいけなかった。

自分がやると、決めたのだから。

「例え本当に向こうが君のことを友達だと思っていなくても、君は友達としてその人を信頼することができるとか？」

「それは……」

「君はもう、とつくに悟っていたんだらう？ 過去を引きずっている限り。自分はまだ友達を作ることができないって。人の本心は誰も知ることができない。いくら言葉を重ねても、その言葉が信じられないんじゃない意味がない。それに本心が変わらないとも限らない。君が他人を信じるリスクを回避しリターンしか求めず、自分の理想の友達像を描いている限り、君に友達はできない。そしてそれを悟っていたからこそ、もう一人の自分に体を預けることもできたんだ」

「……………そうよ！」

彼女は吹っ切れたかのように叫び、僕を睨み付ける。冷えていた表情が、感情的に染まる。

「分かっていたわよ、そんなこと。友達が欲しくて欲しくてたまらないのに、どうしても他人を信じられなかったのは、私が一番知っている。だからもう、これしかなかったのよ。現実逃避して、夢の中で理想の友達と遊ぶしか、なかったの。夢の中

じゃないと叶わない夢だと思っていたから、私は、これだけのよ」

彼女は、夢を見せてくれたわ。

深谷さんの言う彼女とは、霊の深谷さんのことだろう。夢の中で夢を叶えさせる、というのはどうやら本当だったようだ。

「じゃあ今、胸を張って幸せって言える？ 空想の中ですか存在しない友達と一人遊びして楽しい？」

「……………ええ。楽しいわよ。少なくとも、沢山の友達の輪の中で孤立せざるを得ない現実には比べたらね」

理想を求めても辛いだけの現実から逃げ、夢を妥協する。彼女の選んだその道を、選ぶに足る理由を持つ決断を、僕はその理由を知っていて、しかし否定する。

否定、し続ける。

「なら今のままで満足しないで、先を求めればいいじゃないか。夢の中でしか叶わない夢を見るくらいなら、もっと理想を高くすればいいじゃないか」

「そんなの、無理よ。今以上なんて、夢にも現実にも無いわ」

「それは君が選択肢を狭めているからだらう！」

「激しい口調に、深谷さんは一瞬、硬直する。」

「君にトラウマを克服する気が無いから、限界が決まるんじゃないか。トラウマが絶対に治らないっていう前提があるからその程度で満足せざるを得ないんだらう」

「私のトラウマを直すなんて、本気？」

「少なくとも、夢の中でしか叶わない夢を夢見るよりかは現実的だ」

「全然現実的じゃないわよ！ 私が、克服しようとして一度も思わなかったわけじゃないでしょ！」

「でももう諦めているじゃないか！ 本当に叶えたい夢のためなら、一生をかけてでも克服しようとするればいいだろ。君は何年で諦めた？ 何年で夢を妥協した？ その程度の夢なら、いつまでも引きずっているなよ！」

「わ、私は、私は……」

首を振る深谷さんは、絞り出すように言う。

「だって、もう、耐えられなかったのよ。夢を持ち続けることが、辛くて、できなかつた。誰も味方が、いなくて、ずっと、一人で、独りで、どうしようも、なかつた！」

「それは君が味方の存在に気付いていないだけだ。両親は本当に味方じゃないの？ 他人は絶対に助けてくれないの？ 君は親友に裏切られたという事実ばかり見て、その他の面を、別の視点を、持っていないだけじゃないの？」

「別の、視点……」

「もう一度、考え直してみてよ。勇気があるかもしれないけれど、他人を、裏切るだけの存在だって妄信しないで、やむにやまれぬ事情があつて仕方なくそうしたんだとか、そういう可能性も探ってみてよ」

「……………嫌」

深谷さんは、ぶるぶると震えだす。

「もう嫌なの。寒い現実に、戻りたくないの。これ以上、凍えていたく、ない」

彼女の漏らした言葉は、彼女の夢の世界を、現実に対する認識を表していた。広大な雪原で、独りで寒さに耐えなければいけない。そんな、現実を。

現実をそういうものと思ひ、自らの夢の中で、自らが生み出した寒い世界で、凍えているのが彼女だった。

彼女の着ているコートが、厚手のズボンが、だんだんと薄れていく。

「もう一人の私は、私を温めてくれる。夢を見せてくれる。だから、もう、寒い思ひは、しなくていいの」

彼女の厚手の服が、霊の見せた夢の象徴なのだろう。寒い現実という環境ではなく、彼女の気持ちだけを変えるための、慰めの服。その服もまた、霊力でできているはずで、霊と距離のある今、その形を保てなくなっている。甘い夢が、温もりが、消えていく。

薄れていくその下は、袖の無い薄手のシャツと半ズボンだけという、寒々しい姿だった。

「だからもう、これ以上、寒い思ひを、させないで」

彼女は俯き、自らの体を抱いた。自らの認識する現実の寒さに、耐えられないで。

「けれど、これ以上暖かくもならない」

僕の言葉に、彼女は顔を上げる。

「もう一人の君は、君を温めてくれると言つたね。でも僕には、

君がどんなに厚着をしていても、君を寒そうに思えてしまうんだ。それは、ここが冬だからじゃないかな」

「知らないわよ。例えそうだとしても、どうしようもないじゃない」

絶対に変わらない現実。その認識によって寒さが、環境という一個人では何の影響も与えられないものとして発現したの
だろう。

「でも、冬はいつか終わるじゃないか。ここじゃないどこかは夏かも知れないし」

「それが何だっていうのよ！」

「いつまでも同じ場所に留まるなって言っているんだよ！」

僕は、何度目かの大声を発する。

胸が、痛い。

「昔起きたことに囚われすぎていて、傷つのが怖いからって現状維持に必死になって、そんなんじゃないかって経っても寒いままに決まっているんじゃないか。何でそんなことも分からないんだ！」

「分かっているわよ、そんなこと！ けど、もっと寒い思いをするかもしれないじゃない。それが嫌なの！」

「分かっているなら行動しろよ！ 結局君は寒さに耐えられなかったんじゃないか。だったらもっと寒い思いをするリスクを知ってでも、現状を回復させる方法を、暖かくなる方法を試してみれば良かったんだ」

「だから！ それができなかったんじゃない！」

「今からでもやれ！」

「何を、言って……」

「できないんだったら、できないまま終わらせようとするなよ。逃げるのは一度でもいいから他人を信じてからにしろよ」

彼女は再び俯く。体を震わして、首を振る。

「……………やめてよ」

「やめない」

「これ以上、私を責めないでよ」

「嫌だ」

「どうして！」

「決めたから」

僕は、胸の疼きを無視して、言う。

「君を説得して現実に戻すって、決めたから」

彼女は顔を上げて、僕を睨んだ。

「何で！ 貴方には関係ないでしょ！」

「ある。もう一人の君に襲われた。君の痛みを知った」

「放っておいてって言っているじゃない！」

「それに対する返答はNOだったはずだ」

「どうして？ どうしてよ……？」

彼女は、嗚咽を漏らす。

「どうして、私なんかのために、他人のために、そこまでするのよ？」

僕はそれを聞いて、ああ、と思う。

僕は彼女から、その問いが聞きたかったのかもしれない。

待ちわびた問いの、答えを、言う。

「君のためじゃないから」

「……………えっ？」

僕の答えに、彼女は混乱しているようだった。僕は続ける。
本心を。

「全部、僕の自己満足のためだから」

「自己、満足…………？」

「うん」

僕の言葉を繰り返す彼女に、頷く。

「君を説得したいって、連れ戻したいって僕が勝手に思ったから。それに対して君がどう思おうが関係ない」

「な、何よ、それ。私のためだとか、そういう感情は一切無いわけ？」

「最初はあったかもしれない。けれど、君の過去を見てから気持ちが変わった。これから僕がやることは全部、自分が後悔しないためのことなんだなって自覚して、やった」

「ちよっと待ってよ。今までのことは全部、そんなことのためだったの？」

「けっこう大事なことだと思うけどね。後悔しないための行動って」

「ふざけないでよ！ 私の気持ちを、少しも考慮せずにあんなことを言ったわけ！」

「考慮しているからこそその行動だよ。君の過去を断片的にでも

知ったからこそ、君のため、とかいうような恩着せがましいことをする気を無くすことができたんだ」

それとも君は、同情してほしいのかい？

僕の問いかけに、彼女は沈黙で返す。それが答えだった。

「君の過去を知る前だったら、いくらか同情するような言動をしていたかもしれない。けれどそれは逆効果だって気付いた。結局君の行動を肯定してしまっているっていうのも理由の一つだけど、実体験していない人が知ったような気で話す言葉は、君にとっては結局何も分かっていない人の発する煩わしい雑音なんだろうなって思った」

彼女は、黙ったままだ。

「だから僕は、君を否定し続けた。僕のエゴのために、君の理想を盾にして君を責め続けた。それは、だから、謝る」

ごめんなさい。

僕は頭を下げる。

「……………」

「……………」

お互い無言のまま時間が過ぎる。僕は頭を下げながら、もしや失敗したのでは、と不安になった。

何度も大声で相手を責めたし、客観的に見たら恐喝もいいところだろう。最後の方なんか彼女は嗚咽混じりだったし、それなのに更に責めようとして、うわあ、僕、とんでもないことをしちゃったんじゃないか？

「……………ねえ」

「はい！」

彼女の言葉に、内心びくびくしている僕は勢いよく顔を上げる。彼女は少し驚いたようだが、続ける。

「最初、責任がどうか言っていたわよね。あれはどういう意味？」

説得を始める前の言葉のことだろう。何故そんなことを聞くのか不思議だったが、尋ねられたからには答える。

「えっと、その時は、まだ君の過去を知らなかったから多少同情的だったかもしれないけれど、僕が一度、君を助けるって決めたから、辛くても最後までやり通そうっていう意味だったと思う」

「じゃあ」

彼女は、何かを思い切ったかのように、声に力を込めて言った。

「もし私を助け出せたとして、その後のことにも、責任をとってくれるの？」

「うん」

僕は即答する。それは、最初からそのつもりだった。

「いつまでもつきつきりってわけにはいかないけれど、君の望みが叶うよう、できるだけ協力はするつもり」

と、そこまで言っ、しまったと思う。

そうだった、僕は自分が誰だか明かしていないんだ。これじゃあ、僕が深谷さんを知っている人物として特定されちゃう。

「ああ、それはつまり、例えば君が他人に上手く話しかけられないときとかに、無意識的に勇気を出させたりだとか、うん、そんな感じで」

何とか誤魔化そうとでたらめを並べる。嘘を言うのは気が引けるが、深谷さんがそういうものだと信じてくれれば、悪くはならないだろう。

「……貴方も、もう一人の私みたいに、私の中にいるの？」

「あ、いや、いないんだけど、そう、もう一人の君に頼んで、そうさせたりするだとか……」

「じゃあ、貴方は一体、誰なの？」

「えっと、それは……」

僕は頭を回転させ、上手い言い訳を考える。広太のような頭があればよかったのに、いつもながらの言葉を心中で呟く。

「ゆ、勇気を出す手伝いをする、夢の旅人」

そしてこんな言葉を発してしまう。格好が格好だけに、かなり怪しい奴になってしまったように感じる。

しかし彼女は。

「そう、なんだ」

と言っ、頷いていた。そして、

「分かった。貴方を、信じる」

そう、続けた。

「………へ？」

間を抜けた声を出したのは僕だ。

「え、本当に、その、信じてくれるの」

「うん」

「でも僕、本当に酷いことを言ってる」

「でも、おかげで気付けた」

彼女は、その瞳に強い意志を宿して、言う。

「私、逃げてばかりだった。だから、今度だけは、向き合ってみる」

「あ……」

僕は、彼女の意思の強さを目の当たりにして、僕の言葉が彼女を動かしたんだと知って、嬉しくって、申し訳なくて、色々な感情が混ざり合って、

「ありがとう」

何故か、感謝を口にした。

それを聞いた彼女は、一瞬きよんととして、笑った。

笑った。

「こちらの言葉よ」

その言葉と同時に、世界が変わっていく。空を覆っていた厚い雲は消え去り、太陽の光が漏れだした。雪はみるみるうちに溶け、その下からは新緑が芽吹き始めた。まるでビデオを高速再生しているかのように、景色が変わってゆく。

「うわー！」

辺りが完全に春のような景色になると、僕は左足を引かれた。少女の黒い布が、僕を引っ張っている。

「え、どこに行くの？」

不安そうな彼女の顔が遠ざかる。どうして引かれているのか

わからないけれど、このまま何も言わずにさよならすることはいけないように思えて。僕は大声で叫んだ。

「大丈夫！ もう君の中で、冬は終わったよ！」

そして、彼女の姿が完全に見えなくなったと思った矢先、再び景色が一変する。

「あれ？」

そこは深谷さんの家の和室だった。ただし夢現の世界の中のように、景色は相変わらずぐにやぐにやしたままだった。僕は黒い布に巻かれたまま立ち尽くしていた。

「負けたわ」

下方からの声。見下ろすと、顔以外布に覆われた深谷さんの姿がある。

「お帰りマコト」

右方からの声の主は、袖が無く、裾の丈も更に短くなった和服を着た少女だった。体も布で包まれているとはいえ、これ以上布を使わせるのはいけないと思った。

「うん、たがいま」

とりあえず、挨拶を返す。僕も少女も無事であることを実感する。

「それで、私をどうする気？ 食べるの？」

床に転がる深谷さんの霊は、もう抵抗を諦めているらしい。僕はしゃがんで視線を合わせると、首を振った。

「前も言ったけど、僕は君を殺す気はないよ」

「じゃあどうするのよ。封印するの？」

続けてそう言うと、浮かべていた笑みが消える。

「夢現の世界は消えた」

少女はそう言うと、彼女を拘束している布を解きはじめた。同時に、僕の体を包んでいる布も解かれ、彼女の服として再構成される。

「え、でもまだ景色がぐにやぐにやしているけど」

「私が作っている」

そうか、夢現の世界をお互いに作って靈力によって競うんだっけ。

などと考えているうちに、少女の服が元通りになる。

「そうだ、夢の中では聞けなかったんだけどさ」

僕は立ちあがり、少女に向き直る。

「君の目的って、何？」

少女も僕に向き直った。そして夢の中のように、僕を指さして言う。

「貴方を、守ること」

「でも、どうして？ 僕のことを乗っ取ろうとか、思わないの？」

尋ねると、少女は頷き、

「私は、貴方の守護霊だから」

そう言って、消えた。同時に、夢現の世界から現実世界へと戻ってくる。

「……………守護霊？」

呟き、そう言えばと思いきり時計を確認する。部長が買い出

しに行ってからそれほど時間は経っていないようだった。夢の世界では時間の進みが遅いのだろうか、などと考えつつ、これからのことと守護霊の意味を再考しようとしたところで、足元で深谷さんが眠っていることを気にして、離れて考えようと足を動かしたときだった。

「そういうことか」

がらつと、襖が開く。そこに居たのは、ビニール袋を引っ提げ、相変わらずの笑みを浮かべた部長だった。

「部長、今までどこに！ ていうか、貴方は——」

「知っておる」

部長は手を伸ばし、僕の言葉を遮った。

「知っているって、何を」

「ずっと部屋のすぐ外におったのさ。お主の言いたいことも、ある程度は分かっているつもりじゃ」

「じゃあ」

「だが、今は少し待っておれ。彩花が眼を覚ます」

そう言われて深谷さんを見ると、丁度、身じろぎして目を覚ましたところだった。

「……………ここは？」

「おお、起きたか彩花。全く、急に寝てしまいおって。疲れておったのか？」

「ええ、と、私……」

困惑しているような彼女は周囲を見渡し、僕と目が合う。

「大丈夫、深谷さん？」

「……ええ、何だか、夢を見ていたみたい」

微笑んで尋ねると、深谷さんは考え込むようにしてそう答えた。臆気にしか覚えていないみたいだけど、どうにか現状は把握できているみたいだった。良かった。

「けれど、何だか、良い気分よ」

「それはよかつ、クシュン！」

話している途中でくしゃみが出てしまった。

「大丈夫？」

「うん。あはは、冷えちゃったのかな？」

心配そうに尋ねる深谷さんに笑って答える。

「何故冷えたのじゃ？ この部屋は暑くはないが、涼しいわけでもなからう」

しかし部長の言葉に失敗を悟る。しまった、深谷さんに正体がばれる！

「いや、その、言い間違えちゃった、あはははは」

乾いた笑いを上げる。深谷さんは無反応だ。どうやら特に気にしていないみたいだ。良かった……。

「とりあえず、儂が折角買ってきた飲み物を飲むのじゃ。少しぬるいがのう」

部長はそう言ってビニール袋からミルクティーと緑茶のペットボトル、エナジードリンクの缶を取り出してそれぞれ僕たちに渡した。

あれ？ 部長はいつ用意したんだろう？

疑問に思う僕をよそに、二人は自分の飲み物を飲み始める。

僕もそれに倣いミルクティーのペットボトルを開けた。

その後、五時半を告げる鐘が鳴り僕たちは深谷さんの家から出た。

彼女は玄関まで見送りに来てくれて、

「また、来てね」

と恥ずかしそうに言ってくれた。何だかとても、嬉しかった。

そして、帰路、隣で車が行き交う大通りにおいて。

「部長」

僕は、僕の顔を歩く部長に対し、切り出す。

深谷さんの家に居る間、部長が何者なのか、考えた結果を。

「何じゃ」

「今の部長の意思は、霊ですか」

部長は歩みを止め、振り返った。

その顔に、いつも通りの、笑みを浮かべて。

「何故、そう思う」

「考えたんです。もし僕が霊の意思だとしたら、他人の霊力をどうやって食べるかって」

「聞こう。話すがよい」

部長の言葉に、頷く。

「精神に影響が出ない範囲で食べると少ない、けれど実際に影響まで出してしまうと周囲の人間に怪しまれる。では怪しまれず、且つ大量の霊力を得るためにはどうすれば良いか」

部長は僕の言葉を聞いても、何も言わない。最後まで聞こう

ということだろう。

僕は続ける。

「僕の出した答えは、飼育です。自分とは別に霊の意思を見つけ、その霊が霊力を食べて成長するのを何もせずに見守り、肥え太らせていくんです。そして霊がある程度霊力を蓄えてきたところで、その霊の持つ霊力だけを食べます。そうすれば一人の被害も出さず、除霊という形で多くの霊力を得ることができます」

この仮説は、黒い布を使う少女が深谷さんの霊の意思だけを食べると言ったことから思いついたものだ。

「そして例え第三者が何らかの形でこの秘密を知ったとしても、その第三者にも協力すると持ちかけ、実際には裏で霊と共謀し精神的に殺すんです。そうすれば秘密は守られ、更に多くの霊力を得ることもできる」

違いますか、部長。

僕は目の前の部長に、いや、部長の霊に尋ねる。

「ふっふっふっふっふ」

部長は、笑った。

「あっはっはっはっはっは！ はっはっはっはっは！」

とても、面白そうに。

「認めるんですね？」

「ふっふっふ。中々面白かったぞ。そう推理するとはのう。いやはや、やるではないか。ひよっとすると、探偵稼業に向いてるかもしれんぞ」

部長はばちばちと手を叩いた。

「認めるんですね？」

僕は再度尋ねる。

「ふっ。じゃがのう、もう少し相応しい場所は無かったのか？ ここでお主が僕に襲われるという可能性は考えていなかったのか？」

「こういった開けた場所なら、少なからず証人がいます。部長が僕に近づいて霊力を食べ、その後僕が倒れたなら怪しむ人が出てくるはずですよ。それに、元々自分で行動するなら彩花さんを利用したりしないでしょ」

隣の車線を、車が通り過ぎる。部長の背後には、通行人だっている。ここで僕が倒れたら、たとえ証拠がなくても部長は怪しまれる。

「それで、お主はこれからどうするのじゃ？」

「貴方の説得は難しそうですね、文芸部から去ります」

「今の話を誰かに話そうとは思わないのか？」

「全て憶測です。証拠も何もありません。僕が変なことをすれば、今度は逆に僕が疑われます」

「そうか」

部長は、少し考える素振りをすると、何かを思いついたかのように手を叩いた。

「そうじゃ、では僕を説得してみてはくれぬか？」

「……どういふことですか？」

「何、説得と言っても僕の質問に答えるだけじゃ。全て答えて

くれたら、僕は霊を使って人を襲わないと約束しよう」

「……分かりました」

部長はとても楽しそうに言う。どういう意図があるかは分からないが、人を襲わない約束を信じるかどうかはともかく、質問に答えるだけなら危険はない、はずだ。

部長が右手の人差し指を立てる。

「質問その一、儂が疑われぬようお主を彩花に殺させようとしたのならば、どうやってお主と彩花を二人きりにできたのじや？」

「今日僕と一緒に彩花さんの家に行くとき、部長言っていましたよね？ 感情を、感じる事ができるって。パパ抜きなどで最後の一枚を揃えた方が勝つ状況なら、そういった感情の機微を知ることができれば、相手の手札が分かっているも同然ですから、わざと負けることもできたはずですよ。それで負けなくとも、また別の機会を窺えばいいだけです」

「ふっふ。質問その二、儂がわざわざお主に霊力などの説明をしたのは何故じや？」

中指を立てる。

「不可解な問題に直面した僕が、他人に相談したり記録するのを防ぐためでしょう。問題を解決できる相手として知識を見せ、任せれば大丈夫と思わせたいんですよ。そうすればもう、僕は何もしないでいいんですから、何かされる心配も消えるということですよ」

薬指を立てる。

「質問その三、彩花の家で儂はどうやって飲み物を持ってきた？」

「僕と校門で合う前に、深谷さんの家の前に置いたんですよ。今思えば、玄関の前にあつたビニール袋が、帰る時には消えていましたからね」

ぱちぱちぱちぱち、と部長は再び拍手する。

「いやいや、よく推理できているではないか。素晴らしいぞ」

「質問は終わりですか？」

「いや、まだあるぞ」

部長はますます笑みを深める。裂けてしまうのではないかと思える程だ。

「質問その四」

部長はまた右手を出し、親指以外の四本の指を全て立てた。

「儂は何故、彩花にお主を襲わせようとした？」

「……え？」

僕は、思わず聞き返してしまつた。

「じやから、何故儂は、お主が襲われる可能性があるぞとおるのに、お主と彩花を二人つきりにしたのか、と聞いたのじや」

「それは、部長自身の失態だったんじゃない？」

「質問その五」

僕の曖昧な解答を遮るように、部長は親指を立てた。

「儂は何故、その時彩花からお主を助けた？」

「そ、それは……」

「そうだ、深谷さんはあの時部長が助けたって言っていた。けれど部長には、その理由がない。助けた後に、殺す理由ができたとしても辻褄が合わない。」

「僕は、黙ってしまおう。」

「まだまだじゃったのう、お主の推理は」

部長は笑いながらそう言った。

「まさか部長、最初っから推理の穴に気付いていたんですか？」

「うむ。そもそも僕は霊じゃないし。それに霊の意思は注目されることをさほど気にせんから、そんな回りくどいことはせぬよ」

「どうしてそういう結論が出たのか気になったから敢えて言わなかったがの、と悪ふざけをする子供のような笑みを浮かべて言う。」

「まんまとしてやられてしまった。」

「じゃあ、部長が除霊を生業にしているって、本当ですか？」

「うむ。本業は女子高生じゃがのう」

腕を組む部長の前に、僕は大きく息を吐く。強張っていた心と体が弛緩していく。

「どうした。がっかりしたか」

「いえ、安心しました。部長は、やっぱり僕の味方だったんですね」

「うむ。残念ながら、当初はそうじゃなかったがのう」

「……当初は？」

「ふむ、面白い推理を聞かせてくれたのと、彩花の件で色々

してもらった礼じや。お主には全てを話そう」

隣に來い。そう言つて、部長は歩き出す。僕は慌てて走り、部長に並ぶ。

「先ずは、そうじやな、お主の除霊から話を始めようかの」

「僕の、除霊？」

部長の言葉に、驚かざるを得ない。それはつまり、僕が霊に意思を乗っ取られていたということだ。

「うむ」

部長は首肯する。

「お主がまだ、文芸部に入部する前の話じや。お主が入学してすぐ、僕はお主の存在を、いや、お主の霊の存在を知った。他人を殺めてはおらなかったようじやが、霊力が以上に強い何とも特殊な存在じやった。とても手強かつたのう」

「僕が、ですか」

それを聞いて、怖くなるとともに少し安心した。僕は人を食い殺したことはなかったらしい。

「そうじや。そして僕は何かお主の霊を封印したのじや。お主の中ののう」

「霊を倒しきれなかったんですか？」

「そうじやなあ、いや、実を言つとな、僕、お主の霊に敗けておるのじやよ」

「ええ！」

部長が、負けた？ それなのに部長は何故喰われていないの

だろう？

「霊との戦いで死を覚悟したのはあれが初めてじゃったの。ともかくにも儂は敗れ、喰われる直前じゃったのじゃが、突然お主の霊が、やめた、だとかなんとか言つて、儂に封印をせがんできたのよ。儂は訳が分からなかつたが、封印できるものならそのまま封印したのじゃ」

「はあ」

「僕の霊つて本当に変わつていたんだな。けれど、部長を殺さないでくれて良かった。

僕は、僕の夢の世界のどこかにいるであろう僕の霊に、心中で札を言う。人殺しをしないでくれて、本当に有難う。

「そこで、今回の事件になる。儂がそろそろ彩花の霊を除霊しようと思つた時だつたのじゃが、お主の霊力が強まつていたの
のう」

「え、そうだったんですか？」

「そうなのじゃ。儂は封印が解けたのかと思つたのじゃが、お主の意思は変わつておらぬから、どういふことかと頭をひねつたのじゃ。しかし下手に夢現の世界で接触して再びお主の霊力と会いまみえるのも、一度会つた霊が相手なだけに、前回と同じことが起こる可能性もあつたから、儂は何もできなかったのじゃ。そこで」

「彩花さんに僕を襲わせた、と」

部長の答えを代弁する。

「その通りじゃ。何もなければ助ける気でいたが、本当に何も

起きなくてのう。助けようと彩花の夢現の世界を打ち消したのじゃが、消える直前、お主の霊力が彩花の霊体を突き飛ばしたようでのう」

「あ」

確かにあの時、深谷さんは尻餅をついていた。それはそういう理由だつたのか。

「あれ、でも霊体が突き飛ばされたのに、何で本体も動いたんです？ あくまで錯覚、でしたよね？」

「突き飛ばされたと錯覚されて、無意識に体が動くのじゃよ。話の腰を折るでない」

「す、すみません」

「あーおほん。それを知り、儂はやはり何らかの形で封印が解けてしまつたと結論を出した。しかしやはりその意図がよく分からぬ。人を襲う気も、元々の意思を乗っ取る気も無い霊など儂は知らなかつたしの。じゃから彩花に協力する振りをして、再度お主を襲わせ、お主の霊の反応を窺おうとしたのじゃ。お主に霊力のことを教えたのは、お主の推理通り、儂にある程度任せてもらうためじゃ」

「そういうことだつたんですか。それで、原因はわかつたんですか？」

「うむ。昨日父にヒントも貰つたしの」

「へえ。つて、最初から聞けばよかつたじゃないですか」

「仕事をしに出かけておつての。つい昨日戻つてきたばかりだつたのじゃよ」

「仕事って、除霊——」

「うむ。神社の神主もやっておるぞ」

部長の父親、一体どういう人物なのだろう？ 想像できない。

「ていうか、部長の家って神社なんですか？」

「そうじゃよ。あ、もう、だから話の腰を折るなというのに」

「こ、ごめんさい」

「ごほん。それで、お主の霊力が強まった原因じゃが、それは守護霊が覚醒したことじゃな」

「守護霊の、覚醒？」

そう言えば黒い布を使う少女が、自分のことを守護霊だと言っていたけど、あれと関係があるのだろうか。

「かなり珍しいことなのじゃがの。死ぬ直前の生きたいという意思がその人間の持つ霊力に影響を与え、その人間が死に霊力が空気に拡散する際、その霊力の大半が死ぬ人間の近くにいた人間に吸収されることで、後々その人間の霊力が意思となり、近くにいた人間の中で具現することがあるのじゃよ。あとは霊力が意思になると同様、無意識に霊力を食べて成長するが、そういった人間は元々の、生きたいという意思が強いため、宿主の意思を乗っ取り、独立しようとは思わないのじゃ。あくまで生きることが主題じゃから、宿主を霊力による被害から守ってくれる。それを守護霊と呼ぶのじゃ。逆に恨みや憎しみを抱いたまま死に、周りの人間にその意思が霊力となって影響を与え、別人のように変貌してしまうようなこともある。そうやってしまったものは憑き物などと呼ばれておる」

「じゃあ、僕の中の少女は、昔僕の近くで死んじゃった人、なのか」

「そういうことになるのう」

「でも僕、あんな子、僕見たことありませんよ？ 僕のそばで他人が死んだっていう記憶もありませんし」

「守護霊として具現し意思を持つようになれば、少なからず自我があるのじゃよ。その自我で、自分がどういった容姿を持つ存在なのかを決め、それが容姿になる。それはわずかばかりに残った生前の己の記憶かもしれぬし、お主の経験から影響を受けたものかもしれぬ。つまりお主が実際に会った者の人相とは異なる可能性もあるということじゃ。記憶がないというのは、シヨックで忘れたか、幼すぎて覚えていないということかも知れぬ」

「……もしかして、母さん？」

僕は思い出す。父さんと母さんは、僕の目の前で、僕を迎えに来てくれて、二人の乗った車に、対向車が、何故かぶつつかって、僕は慌てて駆け寄って、それで——

「……泣いておるのか」

「え？」

気が付くと、涙を流していた。もう克服したと、思っていたのに。

「安心せい。お主に宿る霊力は、邪なものではなかったぞ」

「……はい。ありがとう、ごさいます……」

僕は腕で涙を拭いた。

「しかし、彩花の除霊まで行ってしまうとは驚いたぞ。あの時ばかりは出ていくべきか迷ったものじゃ。じゃが結果的にお主を危険な目に遭わせたこと、申し訳なく思う」

すまなかつた。そう、笑みを小さくして言い、部長が頭を下げる。

「ああいえ、いいんです。あれは、僕がやりたかつたからやっただけですから」

「そう言つて貰えると助かる。しかし本当に大したものじゃつた。夢の世界で何をしたのかは分からぬが、霊を説得するとは。儂でもやつたことは無かつたことじゃ」

「深谷さんを上手く説得できたからですよ。一時はどうなることかと思ひました」

「それにしても、その霊力と言い、度胸と言い、ふむ……」

部長は笑つたまま思案顔をする。そして何かを思いついたのか、こちらに満面の笑みを浮かべた顔を向けた。

「明日、部室に來い。命令じゃ」

「え？」

「ではの！」

そう言つて部長は走り去る。気が付くとそこは学校の目の前だった。

「……また明日」

僕は既に見えなくなった背中に向かつて、ぼつりと言つた。

非日常を体験した日の夜、自宅ではいつも通りの日常が待つ

ていた。久しぶりに父さんが家に居る日曜日の、変わらない風景や空気はとても暖かいものだった。深谷さんにも、こういう空気を感じて欲しいと思つた。

そして、夜。

色々あつた今日の出来事を思い返そうとするがそんな気力も無く、ベッドに倒れこんでからももの一分もかからず眠りにつく、直前。

「お休みマコト」

少女の聲が、聞こえた気がした。

「また、ここか」

僕は三度目となる水の中の覚醒を体験する。ここはもしかして、僕の夢の世界なのかもしれない。

そして僕の目の前に、少女が現れる。

「今日は、ありがとう」

僕は彼女に頭を下げる。

「お礼は要らない」

少女は相変わらずの無表情で応えた。

「ねえ、聞きたいんだけど」

「何」

「君は、僕の母さん？」

僕の問いに、しかし彼女は首を振つた。

「違う」

「え、じゃあ、君は」

「大丈夫」

少女は、続けようとした僕の問いを遮る。

そして、淡く笑った。

「私たちは、貴方の味方だから」

私、たち——？

それがどういう意味なのか尋ねようとした瞬間、世界が光り輝いて、少女の姿も僕の体も光に包まれていく。

気が付くと、これもまたいつも通り、ベッドの上だった。眠気など一切感じない、爽やかな覚醒。

「……………どうということ、いや」

僕はベッドから降りる。これは多分、考えなくてもいいことだろう。彼女は、僕を救ってくれた。正体が何であれ、それで十分だと思う。

窓の外を見る。突き抜けるような青い空が広がり、蟬がけたたましく、変わらず暑い夏の朝だった。

「今日からまた、変わらない日常が始まる」

僕は呟き、それを確信すると、部屋から出た。

「お主は今日から僕の除霊に付き合うのじゃ」

部屋に入った僕に向けられ放たれた第一声だった。

「……言っている意味が分からないんですが」

というより、分かりたくないんですが。

「分かりやすく説明するとな」

「しなくていいです！」

僕は部長の言葉を拒否する。

「いやいや、だって待つてくださいよ。ようやく僕の非日常体験は終焉を迎えたわけじゃないですか。何で続けようとするんですか？」

「安心せい。非日常も続けておればいつの間にか日常になっておるから」

「答えになっていません！」

「仕方ないのう。ちよつと待つておれ」

そう言う部長は何やら大きな画用紙を鞆からだし、それを持ってたま僕に近づくと、

「あー、平坂、真、殿。貴君は今回の除霊試験において、その技能の非凡さを示し、問題を進んで解決しようとする行動力、物事を冷静に判断できる頭脳力、何より人を助けようというひたむきな意思を何があっても持ち続ける不屈の精神力が認められ、除霊師としての資格を十分に有す者であることを、ここに証します。おめでとう」

そう校長先生ライクに渡された画用紙には、今部長が言った言葉は一言も書かれておらず、マジックでただ一言。

『秘蔵映像を流出されたくなければ従え』

そんな、脅迫文がそこにあった。

「部長、これは一体」

「だから、今言ったじゃろう？ お主は見事、試験に合格した

のじゃ。そんなお主には除霊という素晴らしい仕事をする権利が与えられたのじゃよ？ もっと喜べ」

「いえ、だから、この秘蔵映像というの？」

「何じゃ、全く。そんなことを気にしておって」

部長はぶつぶつと、しかし笑いを堪えるようにそう言うのと、元の席に戻り、鞆から今度は、ビデオカメラを取り出し、僕に見せるようにした。

「……………それは？」

「ぼちつと再生」

部長が再生ボタンを押し、動画が流れ始める。そこに映っていたのは、別アングルで撮られていた、文芸部に入部せざるを得なくなつたあの映像だった。

「……………部長、映像は、破棄したんじゃ」

自然と、声が震える。

「お主たちに見せたカメラの映像は破棄したのじゃが、思わぬ場所に別のカメラがあつてのう。儂も仕掛けたのを忘れていたそのカメラに、あの時の映像が映つておつたのじゃよ」

「……………」

大量の冷や汗が流れる。まさかまだ、そんなものが存在していたなんて…………。

「どうにか、どうにか破棄していただけないでしょうか…………」

僕は頭を下げる。

「そうじゃなあ、お主の願いを聞くのはやぶさかではないが、お主の望みばかり聞くのも癪じゃし、儂の願いも聞いてくれぬ

かのう？」

完全に確信犯だった。

「それ、流出させる先は…………」

「甘×夢同好会というところじゃ」

僕は、抵抗を諦めた。

「除霊のお手伝い、喜んでお受けいたします…………」

「おお、そうか！ そう言ってくれるとありがたいのう」

にやにやとした笑みを浮かべて、部長は僕にカメラを手渡す。くそ、腹いせにメモリを全消去してやる。

ん、この映像は、もしかして…………。

「これ、深谷さんが入部する原因になつた動画も入っているんですか？」

「もしかしたらそうかもしれないのう。ああ、そう言えば彩花の

映像はすごかつたのう」

「すごかつたつて、…………何がですか？」

「ほう、聞きたいののか？」

「……………」

いや、これは聞かない方がいい。そして当然、見ないほうがいい。そうに決まつている。

けれど、なんで消去できないんだ…………？

いや、消せ、消すんだ。消去ボタンを押すんだ！

「失礼します」

そのタイミングで、深谷さん登場。

「あ、深谷さ…………」

ピッ

「おお、彩花か。丁度良いところに来たのう。今真がお主の秘蔵映像を見ておるところじゃよ」

「秘蔵映像……？」

「いやいやいやいや深谷さん、誤解しないで。ちゃんと消去して……」

『キヤツ！ な、何よこれ、絡まって、動けない！』

『おお、良い具合に絡まっておるのう。うーむ、だが少し物足りないのう。ここはもう少しチラリズム精神に則って……』

『ちよ、ちよつと、何するんですか！』

「ちよつと、何、見ているのよ！」

「ええええええ！ あれ？ 何故に再生されていて」

「この、バカあ！」

そして飛んでくる深谷さんのグーパーン。

僕の日常生活は、ここから変わっていくようだった。

後書

こんにはは。ジョーズです。この作品がちゃんと掲載されているかどうか不安です。

今回、自分の作品の最高ページ数を大きく更新しました。同時に、べ切もかなりぶつちぎりしました。多分間に合うはずですが、本来出すべき場所でのこの作品ひいては他の部員が汗水流して書いた作品が出ないなんてことを考えると、とても怖いです。夢の中の話は昔から大好きで、今回設定を深めにして長編に挑戦してみました。まさかこんなに長くなるとは思いませんでした。もし作品を全部読んでからこの後書を読んでくれる人がいらっしやれば、感謝してもし足りません。読んでくれて本当に有難うございました。よろしければ感想下さい。

この作品は、実のところ続編があります。今はまだ頭の中のアイデアですが、主人公真の守護霊や封印された霊の正体に迫る、部長の除霊の話も含めた過去編と、真の友人広太の霊の話、真の義理の妹花奈の霊の話、生徒会会長の霊の話、など色々あります。機会があったら書こうと思います。

また、霊力の設定は只今構成中のハイファンタジー小説にある魔力というものの設定に類似する部分があります。しかしハイファンタジー小説と違いこの小説は現代を舞台としておりますので、霊力の設定を上手く伝え切れることができたか不安です。

それでは改めて、ここまで読んでくれてありがとうございます。この作品を読破できた貴方なら、他の部員の作品も読み

切れることもできるでしょう。是非とも、そちらもあわせてお読みください。

ではでは、ジョーズでした。

終わりに

ここまでお読み頂き誠にありがとうございます。私共の作品の数々はいかがでしたでしょうか。少しでもお楽しみいただけたらそれに勝る喜びはありません。

これからも精力的に執筆活動を続ける所存ですので、またどこかでお目にかかれる日を心待ちにしております。

ご感想、ご要望などがありましたら、お気軽にご連絡下さい。

代表…ジョーズ

漆 第十二号

二〇一四年 八月十五日

東京農工大学文芸部

noukoubungei@gmail.com

印刷…ちよ古つ都製本工房様